魔法少女リリカルなのは～～お昼寝大好きな天才～～

スティグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～～お昼寝大好きな天才～～

【Ｎコード】
Ｎ２４１７Ｎ

【作者名】
スティグマ

【あらすじ】
機動六課の解散から二年・・・メンバー達はそれぞれの道で活躍していた。

そんな中、ある執務官は無気力な少年と会う。

年中無休で寝ていたい少年と、とある執務官が一緒にお仕事する話。

※これはｓｔｒｉｋｅｒｓから2年後です。

オリジナル無理と言う方は回れ右してください。

あと伝勇伝要素は名前と能力ぐらいです。それでもいいのなら読んで下さい。

僕の名前のってないよ

「眠い・・・・」

僕がここに来て多分十年。もしかしたらもっとかも。

壁一面が石で窓は付いてない。外の景色なんて邪魔だから見えないほうがいいけど。

ていうかここ地下だから景色も何も無いか、ハハハ。

年中無休で水の”ポチョン”って音が聞こえる。いい雑音になってすばやく寝れる。

明かりは上のちっさい電球一つ。まあ明るすぎても困るんだけだし。

「うわぁぁぁぁぁぁああ!!」

「大人しくしろ!!」

「いやだぁ!!もう俺はこんなところにいたくねぇよぉぉお!」

うるさい目障りな声が聞こえてくる。

面倒に思いながらも檻の隙間から見てみると、囚人の一人が看守の人と、もめていた。

なんだまたこれか。毎日これだからほんとに迷惑だ。

「チッ。おい首輪の電流を流せ」

「ハッ」

看守の部下らしき人が手元のボタンをポチッと押す。

すると、もめてた囚人の首輪からビリビリッ！と電流が流れる。

「グギャアアアアア！！」

その囚人の悲鳴が響く。ここは地下だから音が反響する。マジうるさい。

まあこれで騒ぐ囚人は大人しくなる。

おおっとここの説明をしていなかった。

ここは次元犯罪者を多く収容する次元世界『ラグナロク』

はた迷惑な名前だよね。何、黄昏（ラグナロク）って。まあこの名前にも納得せざるおえないけど。

なんたってここはSランク次元犯罪者ばかり多く収容する場所だし。

でもここに来る奴らは、大体さっきみたいに発狂して最終的に自殺したりするヤツばっかり。

大体の人は二ヶ月でヘブンへ旅立って行く。度胸無いよね～～まあその方が静かでいいけど。

そんな事で年々大きくなって、収容されていく人数も増えてホント迷惑。

いっそ死なせるなら絞首刑にでもしてくれ。そうすれば無期懲役の僕らは静かでいれる。

ちなみに僕は多分十年ここにいる。

だってここ昼寝し放題、タダ飯、最低限の生活確保ができるからね～～。

働いたら負けと思ってる僕にはここ自体がヘブンだね。

おおっと。今僕の事ニートと思った人。それは間違い。

そういう事はＮＴ（ニート）専用機でファンネル打って戦争してる奴らに言ってくれ。

そういえばスゴイＳランク犯罪者が収容されたって聞いたけど・・・誰だっけ？

確か名前が・・・ジェ・・・ジャ・・ジェロ？ジャイロ？で・・・スカ・・・スカ・・・スカシテルディ？

ジャイロ・スカシテルディ？ネーミングセンス無いなこんな名前付けた人。

そんな感じの人と、美少女が何人かが何年か前に。戦闘機人らしい。

「まあどうでもいいけど・・・・。またお昼寝でもするか」

僕はまた布団を被り寝る準備。

飯の時間はまだだし。特にやること無いし。お昼寝大好きだし。

しかしそんな安眠を妨害するかのように、ギギィィィイイ・・・

と檻のドアが開く。

「立て。面会者だ」

「はいはい・・・・・」

電流流されるのは嫌だったからしょうがなく立って、アクセサリー

のリミッターを付けられたまま、

看守の案内で歩いて行く。

ここは地下２００階。一番最下層だ。一番危険な次元犯罪者達がい

て、一番広い階でもある。

なぜ知ってるかって？ふふん、それはね・・・たった今エレベータ

ーで、上に向っている最中に見えるからさ、他の階の広さが。

しかし改めて比べるとホント広いよな２００階。他の階の五倍はあ

るぞ。例えるなら東京ドーム５個分だ。

なぜ東京ドームを知っているかと言うと、僕の出身世界が地球だか

ら。

「歩け」

何時の間にか一番上の階まで来ていたので、面会室に案内される。

「ここだ」

はいはい・・・と心の中で呟き中へと入る僕。

そこには・・・・・。

「やあ、久しぶりだね」

「はぁ～～・・・・。また新婚話でも聞かせに来たのかい？クロ猫ヤマト」

「だから！その呼び方はやめろといつも言ってるだろ！！」

「え～～・・・いいじゃんか黒猫。不吉を届けるっていわく付きだし」

「君にとって僕はそんなに邪魔かい？」

「ＹＥＳ♪」

「はぁ～～～・・・・」

ため息をつくクロネコ・・・もといクロノ・ハラオウン執務官じゃなくて提督。

「そういえば提督昇進おめでとう～～パチパチ」

「いつの話をしているんだ・・・・」

「ん?今が初めてじゃ無いっけ?」

「一ヶ月前にも同じことを言われた!!その前もだ!」

「あ、そう。で?わざわざ僕のお昼寝タイムを邪魔したからには、それ相応の用事だよね?」

「それも一ヶ月前に言われた・・・・。ま、それはいい。それよりも大事な話だ」

「正直聞くのめんどくさいけど、一時間ぐらい暇になるから暇つぶしに聞いてあげよう」

「なぜ上から目線なんだ・・・話が進まないじゃないか」

「だったらさっさと喋ろう」

「わかった。実は君に手伝って「NO!!」・・・・せめて最後まで言わせてくれ」

「返事はNOだね。面倒し。働いたら負けだし」

「君のその持論は変えた方がいいよ」

「何を言うのやら。僕はこの信念に誇りを持ってる」

「それを世間に言えば冷たい眼で見られるな」

「僕は僕の信念を貫く!」

「その言葉だけ抜き取ればカッコイイな」

「ふっ。僕の信念は杉の木に傷をつけることぐらい容易なこと」

「大体の人は傷をつけれるぞ」

「そんな僕の信念が砕けることは決してない！」

「どこからくるんだ？その自信」

「やめろよぉ。そんな羨望な眼差しで見るな。照れるじゃないか」

「この会話で羨望の眼差しができたらすごいな」

「クロノよ。確かにわしに嫉妬する気持ちは分かる」

「おい、誰だアンタ。どっからきたそのキャラ」

「しかしお主ではわしになることはできん」

「ありがとう。それ聞けて安心したよ」

「しかし！わしを師にすればそんな不安も一挙に解決！！」

「君を師にした方が不安だ」

「さあ！クロノよ！入会金十五万円、一ヶ月おきに二十万円でわしが鍛えてやろう」

「何を鍛えるんだ。ってか金をぼるな」

「鍛える内容はもちろん『脱サラリーマン！でもニートになるな！』に決まってるじゃろう」

「決まっていたことに僕はビックリだ」

「そうか。やはりおぬしもやりたいと思ったか」

「なぜこの会話でその結論にたどり着くか僕は聞きたいな」

「しかしこの道のりは長く険しい。それでもおぬしには貫き通せる覚悟があるか？」

「ないな」

「よし・・・覚悟があるなら、わしは全力を持っておぬしをサポートしよう！」

「お前さっきから僕の言葉聴いて無いだろ」

「ではまずは入会金十五万から払うのじゃぞ」

「なんの会に入るんだ。それとその爺キャラいい加減やめろ」

「金が先だ！」

「なんで金を払う必要があるんだ？」

「ふぅ・・・語ったらなんか疲れたわ。おやすみクロ」

「こら。一方的に語ったら猫をあしらうように眠るな」

「何？まだ僕の『脱社会人！でも引きこもるな！』について聞きたい？」

「生まれてから一度も思った事は無いな」

「仕方ない。また語ってあげよう。ほかならぬクロノの頼みだからな」

「じゃあ今すぐ僕の話を聞いてくれればありがたいな」

「却下だね」

「即答だな」

「何せこれで一時間潰そうとしてるからね」

「今、僕は生まれてから一番無駄な時間を過ごしているんだが」

「そう言ってくれると僕は嬉しい」

「僕はそんなに嫌われているか？」

「ＹＥＳ♪」

「・・・ふぅ。なのはがいればＳＬＢ（スターライトブレイカー）で吹っ飛ばしてくれるにな」

「あれれ？クロノ君？君には妻がいながら他の女性の事を思ってる

んだね」

「訂正しよう。なのはがいなくても僕は君をボコすだろう」

「おお～～怖い怖い。でさ、そろそろ本気で帰ってくれない？このやり取り疲れた」

「はじめたのは君だけどな」

といって懐からいろんな資料を出す。

「なに？ファンレター？それならそうと先にいってよ」

「この状況でそんな事を言えるなんて君は重症だな」

「じゃあラブレター？」

「・・・・・そろそろ真面目にしろ」

ちょっとキレながら一つの資料を朗読する。

「君の罪状はロストロギア《プラネット》を初めとする複数のロストロギアの違法所持。
それと違法次元航空機の開発。質量兵器の違法所持。その他諸々で計三十の罪状がある」

「そうだっけ？覚えてないや」

「・・・・話を戻すぞ。そして裁判の結果、君は無期懲役。ここで死ぬまで生活する」

「いいトコだよ。クロノも来る？時々話し相手がほしいんだ」

「遠慮するよ。それと話を途中で折らないでくれ」

「はいはい・・・続けて」

「まずはこれを見てほしい。二年前の情報だ。君は外の情報をあまり知らないだろうからな」

「どれどれ・・・あ、ジャイロ・スカシテルディがいる」

「一体誰だそれは・・・ジェイル・スカリエッティだ」

「そうそうそんな名前。でもそれが何？」

そう言って資料を返す。興味ないし。

それを受け取り懐にしまう。便利だね懐。構造どうなってんの？四次元ポ○ット？

「まずは最初の話に戻りたい。君に手伝ってほしいことがある」

「僕は犯罪者だよ？罪状は三十。そんな極悪非道な僕に頼むのは間違いだよ」

「・・・・・質問を変えよう。君にここを出たいという意思はあるか？」

「さあ？どうだろうね。ここより素敵な場所があれば出たいけどね」

「・・・わかった。ここより素敵な場所を用意する」

「・・・・・・・クロノ。いい加減やめたら?」

「・・・・・・・・」

「僕がボケてる理由は分かるだろう?僕は犯罪者、君は提督。天と地の差じゃないか。まだ昔の事を引きずってるなら、僕は気にしていない。それでいいでしょ?何が不満なの?」

「不満があるとすれば・・・・・・それはすべてだ!!」

バンッ!と机を両手で叩くクロノ。

「何故君がここにいなければならない!?君は悪くない!本来なら君は英雄であるはずだ!!
それを・・・!」

「気にして無いっていってるじゃん。英雄なんて興味も無い。このままひっそりと死ぬだけだよ」

「なんでそう全て割り切れる・・・・!」

「割り切るも何も。これが現実だし。罪を犯したことには変わりない」

「違う!間違った真実は真実じゃない!」

「真実はいつも一つ!!とでも言いたいわけ?」

「・・・そのニュアンスは気になるが確かにそうだ」

「どこの名探偵さんだよ。真実を決めるのは所詮人さ。大多数の人がウソをホントといえば、それは真実になる。人には自分達を正当化する都合のいい真実がほしいんだよ。例えそれが歪んだ真実でもね」

「そ、それは・・・・・・」

「この状況がそれを証明してるよ。人は時にウソにすがり、自分を正したいのさ。そうじゃないと自分が壊れるからね」

「・・・・・・・・・」

「僕はこれで満足してる。・・・いや、もう満足するしかないというのが正しいかな」

「・・・・・間違った真実ならそれを正せばいい」

「できれば苦労は無いよ。もう君は真実じゃないと人は言うだろうね」

「確かにそうだ。だが僕はそんなに諦めが良くない」

素敵な笑顔でいってくるクロノに思わず笑いそうになった。

「そんなに理由で真実と戦うの？」

「ああ、確かにそうだ。だが君を助ける理由なんてそれぐらいで充分だろ？」

「言ってくれるね・・・いいよ。面白そうだから君の話はＯＫと返事しておくよ」

「前言撤回は？」

「あるかもね」

「そこはないと言え」

「はいはい・・・ありませんよ」

「わかった。それじゃあ――――――――――」

クロノは立ち上がった。

「君は釈放、自由の身だ」

「・・・・・はあ？」

これから僕はどうなるんだろうか・・・？

まあ面白ければそれでいいけどね。あと昼寝できればサイコー。

僕の名前のってないよ（後書き）

感想、誤字脱字あったらお願いします。

シャバだぜ！外だぜ！

いつもの通り僕は囚人部屋で昼寝をしていた。

囚人服は白黒のラインの入った、おそらく皆さんのご想像通りな服を着ている。

「起きろ」

看守がいきなり僕を起す。僕が何したって言うんだ・・・。

なんて口に出したらビリビリッ！なので言わないけど。

エレベーターに乗ってる間暇なので、ここについてもう少し詳しい説明。

ここ『ラグナロク』は、Ｓランク次元犯罪者ばかり扱う次元収容所だ。

凶悪な犯罪者が多く集まり、収容所としての広さは次元世界最大。

世界全てが刑務所と言うなんとも無駄に広い世界だ。

さらに地上では飽き足らず、地下まで食い込んで、今では地上より地下の方が規模が大きい。

囚人には必ずついている、首輪と手首のアクセサリーがリミッター

なので、本来の力の1割も出せない。はた迷惑な話だ。
ここに来る奴らは大体死刑囚か、無期懲役で来るかのどちらか。
つまり最後の生活場所なんだよね。
普通なら・・・・・。

「入れ」

「はいはい・・・・・」

そして面会室にはいる。

「やあクロノ。暇かい?」

「君のせいで全然暇じゃないな」

「そりゃ良かった」

「無駄話はここまでだ。君の釈放の手続きが整った」

「おっ、マジで?ドッキリ?」

「悪いがマジだ」

「おお~~久々のシャバだぜ~~って僕いつからここにいるんだ?」

「確か今年で十周年だ。祝ってやろうか?」

「めでたいね～。祝う気があるなら金くれよ」

「いやだね」

「祝うんじゃないのかよ！」

「ウソに決まってるだろう」

「ヒドッ！」

「まあそれはおいといて・・・・前に言った通り、君にはある事件を手伝ってほしい」

「ええっと・・・なんだっけ？」

「はぁ～～・・・・・・ある次元組織の調査だ。詳しいことは分かっていない。分かっていることは三つ。
一つは質量兵器を使うこと。
二つ目は管理世界を中心に活動している。
三つ目は使う武器が見たことも無い武器と言うことだ」

「見たこと無い？ああ、なるほどそれで僕か」

「そう。僕の知る限り、君より頭のいい人物はいない」

「うれしいこといってくれるじゃん」

「話を戻そう。君には二つの道がある」

「道？」

「一つは執務官の補佐となりその組織を追うか。もう一つは僕の直轄の部下となりその組織を追うか」

「執務官ってだれ？」

「・・・これは言いたくないが・・・。僕の妹だ。前に話しただろう？」

「ああ。クロノにロリコンのレッテルが貼られた・・・・」

「それは君が勝手につけただけだ！！」

「はいはい・・・で？強いの？」

「愚問だな。オーバーSで2年前ジェイル・スカリエッティを逮捕したんだ。実力は申し分ない」

「じゃあそっちにする」

「・・・一応理由を聞こう」

「男の部下より、美少女の部下の方がいいから」

「・・・変わらないな、君も」

「こんな場所にいれば、変わるきっかけも無いからね」

「そうか・・・。それと君は今日から違う名を名乗らなければなら

無い」

「へぇ～～。どんな名前？」

「ライナ・リュートだ。君の名前を一部変更した」

「ほんとに一部だね。っていうか何でそんな名前？」

「テキトーだ」

「もうちょい真面目に考えてよ」

「君にはこれで充分だろう」

「はいはいそうですか。・・・・・で、いつ釈放？」

「今からだ」

「・・・・・・・・・・・はあ？」

「今から君を釈放して身だしなみを整えてから妹に会ってもらう」

「了～解～」

「念のため言っておくが、妹に手を出すなよ」

「ヒドイな～。僕はそんなに信用無いのかい？」

「ないな」

「即答かい。ま、いいけど。手は出さないよ」

「そうしてくれると助かる」

「あっちが出してくるかもしれないけどね～。シシシ」

「あやしい笑いをするな。君は執務官希望と言うことで、僕の推薦を受けてハラオウン執務官の補佐として着任して貰う・・・と言うことで通す。くれぐれもボロを出すなよ」

「君の親友はそんなミスをする男だったかい？」

「する男だったな」

「否定できない～。で、名前なんだっけ？妹さんの」

「フェイト・Ｔ・ハラオウンだ」

「長い」

「もっと長くなるぞ？フェイト・テスタロッサ・ハラオウンだ」

「無理。覚えられない」

「バカを言うな。興味が無いだけだろ」

「正～解～」

「とにかく覚えてくれ。で、魔導士ランクは総合ＡＡ＋。普段はブレスレットでリミッターをつけていて、権限は僕だ」

「ええ～～。４ランクダウン～～？大丈夫なの？」

「一般的には君はニアＳランクなんだ。これで充分だろう」

「無理なリミッターは怪しまれる・・・と。納得納得」

「そして君の戦闘スタイルは、ミッド式の中遠距離戦と、近代ベルカ式の接近戦のオールラウンダー・・・ということでいいな？」

「おっけ～～」

「それでは君にはここから出てもらう」

「え？マジで？あれマジだったの？」

「ああそうだ。それと君の事はすでに妹に伝えてある」

「・・・どんなことを？」

「安心しろ。今言った経歴だけだ。君の正しい経歴を知るのは僕ぐらいだ」

「・・・犯罪者が執務官補佐ねぇ～。世の中変わるもんだね」

「僕より年下のクセしてジジイぶるな」

「あ、もしかして気にしてる？」

「監獄に戻してやろうか？」

「今は遠慮するよ」

「分かればよし。組織の事が片付いたら君には自由になる」

「ありがたいね」

「っと言うのは冗談だ。前の話を忘れたとは言わせないぞ」

「わかってるよ。君の中から管理局を変えるという志について行くって決めたし」

「あの力も使うなよ」

「・・・・・・使う訳ないっての」

「わかってるならいい。じゃあついてきてくれ」

「ほほ～～～い」

「真面目にしてくれ」

面会室から出て、しばらく歩いて着替えてから、クロノと合流した。

そうして僕はラグナロクからでた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ここはとあるホテル。

クロノのはからいでこの一室を借りている。身だしなみを整えるためにね。

「さっぱりしたなぁ〜」

伸びた無精ひげとか汚れとか全部キレイにできたからな〜。

「服もきれいだしね」

久々にキレイな服を着たよ。感動〜〜。

「そろそろ行くかな」

偽証ＩＤを使って僕はホテルを出た。

「フェイト・・・・か・・・この名前に縁があるのかな？僕は」

そんな独り言を言いながら。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxx

久しぶりの外の空気を吸いながら、僕はフェイト・T・ハラオウンさんがいるという局に向かった。

局についたはいいが困った。場所が分からない。

「あの～スイマセン。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

通りかかった女性局員に聞いてみる。

「はい？なんで・・・・・・」

なぜ黙るのか・・・。まさか！僕の事がばれた！？こんな序盤で！？

「あの～～・・・・」

「あっ！ス、スイマセン！で、何の御用でしょうか？」

「フェイト・T・ハラオウン執務官のお部屋はどちらか聞きたくて」

「ああ、それならこの道を真っ直ぐいけば、すぐですよ」

「そうですか。ありがとうございます」

「い、いえ・・・・／／／」

顔を赤くして早歩きで去って行く女性局員。

「気にしても仕方ないかな・・・」

そして僕はこの道を真っ直ぐ行くとつくという、執務官殿の部屋に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxx

「ここか〜〜・・・・」

ついたのはフェイト・T・ハラオウンという表札の書かれた扉の前。

「やばっ。緊張する」

しかしそんな事もいってられないか。

とりあえず・・・ノックかな?僕が監獄に入ったの十歳だからわかんないや。

まあ正確には違うけど・・・それはどうでもいいか。

とりあえずコンコンっと2回ノックした。

「はい。ちょっと待ってください」

中からは女性の声。言われたとおり待つ。

すると・・・・・。

「はい。どちら様で?」

金髪美少女が出てきた。うっわ~~クロノの妹とは思えないほど美少女。

顔見たこと無いから想像だったけど、まさかこれほどとは・・・・やぱりってトコだが。

とりあえず挨拶。人は第一印象が大事だろうから。

「本日より、ハラオウン執務官の補佐として着任するライナ・リュートです」

「ああ貴方が。兄から話は聞いています」

「どんな褒め言葉でしたか？」

「年中無休でダラダラしていて、上司の命令よりも昼寝を大事にして、女顔で、無茶することしか能がなくて、そのくせ無駄に頭が良くて、そのおかげで何とか執務官候補まで上がってきた・・・・と」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ブチッと僕の中で何かがキレた。

しかし執務官殿の前でキレると引かれるかも・・・ここは笑顔だ。

「・・・・・・いや～～褒められるといい気分ですね」

「これで褒められてるんですか！？」

「ええ。寸分違わず僕の態度ですね。あと敬語はいいですよ、僕の方が年下ですし」

「あ、そうなんだ。じゃあ案慮なく。それと君も敬語はいいよ」

「これが僕の喋り方なので。すいません」

「謝らなくていいよ。改めてフェイト・T・ハラオウンです。部屋に入って」

「分かりました」

こうして僕は部屋に入っていった。

あとクロノ君はあとでボコすかな。人は第一印象が大事なのに余計なことしやがって・・・。

そのせいで執務官殿が壁を作っちゃったじゃないか！！

どうしよ・・・・先が不安です。

シャバだぜ！外だぜ！（後書き）

誤字脱字、感想お願いします。

親友って悪友と同じだよね

ここは～～とある執務室～。

そこには苦笑しながら、遠いところにいる親友を恨む少年と、呆れた感じの顔で手元の資料を見ている金髪美少女がいました。

「――――――はじめてみたよ。こんな経歴」

「そ、そうですか？・・・ハハハ・・・」

くそっ！クロノなんかに任せたのが失敗だった！末代まで呪ってやる！

執務官殿が見ているのは、僕の偽装した経歴書。

だがその内容が問題だった・・・。

アラートが鳴り響いているのに自室でのんびり昼寝してたとか、上司の命令を昼寝を理由に断るだとか、実戦中に昼寝してたとか、女顔のせいで上司の男から数回プロポーズされたとか、頭いいくせにロクに働かないとか、悪意しか感じないような経歴書だった。

しかも何か機動二課の副部隊長とか訳分からん経歴もプラスされてるし。

・・・やめようかな・・・執務官補佐。早くも挫折だよ。

どっかの田舎でのんびり暮らしたいな。

「でも・・・指揮官としての実績があるね。それもエリート級の」

「えっと・・・それは・・・・敵に不意をつかれだけで、浮き足だつ指揮官がみっともないから代わりに指揮しただけですよ」

もちろんウソだけど。指揮官何ざ生まれてから一度もやった事も無いけど。

すべてデタラメ。話し合わせる僕の事も考えてくれよクロノ。

お前はバレてもいいのか僕の事。

「――――――でも、リュート君の職場態度は直すようにいわれてるから」

「誰からですか？」

「兄から」

チィ！！昼寝の何が悪い！！睡眠は人がとるべきものだろう！！仕事中毒にはなりたくないんだよ！

まあ言わないけど。感電死するのはいやだから。

「それはそうと」

「話を逸らしたね」

ジトーッとした眼で見られる。しかし僕はスルー。

「リュートと呼ぶのはやめてくれません？慣れてないので」

これホント。リュートよりライナのほうが本名に近いから。

「じゃあ何て呼べばいいの？」

「ライライで。ライダーでも可」

「ライナって呼ばせてもらうね。その代わり私もフェイトって呼んで」

「・・・・・・・・はい・・・わかりました・・・」

な、泣いてなんかないんだからねっ！ボケ無視されて虚しくなったとかじゃないからねっ！

「じゃあライナ。聞いてると思うけど仕事の話を」

「バッチコーイ！」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・続けてください」

ボケたら今度は冷たい眼で見られた・・・・・・。フェイトさんって笑うの？

「未確認の兵器を使う組織。兄とその直轄の部下達と、私達一部の

執務官たちがその動きを追ってる。
動きと言っても、無人世界の動物達を捕まえているだけだけどね」

「組織の人達の服装に特徴は？」

「えっと・・・黒いコートを着ていて、フードで顔を隠していて性別の区別はつかないらしいよ」

「その人達が追ってる組織と同一犯である確証は？」

「同じ武器を使っていたの。武器と言っても私達が見たことも無い武器だけど」

「それが何処かで密売されていると言う可能性は？」

「なんともいえない。私達の情報網に引っかからないから」

「なるほど・・・・組織の影すら見えないと・・・。状況は把握しました」

「え？これだけで？」

「ええ。とにかくこれからは管理外世界のほうに視野を広げた方がいいですね」

「え？」

「わざわざ管理世界で活動している理由は、思い当たるところでは今のところ二つ。
一つは拠点が近くにあるから。灯台下暗しってやつですかね。

もう一つが、わざと管理世界で暴れてそちらに目を向けるため。
今のところ後者の理由が強いと思います。
影が見えないということは、そこに情報が無いから。でもどんなに凄腕の人でも必ずミスはする。
だけど情報が出てこない。それは元々そこに自分達にとって重要な情報が無いから。
言うなれば囮ってわけですかね。本来の目的のための。
もちろん前者の可能性が無いとはいえませんけど」

「な、なるほど・・・・」

イマイチよく分かってなさそうなので、もう少し分かりやすく。

「つまりキレイ過ぎるんですよ。ある程度汚れて無いと逆に違和感になるって話です」

「あっ！そういうこと！」

「それそうと。他に有力な情報とかありませんか？」

「あ、そうだった。最近になって入ってきた情報があるの」

「それは・・・？」

「一週間後にチルダ・サープラット・ホテルって場所で著名人たちやセレブたちのパーティがあるの。　そこで彼らと彼らのバックボーンが密会するって情報が入ったの」

「つまり・・・潜入するってことですか？」

「うん。理解が早いね。私達一部の執務官で潜入チームを作って、クロノたちが外を固めてバックボーンとできれば彼らも捕縛しようって作戦だよ」

「僕も行くんですか？」

「当たり前。私と一緒にパーティに行くんだからね」

「あ、そうですか・・・」

これは危険な任務だ。

もしかしたらホテルの人達全員が彼らの息にかかってるかもしれない。

ホテルが敵の本拠地と言う可能性もある・・・。

見たことも無い質量兵器と言うのも気になる。せめて写真があれば・・・。

簡単には行きそうに無いかな。なんせ今の僕はＡＡ＋だから。ってか昼寝の時間あるかな？

「これで仕事の話は一応終わりだよ。何か質問ある？」

「いえ。特には」

「うん。それじゃあ、あっちだから」

「？」

指差された方には扉があった。どうやらあそこが僕の部屋らしい。

「ちゃんと起こしに行くからね」

「僕の部屋に入ったら襲っちゃいますよ？」

「大丈夫。二度とそんな事出来ないようにするから」

「・・・・・・・・・」

ボケたつもりなんだけど・・・あちらさんはマジらしい。手に持ってるデバイスがそれを告げてる。

しかし・・・もうすこし楽な感じだと思っていたけど、まさかこんなにヤバイ仕事とは・・・。

今の僕は普通の魔道士よりちょっと魔力がある程度。油断したらやられちゃうな。

「ライナってさ。何でそんなにやる気が無いの？」

フェイトさんの質問。

グサッ！↑何かが刺さる音。ブシュ！↑何かを引きぬく音。バタリと倒れるライナ。

「ハア、ハア・・・・・ぼ、僕は眠気に勝てないだけです」

「でもさ、いつ何処で事件が起きるかも分からないのに、そんなんじゃあ対応できないよ？」

「それは・・・そうですけど・・・」

僕から言えば二十四時間働くほうが理解に苦しむけどね。

昼寝の出来ない人生なんて僕に死ねといってるようなものだ。

口には出さないけどね。死にたくないから。だから心で愚痴るよ。

「・・・『ラグナロク』の方がいいなぁ・・・」

「え？」

「あ、いえ。何でもありません」

しかしついつい声に出して愚痴ってしまった。でも仕方ないと僕は思う。

だって二十四時間ここで待機だよ!?監獄ならそんなこと考えなくてもよかったし!!

ああ～～・・・監獄が恋しい・・・・。って監獄が恋しい僕も相当ヤバイな。

そういえば・・・僕のデバイスってどうなったんだろ?

あいつは解体焼却処分されたらしいし・・・新しいのを作るか?作っちゃうか?

メンドくさいな。僕の頭脳に今の時代がついてこれないから、デバイスとかも完全再現できないし。

せいぜい６０%が限界だし。どうしようか・・・。

もういいや。今の時代でのレベルで作るか。それなら１００%完成させることが出来る。

今の時代でのフルハイスペック、最強のデバイスを作るか。

形としてはガンソード。ミッドとベルカを合わせるなら、剣と銃を足して二で割ったガンソードが適任だろう。

カードリッジシステムなんてやってられないな。タマ切れとか洒落にならないし。

やっぱあのシステムだな。ついでに二丁作ろうかな。カッコイイし。

あとバリアジャケットの改良か・・・。デバイスを五個作るのは決まったとして、二つはガンソード。

後三つは・・・どうしようかな？

「そうだ。クロノからこれをライナに渡せと言われてるんだった」

思い出したかのようにフェイトさんが机をあけて、その中からブレスレットを取り出す。

「なんだ・・・お前いたのか。てっきりメルトダウンしてるかと思った」

軽く愚痴ってそのブレスレット・・・『ボルッテクス』を手に取る。

『主にとって私がその程度と言うことがよく分かりました』

「今更か。もう少し高度なＡＩを乗せればよかった。・・・いやまだ間に合うか・・・？」

『主！十年ぶりだというのにそれはヒドイと思います！』

「いやお前スリープモードだったから十年も何も無いだろ。それよりもこれからの事を話すよ」

『・・・・・・分かりましたっ！』

拗ねた。久しぶりだがこのやり取り面白いなぁ。

「そういう訳で。フェイトさん、おやすみなさいです」

「あ、うん。おやすみ・・・」

こうして僕の外での一日は終わった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

『そうか。一応は大丈夫そうだな』

「うん。クロノの言ったとおり、面倒くさがりやだったよ」

『それはどうしようもない。まったく・・・はじめて会った時からアイツは・・・』

フェイトは執務室で、クロノにライナの印象を伝えていた。

「でもやるときはやってくれると思うよ?賢いって言うのは本当らしいし」

『そうなんだ。あんなヤツなのに頭がいい。・・・・この世のシステムを呪うな、僕は』

「ふふっ。クロノがそんなに感情を表に出すって中々ないよね」

『・・・そう・・・かもしれないな。長い付き合いだし。それはそうと、フェイト』

「何?」

『例えどんな仕事であろうと・・・・』

『アイツにフルドライブと無茶はさせないでくれ。頼む』

「・・・わかった。ちゃんと責任を持つよ」

『すまないな。アイツは人の話を聞かないんだ。自分の事は自分で決めるからな』

「それは今日話してみて何となくわかった」

『しばらくはアイツが補佐だ。まあ、性格には難があるが足手まといにはならない。絶対にだ』

「そう・・・期待させて貰おうかな」

『期待しててくれ。それじゃあそろそろ切るよ』

「うん、じゃあね」

『ああ』

モニターが消える。真っ暗な部屋には外の月の光が差し込む。

「謎が多いね・・・・彼。ねぇ？バルディッシュ」

『人には一つや二つ、秘密はあるモノと』

「そうだね。これから聞けばいいかな。それじゃあおやすみ」

『はい』

月の光は何時の間にか雲に隠れてしまっていた。

親友って悪友と同じだよね（後書き）

感想待ってます。

リボルバーとマガジン・・・どっちがいい？

「だぁ！！機械足りない！！おいルクス。なんか無いかい？」

『知りません。私は十年眠っていたんですから』

どうも～～ライナ・リュートです～。

今～借りた研究室でデバイスを作ってます～。ちなみにルクスっていうのは『ボルテックス』の事。

ボルテックスを略してルクス。簡単でしょ？世の中分かりやすさが命だから。

僕がここに来て三日目。

しかしフェイトさんの手伝いをすこししたら、すぐにデバイスの製作をしていたから、貴重な昼寝の時間を割いていた。

これが終わったら、何が何でも昼寝してやる！

『主。いい加減その昼寝主義やめません？』

「ルクス。そんなことしたら僕が僕でなくなるよ？いいの？」

『出来ればそうしてください』

「ヒドイな～～。ま、善処はするよ」

ウソだけど。ちっともやる気は無いけど。これからも昼寝主義であり続けるけど。

「う～～ん・・・残り三つのデバイスどうしようか？」

僕の前には完成したガンソードが二丁置いている。

リボルバー式で剣も充分に使える。リボルバーといってもカードリッジシステムじゃないけど。

『主。これで充分では？』

「まあ確かに・・・だけど備えあれば憂い無し。やれることはやっておきたいからさ」

どうしようかな・・・・・・・・あっ！そうだ！

「×××ってどうだろうか！」

『×××ですか？ですが、それでは他のデバイスたちと・・・』

「大丈夫さ、そうならないようにちゃんと調整しておくし」

『主がそういうなら私に異論はありません』

「よしっ！作るか！」

安心して昼寝の出来る日は来るのだろうか・・・・。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X

『だぁぁぁぁぁぁぁああ!!昼寝できないぃぃぃぃぃぃ!!』

・・・・・・・・・・・・・・・ライナだね。

声の発信源はデバイス研究室。何してるんだろ?

ちょっとのぞいてみると・・・・。

「やいルクス!!昼寝できないぞ!!」

『知りませんよ!!私に言わないで下さい!!』

「こちらともう三日もこれしてるんだから、昼寝したっていいじゃないか~~!!」

『何言ってるんですか!!それでは間に合いませんよ!?あといつも寝てるじゃないですか!』

「昼寝できない人生なんて、カレーライスからライスを抜くようなものだぁぁぁぁぁああ!!」

『それそんなに重要なんですか!?・・・・・・・・いい加減、主の昼寝好きは直してほしいですね・・・・』

泣きながらパソコンを打ってるライナと、呆れてる『ボルテックス』が机に置かれていた。

「ライナ・・・何してるの？」

「え？・・・・・・フェ、フェイト・・・・さん？な、何でここに？」

「何でって・・・・ライナを探してたら、ここからライナの声がしたから」

「そ、そうですか・・・・・・」

私と目をあわせようとしないライナ。

仕方ないのですこし周りを見てみると、デスクに二丁のガンソードが置かれていた。

「これ・・・・ライナが作ったの？」

「え！？ま、まっさかぁ！！僕にそんな事出来るわけ無いですよぉ～」

『主？何故ウソをつくのですか？』

「バカやろうぅぅぅぅぅう！！」

へぇ～～～～・・・・・・。

「ライナ。何でウソつくの？」

「え！？えぇ～～っとですね・・・・」

と、そのときにアラートが鳴り響いた。

「ライナ！行くよ！」

「えぇ～～・・・い、いえ！！ぜ、ぜひお供させてください！！」

デバイスで脅したらすぐに従ってくれた。

そしてライナはデスクに置いてある二丁のガンソードと『ボルテックス』を持った。

「大丈夫なの？作ったばかりでしょ？」

「大丈夫です。いざって時はルクスを使いますから。そうだろ？」

『はい』

「そう。無理はしないでね」

私達はすぐに現場へ急行した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxx

「現場と状況は？ルクス」

『場所はミッド・スクールバス。現在、中央区を移動中です。乗客たちが人質ですね』

現場に向いながら僕とフェイトさんは状況を確認している。

「バスジャックか。犯人の人数は？」

『犯人は四人。しかしあと二つ同時にバスがジャックされました。そちらにも四人』

「三つのバスをジャック。計十二人。要求とかは？」

『要求は”１２：００までに金を用意しろ人質と交換だ。”だそうです』

「１２：００ってあと一時間か。ギリギリだが、多分間に合わないだろうな」

そんなこんなで三つのうち、一つのバスが見えてきた。だがバスは止まっていた。

バスを取り囲むように駐車された車の近くに着地し、フェイトさんは現場の捜査官に話し掛けた。

「執務官のフェイト・Ｔ・ハラオウンです。状況はどうなってます

か？」

「執務官殿ですか！！」

敬礼して捜査官は現状報告をする。

「犯人は四名。全員がハンドガンを所持しています。しばらくは走っていたのですが、燃料切れで止まってしまってます。燃料と人質数名を交換しろとの要求も来ています」

僕は犯人達の方を見る。ミット帽と黒いジャケットにゴーグル、手にはハンドガン。

顔は見えないけどおそらく全員男性だろう。

「ルクス。いい考えが浮かんだんだけど」

『私も同じ事考えてました』

「よしっ。フェイトさん」

「何？ライナ」

そこで僕の作戦を伝える。意外と大丈夫だと思う。ちょっとギャンブルかもだけど。

「・・・・ちょっと無理があるかもよ？」

「僕は大丈夫です。必ず成功できます」

「・・・・・・わかった。私はこれを捜査官の人に伝えてから行くから」

「わかりました。僕は先に行って準備しておきます」

「ライナにこの作戦のタイミングは一任するから」

「え？何でですか？」

「立案者でしょ」

「そうでしたね。わかりました。準備が出来たら連絡を入れてください」

そして僕は空へ飛び上がった。

こうして僕の初めての事件は始まった。

最初にしては大きい事件だった・・・

僕は今少し離れた場所から、動いてる二つのバスのうち一つを追っている。

「ルクス。時間は？」

『今、１１：３０です』

「もう少しだな。こちらはいいとしても、あっちは大丈夫かな・・・・」

『主。バスが右に曲がりました』

「了解。ポイントとしては・・・あそこかな」

僕が向いたのは目算で五分後、バスが通過するビル。

そこに先回りして僕はデバイスを起動させる。

「ルクス。セットアップ」

『セットアップ』

パァっと光って変身。ちなみに僕はジャケット無しで飛べる。

僕の格好は、簡単に言うとクロノのバリアジャケットの青バージョン。まあ細かい場所は違うけど。

武器は背中で十字を模った長剣と槍。それと腰にある作ったガンソード二丁。

「ルクス。ガンソードとのデバイスリンクは？」

『問題ありません。オールグリーンです』

「よし。フェイトさん。聞こえますか？」

『聞こえるよ。こっちの準備は出来てる。ライナは？』

「出来たから連絡を入れてるんですよ」

『そうだね。それじゃあ始めるの？』

「あと一分です。フェイトさんの方のバスはどうですか？」

『もう少しで目標ポイント。止まってるバスの方も準備完了だって』

「わかりました。それでは昼寝・・・・いえ乗客のために頑張りましょうか」

『・・・・ライナ』

「それではまた後で会いましょう。・・・・・・ミッション・・・・スタート！！」

僕の合図と共に作戦が開始された。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘ

「おらぁ！！燃料はどうしたぁ！！」

「今そちらに運ぶ！！」

捜査官の一人が燃料の入った入れ物を犯人の方へと渡す。

犯人とのすれ違いに二人の女子学生が解放された。

「おい、燃料を入れろ！！」

「は、はい！！」

犯人が運転手に燃料を入れさせるために車から下ろした。

その運転手の頭には銃が突きつけられている。

「少しでも怪しいことすればこいつの頭吹っ飛ばすからな！！」

そう脅してこちらは手が出せない。

しかし・・・・・・。

ババババッ！！

「うおっ！！なん――――――――グアッ！！」

「てめぇら――――――――――グフッ！！」

「ひ、人質がどうなって――――――――――――がっ！」

外からの空戦魔道師の突入で中にいるジャック犯たちは制圧された。

「コノヤロウ！！」

犯人が銃を撃とうとするが、打ち合わせ通り言葉を言う。

「もうお前は完全に包囲されている。無駄な抵抗はやめ、大人しく投降しろ」

「チッ！お前らこれが見えねえのか！？運転手の頭吹っ飛ばされたくなければ下がらせろ！」

人質を盾にしてそう言ってくる。空戦魔道師は犯人の要求どおり下がる。

執務官殿の話の通りだ。

これで人質が殺されずに犯人達を不利な状況に出来た。

「おい、俺だ。そっちの人質を何人か殺せ。奴らのやった事が間違いだと教えてやる」

人質を盾にした男が他の仲間へ連絡を取る。

しかし・・・・・。

『む、無理です！こちらのバスはもう制圧される――――――――グァ！！』

『リーダー！こちらは制圧され――――――――ガッ！！』

「な、なんだと！！」

犯人は混乱してしまった。

「もう一度言う。武器を捨てて大人しく投降しろ」

その言葉は犯人にチェックメイトを掛けていた。

どうしてこうなってるのかすこし時間を遡ろう。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

時間は少し巻き戻り、フェイト視点。

「凄いね彼」

『はい。すこし強引かもしれませんが』

私はライナとは違うバスを追っていた。

「あれかな？ポイントは」

『はい。彼の言った条件に最適なのはあの場所かと』

そして私は目標のビルに降り立ち、バスが来るのを待つ。

「バルディッシュ。スピード勝負だね」

『私達の得意分野ですね』

「うん。油断せずに行こう」

それはさきほど彼から伝えられた作戦である。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「フェイトさん。ここは二手に分かれたほうがいいかと」

「え？どうして？」

「一つのバスが制圧されれば、他のバスの乗客がどうなるか分かりません。犯人が全員殺してしまうかもしれない。
そうなる前にこのバス以外のバスを同時に制圧しておく必要があるんです。
しかし時間が足りないので二手に分かれたほうがいいと」

「・・・・・それで？」

「まずは僕たちが他のバスのほうへ先回りします。待ち伏せ場所としては障害物の無くて、バスがよく見えるビルがいいと思います。そしてこっちのバスの要求通り燃料を渡します。そして人質が解放され、相手の気が緩んだところで空戦魔導師の突入で一気に制圧。
それと同時に僕らがバスに突入して制圧です。時間としては２５秒ですね。あとはここで一人だけ残ったやつに”投降しろ”って言っ

てくれれば解決」

「・・・・・ちょっと無理があるかもよ？」

「僕は大丈夫です。必ず成功できます」

「・・・・・・わかった。私はこれを捜査官の人に伝えてから行くから」

「わかりました。僕は先に行って準備しておきます」

「ライナにこの作戦のタイミングは一任するから」

「え？何でですか？」

「立案者でしょ」

「そうでしたね。わかりました。準備が出来たら連絡を入れてください」

これがライナから伝えられた作戦であった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxx

「シンプルだけど難しいね」

『私達なら大丈夫です』

「ありがとう、バルディッシュ」

『フェイトさん。聞こえますか？』

ライナからの通信だ。

「聞こえるよ。こっちの準備は出来てる。ライナは？」

『出来たから連絡を入れてるんですよ』

「そうだね。それじゃあ始めるの？」

『あと一分です。フェイトさんの方のバスはどうですか？』

「もう少しで目標ポイント。止まってるバスの方も準備完了だって」

『わかりました。それでは昼寝・・・いえ乗客のために頑張りましょうか』

「・・・・ライナ」

こんな時まで昼寝を大事にするなって・・・もしかして早く終わら

せて寝たいからこの作戦にしたの？

『それではまた後で会いましょう。・・・・・・ミッション・・・・
スタート！！』

ライナの合図で私はバスへ飛び降りた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「ブレード・ショット！」

僕は腰からガンソードを片方抜いて撃つ。それでバスの天井に穴を
あける。

僕が着地すると同時にバスの天井は抜けた。突入成功。

「な、なんだてめぇは！！」

犯人の一人が僕に銃を向けるが、

「人に名を尋ねるときは、まず自分から名乗りましょうね！」

ガンソードで打ち払い、そのまま鳩尾（みぞおち）を蹴る。

「ガハァ！！」

変な声を出して倒れこむ。一人目。

「くそっ！てめぇ――――――――グッ！！」

うるさいので魔力弾を頭に撃って気絶させる。二人目。

「お前ぇぇぇぇえ！！」

「当たらないよ」

相手が銃を乱射するが、弾いてそのまま銃を持ってない手で鳩尾を殴る。三人目。

「リーダー！こちらは制圧され――――――――ガッ！！」

連絡しようとしていた男の首に手刀で一撃。４人目。

「全制圧完了。皆さん、もう大丈夫です。運転手さんはバスを止めてください」

「は、はい」

バスは近くの道脇に停止した。

ちなみに車道はあらかじめ封鎖している。え？言うの遅い？忘れてたんで。

捜査官の人達に連絡した。どうやらあちらも無事に終わったらしい。
バインドで犯人達を纏めておいた。ハンドガン以外は危険物を持っていなかった
「乗客の皆さん。大丈夫ですか?怪我とかはありませんか?」
聞いてみたがどうやら怪我をしている人は居ないようだ。
「フェイトさん。こっちは終わりました。そちらは?」
『こっちも終わったよ。今捜査官達が向ってきてるよ』
「そうですか。あちらの方も終わりましたし、事件解決ですかね?」
『多分ね。乗客たちに事情聴取するから、ちゃんと誘導しておいてよね』
「了解です」
通信をきり、乗客たちに一応言っておく。
「え〜〜乗客の皆さん。一応事情聴取があるので、この後来る捜査官の車に持ってください」
ガンソードを腰にしまい、とびらを開けてもらい、乗客の人達にも降りて貰った。
すると・・・・・。

「ヒック・・・ヒック・・・・」

泣いてる子がいた。見た目から察するに小学生だろう。

「もう大丈夫だから。悪い人達は全部お兄さんがやっつけたからね〜〜」

そういって頭を撫でてあげる。そうすると安心したように泣き止んでくれた。

すると捜査官の車が十台ぐらい到着した。

「さあ、歩ける?」

「うん・・・・・」

その少女はバスを降りると、迎えに来た母親らしき人のほうへと行く。

よく見ると迎えに来た親がたくさんいた。子供が愛されてる証拠だね。

それを見ながら僕は捜査官の方と会った。

「ご苦労様です!」

ビシッ!と敬礼する捜査官の人。

「そちらもご苦労様です。事情聴取ですけど、学生は親同伴ですよ

ね？」

「はい。学生は後日親と共に事情聴取を受けて貰います」

やっぱりそうか。ちょっと不安だったけどあってたらしい。

僕の知識はいくら頭が良くても、実際十歳から今までは監獄にいたから限界があるんだよね。

「疲れた～～。ルクス、帰ったら絶対昼寝するから」

『ちょうど昼ですしね。でもフェイトさんが許してくれますか？』

「バレなければいいんだよ」

「へぇ～～～・・・誰にばれなきゃいいって？」

「誰ってそりゃあフェ・・・・・・・・」

ギギギ・・・・・・人形の如く後に首を回す。そこにいたのは・・・・・・金色の死神だった。

「ライナ？帰ったら事件の報告書の作成だよ？それなのに昼寝なんて出来るわけ無いよ？」

「あ・・・えっと・・・逃げるが勝ち！！」

ダッシュで逃げようとしたら前に回りこまれた。

「逃がさないよ？」

「ヒィィィイイ！！」

逆方向に逃げようとしたら首を掴まれた。

「グエェ！！」

「それじゃあ帰ろう」

それから僕の首を掴んだままフェイトさんは空を飛んで、僕は絶叫しながら局に戻った・・・・・。

こうして僕の執務官補佐としての初めての事件は解決した。

最初にしては大きい事件だった・・・（後書き）

誤字脱字、感想待ってます。

本気と書いてマジって言うの面倒だよね（前書き）

（　）↑は大体念話です。

本気と書いてマジって言うの面倒だよね

バスジャック解決から6時間。

僕とフェイトさんは事件後の報告書を作成していた。

しかし僕は何回、自問自答してるかわからない疑問をまた考える。

報告書の書き方何ざ知らないのだよ、僕は。

どうすればいいと思う？テキトーだよね。適当一番だよね。だって知らないし。

結局テキトーにまとめる僕。

それに比べてフェイトさんはスラスラとやれるからいいよね～～。

しかしテキトーほうが終わるは早いと言うモノだ。

「終わりました」

「え？そう。じゃあもう休んでていいよ」

「はい・・・・」

悲しいかな。いつもは休みたいときに休めないけど、いざ休めって言われても休めないなんて・・・。

部屋を出て、これから徹夜すると思うと自然とため息が出る。

「デバイス研究室でお世話になるのか・・・また」

しかしホントに困る。機材が足りないせいで思ったより時間がかかっていると言うのに。

「あと三つもデバイスを作るとは・・・今週寝れないんじゃないの？」

愚痴っても作るけど。作らなきゃいけないけど。

「おじゃましま〜〜す」

誰もいないけど挨拶してデバイス研究室に入る。

「はぁ・・・。頑張りますか・・・・ルクスは寝てるし・・・」

こうして今日の僕のデバイス製作は始まった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxx

「・・・・・・僕は何やってるんだろう・・・・・・」

今は朝の5時ちょっと前。

この頃思う。外に出てくると僕がいかにバカな存在だと気付かされる。

何、昨日の朝飯から何も食ってないで仕事したり、デバイス作ってるんだろ。

「でもデバイス作るしか・・・もういいや、気分転換に訓練でもしよう」

バスジャックのときに体の感覚が鈍ってる感じがした。

この訛りが死を招くかもしれない。

てなわけで訓練所にいった。

起きすぎると逆に寝れないし、運動した方が寝れるだろう。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「お～～い、ルクスさ～～ん？おきてください～～」

訓練所についた僕は、必死に自分のデバイスを起そうとしてる。

しかし十分たっても起きる気配がまるで無い。

反抗期？十年前のだから機能がイカレたか？

「しょうがない・・・。ガンソードを使って訓練するか」

ガンソードの待機状態は両手につけてる指輪。

こう見ると両腕にブレスレットをつけて、指に指輪もつけてるって・・・僕チャラいな。不良みたい。

「そういえばガンソードの名前って決めて無いな・・・・悩むのメンドーだしＡとＢでいいかな」

ＡＩも乗せてないし。いや乗せる意味が無いんだった。

「・・・・それじゃあソルとライトでいいかな。見た目ほぼ同じだけど」

名前も決まったところで早速、パッと光って変身。

「ソル、ライト。セットアップ」

セットアップしても見た目は変わらない。魔力障壁は張ってあるけど。

「やっぱバリアジャケットって着たほうがいいかな？必要ないんだけど」

まあ今は考えても仕方ない。今は訓練するか。

「レベルは・・・Ａランクでいいか」

パッとガジェットが出てきた。見たところ１５機。

「よし、それじゃあ始めるかな。ブレードショット！」

スタートと同時に銃から魔力弾を出す。

しかしそれはガジェットに当たった瞬間消えてしまった。

「あ、忘れてた。ＡＭＦ・・・じゃあこれで！」

出力の上げたブレードショットは普通にガジェットを貫いた。

「次！！」

目の前に迫るガジェット二機をガンソードで切って突っ込んで行く。

前後左右にいるガジェットに、腕をクロスさせて、左右のヤツを撃ち抜き、戻す要領で前後のガジェットも撃ち抜く。

そして一度、ガジェットの群れから離れる。

「次はこれだ！ソル！ライト！ドッキング！！」

ソルの刃部分を消して、ライトの後ろ部分に取り付ける。

「ソルライトモード！（命名：今）こいつの試し撃ちだ」

ソルライトモードは、簡単に言うとデバイスを二個くっつけることにより、出力を上げたり魔力耐久率を上げることが出来る。その分、魔力の消費量が増えるけど。

ちなみに見た目は、ガン部分が二個分でかくなって、刃もそれ相応の大きさになるところ。

「片手で扱うのは少しきついけどね。ブレードショット！」

普通に魔力弾を撃つと、ＡＭＦ関係無しにガジェットを二機撃破した。

「おお～～。意外と力が出た」

しかしガジェットたちも攻撃を仕掛けてくる。

「連発すれば終わりだけど・・・接近戦もやっておこう」

そして僕はガジェットたちに突っ込む。

ガジェットのビームをかわして一気に懐に入り、一閃。

ガジェットは真っ二つ。

「残り五機」

僕はソルライトを敵に投げつける。それは見事に刺さり一機撃破。

すばやくそれを抜き取り、上空に飛び上がる。

「ブレードバズーカ」

空から狙いを定め放つ。

ソルライトから放たれる砲撃に残りのガジェットたちは飲み込まれる。

何もいなくなった場所に僕は降り立つ。

「全機撃破完了」

すると・・・。

パチパチパチ。

「え？」

いきなり拍手が聞こえた。振り返ると制服姿のフェイトさんがいた。

「お見事だったよ」

「そ、そうですかね？」

見た目は笑顔だが、内心は汗ダラダラ。

もしかしたら僕のデバイスのシステムに感づかれたかもしれない。

これは話を逸らしたほうがいいな。

「フェ、フェイトさんはなぜここに？」

「早く目が覚めちゃったから、暇つぶしに訓練しようとしたらライナが見えたの」

「あ、そうなんですか・・・それじゃあ僕はシャワーでも浴びてくるんで」

そうしてすばやく退室しようとしたらガッチリ肩を掴まれた。

「ライナ。まだ大丈夫だよね？」

「だ、大丈夫じゃないです。そ、それと痛いです。ギブギブ」

「私と模擬戦しない？」

話聞いて無いし、目が爛々と輝いてらっしゃいますよ。ついでに素敵な笑顔。

これは俗に言うバトルマニアと言う奴ではないのだろうか？

これは本能が告げている。”絶対に関わるな”と。

事なかれ主義でもある僕としてはここは本能に従いましょう。

「い、いえ・・・汗を流したいので・・・・」

「後でも大丈夫でしょ？」

「そ、それは・・・・し、仕事！仕事があるので！！」

「どんな？」

「え！？えっと・・・・・昨日の事件の報告書・・・とか」

「それは昨日で終わらせたでしょ」

「え！？えっとじゃあ「ライナは私と戦いたくないの？」・・・・・・・」

はい！！戦いたくないです！！

だって今の貴方オーバーSでしょ！？こちらはＡＡ＋、結果は僕のボロ負けじゃないか！！

負けると分かっていて勝負なんて、この僕がするわけないだろう！！

って言いたいけど・・・。

「どうなの？」
いえない・・・怖くていえない・・・・。
言った瞬間、首と体がおさらばしそうだ・・・・。
『主。おはようございます』
「おおぉ！！ルクス！！ちょうどよかった！！お前今まで寝てただろ！？」
『ええ。なぜかは分かりませんが』
「これはなにか不具合があるかもしれない！ってなわけでフェイトさん。
僕はルクスを整備するんで、これで！！」
ダッシュで逃走！え？廊下を走るな？知るかそんなん！！
てなわけで僕は自分の部屋までダッシュした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ハアハア・・・なんとかだね」

『主、イマイチ状況が分からないのですが』

「推理して」

僕はブレスレットと指輪を放り投げて、ついでに服も脱ぎシャワーを浴びる。

男のサービスシーンなんて要らないですから省きましょうか。

「ふぅ～～。スッキリ♪」

着替えをとり、頭を拭きながら出る。

『主。通信が来てますよ』

「だれから？」

『クロノ・ハラオウン提督からです』

「来たか・・・愚痴を言わせてもらおうじゃないか・・・」

そしてモニターが開く。

『やあライナ。風呂上りかい？』

「そんなモンだよ。それよりも何アレ？」

『アレとは？』

「とぼけるなよ。僕の経歴についてだ」

『ああ。実に君をよく再現できた経歴だろう？』

「クロノ？そういうのはね、正しくても胸のうちにそっとしまって置く物だよ？おかげであちらが変な印象持っちゃったじゃん」

『正しいのは認めるんだな・・・。それよりどうだ？執務官補佐は』

「面倒です。昼寝できないし。さっきも貴方の妹さんに模擬戦申し込まれたし」

『やったのか？』

「まさか。向こうオーバーＳ、こちらＡＡ＋。結果は僕がボコされるだけだろ」

『そうなるだろうな。そういえばお前、事件を解決したらしいじゃないか』

「辛かったよ？お前のせいで全力出せないし」

『それじゃあリミッターを1ランク下げようか？』

「マジで？」

『ジョークだ』

「・・・・・・今度会ったらぶっ飛ばす」

『やれるものなら。と、こんなことで時間を潰してられないな』

「？なんか用があったの？」

『生憎、無用で君と話すほど僕は暇じゃないんだ』

「それは奇遇だ。僕も出来れば今すぐ通信を切りたいんだ」

『では手短に。三日後にホテルに潜入するというのは聞いているだろう？』

「ＹＥＳ」

『それについて忠告だ』

「はぁ？忠告？」

『”アスタール”がそのビルにあるとの情報が入った』

「・・・・・マジ？」

『本気と書いてマジだ』

「はぁ～～・・・こりゃ本気でやらないとまずいな」

『じゃあ通信きるぞ』

「はいはい・・・。首洗って待ってろよ」

『無駄なことはしない主義なんだ』

プツっとモニターが消える。

「・・・・・デバイスはもう半分完成してるし、少しぐらい休憩してもいいよね」

『いいんじゃないでしょうか』

「それじゃあ、上司さんのことでも調べますか」

僕はフェイトさんの情報でも調べようかと、資料室に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxx

「・・・すごいね～～、十歳からもう大きい事件を解決してるよ。それも二つ」

資料室でソファに寝そべりながら資料を眺めている。

ちなみに僕のデバイスにかかれば、見れないデータなど管理局に存在しない・・・と思う。

「ＰＴ事件に・・・・・・・闇の書事件・・・・・・・夜天は空に帰って行ったのか・・・」

闇の書には・・・いや夜天の魔道書には因縁があるけど、最後を見とれなかったのは残念だ。

「この八神はやてと言う方には、是非とも会ってみたいな」

そんな事を思いながらページをめくる。

次のページには、エース・オブ・エースと呼ばれている高町なのはさんと、フェイトさんが並んでいる写真があった。

「不屈のエース・・・ね。地球出身なんだな。そういえば八神さんも」

見てると、この三人を中心に闇の書事件を解決したらしい。

「その前のＰＴ事件は・・・・・最初は敵同士だったけど、最後は協力して解決・・・・か・・・・」

プレシア・テスタロッサの名前は聞いたことがある。

優秀な科学者で、しかも魔道師としてもオーバーＳと・・・。

しかし事故で子供をなくして突然の失踪。

そして・・・・・・。

「プロジェクトＦ・・・。まだ続いてたんだ・・・しかも完成体の一人が・・・・・・」

僕は恨まれるかな?それはそれで構わないけど。となると年齢偽装もバレちゃうな。

ま、それは置いといて。

「次は・・・機動六課・・・。八神はやて部隊長を中心に、高町なのは一等空尉とフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。さらに闇の書の守護騎士であるボルケンリッター・・・そしてフォワードメンバー

は現在、様々な場所で活躍中の優秀な局員ときてる・・・。ハチャメチャな部隊だ」

朗読して軽く引いた。オーバーSとニアSランクが五人以上だよ？尋常じゃない戦力だ。

しかもそのバックボーンが三提督と聖王教会ときたもんだ。化け物を通り越して怪物だ。

裏技を複数使ってなんとか発足させたって感じだし。

まあ地上本部とは、うまくいってなかったらしいけど。

そういえばレジアス死んだんだ。それにゼストさんも。レジアスはいいとして、ゼストさんの墓参りはしないとな。恩人だし。

「これは・・・戦闘機人・・・レジアスが進めてたんだ。ご苦労なことで」

そしてこれは僕へのあてつけか何かか？ジェイル・スカリエッティ。

「お前は僕に喧嘩を売りたいらしいな。まあ捕まってるけどね」

いつか会って一度ぶん殴るか。

「これぐらいでいいだろ・・・。ルクス、ちゃんと消しといてよ」

『分かってます』

気がついたらもう昼の十二時だ。今日はここで昼寝しておこう。

久しぶりの昼寝だ。おやすみなさい〜〜〜〜。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxx

「ライナ。昼間どこに行ってたか素直に喋って？」

はい、みなさん。お元気ですか？

時刻は夕方。僕は金色の死神さんの前で尋問されてま〜〜す。

「ライナ、聞いてるの？」

「も、もちのロンであります！」

ネタ古いとか言うな～～。

「資料室で勉強してました」

「”昼寝”の間違いじゃないの？」

ギクッ。

「ま、まさか。昼寝なんてする筈無いじゃないですかぁ～～」

「・・・・・・・・・・・・・」

ジト眼で見てくるが、僕は負けないぞ！！

「はぁ・・・。連絡しておくけど、私とライナは明日一日有給休暇だよ」

「ああ～～。それのことですか」

それは僕の生活用品などを買うために有給休暇を取らしてもらった。

・・・・・・って、え？

「フェ、フェイトさんも？」

「うん。ライナに街を案内してくれってクロノが」

アホたれシスコンが！なぜ町案内にフェイトさん！？町案内何ざデバイスで事足りるわ！！

「い、いや・・・・いいですよ？一人で大丈夫ですし」

「いいの。私も街で色々と買いたいものがあるし」

「し、しかし・・・・。僕がいては邪魔でしょう？お知り合いと一緒に行けば・・・・」

「他の皆は仕事だよ」

「え！？じゃあえっと・・・・・・フェイトさんも一人で買い物したいでしょ？」

「別に大丈夫だよ？ライナと一緒でも」

クッ！僕の誘導はことごとく撃沈だ！どうする！？もはや僕に残されて道は・・・・・！

「さっきからライナって、私と行きたく無いみたいなこと言ってるよね」

「え！？そ、そんな事ないですよぉ～～」

ピューっと口笛を吹いて右斜め上を見る。

その態度に機嫌を悪くしたか、トドメの一撃。

「ムッ。ライナは私と一緒に行きたくないの？」

カンカンカン！！フェイト選手の上目遣いでライナ・リュート選手ＫＯ！！

「・・・・わかりました・・・・明日は一緒に出かけましょう」

「うん。よろしい♪」

はぁ・・・・・・・。しょうがない・・・アレはまた違うときに買うか。

「何時ぐらいに行きますか？ちなみに僕は午前中に起きる自信がありません」

「大丈夫。私が起すから」

「いえ！ちゃんと自分で起きます！！」

トライデント・スマッシャーで起されるとか無いわ～～。起きるどこか永遠に眠るし。

「そう。じゃあちゃんと起きてね」

「はい・・・・。じゃあ夕飯でも食べに行きます」

腹減った。昨日は朝飯しか食って無いし、今日は何も食って無い。

「じゃあ一緒に行こうか」

「ですね」

ってなわけで食堂へ向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxx

僕は食堂で、超久しぶりに大好きなカレーライスを頼む。

フェイトさんはスパゲティ。あ、違えた。スパゲッティだった。

「タバスコってありませんかね？僕、辛いの好きなんで」

「さあ？私は使ったこと無いから」

う～～ん・・・・タバスコは無いか・・・。ならこのカレーで我慢

するか。

パクッと一口。うん、久しぶりだけどやっぱ美味しいな～。

それはそうとフェイトさんが軽く引いた眼をしている。

「なんですか？フェイトさん」

「・・・・・・よくそのカレーを食べれるね」

そういえばカレーの詳しい描写をしてなかった。

カレーは普通、黄土色をしているが、このカレーは作り方を間違えたのか真っ赤。

メニュー名は”激辛！！最強カレー！！死ぬ気のあるやつだけ食べろ！！”って書いてあった。

死ぬ気は無いけど辛いのは好きだから頼んでみた。別に普通だと思うけどね・・・。

「それにしても執務官の仕事って多いですね～」

「その執務官になりたいからライナはここにいるんでしょ？」

そういえばそうだったね。僕は執務官希望でここにいるんだった。

「それはそうと。着任して三日で大きい事件に巻き込まれるし・・・不運は他者より優れてますね。僕」

まったく自慢にならないけど。

「そういえば、何でフェイトさんって執務官になったんですか？他の道も目指せたと思いますど・・・」

「う～～ん・・・クロノがそうだったから・・・かな？」

クロノに憧れたと。可愛そうに・・・そのせいで将来、重い十字架を背負わされるとも知らずに・・・。

「失礼なこと考えてるでしょ」

・・・あっれ～～？何でばれた～～～？

「滅相も無い」

「でもそれを言うなら、ライナもなんで執務官になりたいの？」

思ったこと無いよ。シスコン提督のせいでここにいるだけだよ。

誰が好き好んで二十四時間仕事なんかするか。

とは言えないので・・・。

「他人に人生を左右されないため・・・ですね」

「？」

「僕の出身世界は地球なんですけど・・・そこの日本と言う場所で大きい事件が起きたんですよ。

知ってると思いますがＰＴ事件と闇の書事件です。
それの事情で僕は魔道師になる気はなかったんですけど、上の人達から、”地球の魔道師は有能だから君も魔道師になりなさい”って言われて半ば強引に魔道師になったんです。
まあランクはニアＳになってしまいましたが。
でも自分の人生を誰かに決められるってホントいい気分じゃないので・・・。
他人に人生を左右されないようにしようと執務官を目指してるだけですよ」

これは八割ウソ。でも不自然が無いように考えたつもり。

「そう・・・なんだ・・・・」

何故かフェイトさんがバツ悪そうな顔をする。

八割嘘ですよ～～？責任なんか感じなくても・・・・。

これは話を変えた方がいいかな。

「フェイトさんの友人は何をやっているんですか？」

「え？　誰の事？」

どうやら彼女には友達と呼べる人がたくさんいるらしい。

すごいですね。僕の中には友達なんてカテゴリーは存在しないよ。
悪友ならいるけど。

「えっと・・・エース・オブ・エースの・・・」

「なのは?今も戦技教官やってるけど・・・・・」

フェイトは首を傾げながら、何でそんな事を聞くの?といった表情をする。

「収束魔法の天才で、不屈のエースとも言われてるとなれば、気になるものじゃないですか」

高町なのはさん、と言えば誰もが知っているエースの中のエース。

彼女を憧れて管理局に入る人もたくさん居るらしい。スゴイ美人だしね。

まあフェイトさんたちに憧れて入る人も大勢いるけど。スゴイ美人だから。

同じ中遠距離を中心にする魔道師なら気になるし。

「・・・言っとくけどなのはに変なことしないでよね」

「・・・・・するわけ無いじゃないですか」

「その間は何!?」

一瞬手を出しちゃいそう・・・なんて考えが頭をよぎった分けじゃないからねっ!

「う~ん、そうだね。なのははとにかく凄いんだよ」

いきなり自慢から始まるとは思いませんでした。

「誰にでも優しくて、面倒見がよくて、誰からも信頼されてる・・・・もちろん、私も」

フェイトさんが生き生きしてる様子を見ると、どうやら話題の逸らしには成功したようだ。

「私となのはが出会ったのは十二年前なの」

「古い付き合いですね。十歳からですか？」

「うん。最初はいろいろあったけど・・・なのはは私を救ってくれて・・・本当に感謝してるんだ」

そう言ってくるフェイトさんの目は、ただ純粋に・・・・キラキラと輝いていた。

本当に信頼している友人なんでしょうね。

僕には・・・・一生できないでしょうね。いや・・・出来てはいけないの間違いか。

『（主・・・）』

（ルクス。気にするな。僕はこれで満足してるんだ）

『（はい・・・）』

「それでそれで！！」

「ハハハ・・・・」

スゴイ熱く高町なのはさんの話をしているフェイトさんに、僕は苦笑するしかなかった。

すると・・・・・。

「にゃははは・・・フェイトちゃん、褒めるのは嬉しいけど、ちょっと照れるよ～～」

「え！？な、なのは！？」

噂をすれば・・・この言葉を使う日がまさか来るとは・・・・。

「隣、だいじょうぶ？」

「う、うん。大丈夫だよ」

なのはさんの夕飯は焼き魚定食。

ちゃんとデザートにプリンがある。やっぱり女性ですね。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxx

「今日はどうしたの、なのは？」

「ちょっと資料を取りにね。ついでに挨拶しに行こうかなって思って」

「そうなんだ・・・・・・」

「そちらは？」

と、エース・オブ・エースがこちらを見る。

長いなエース・オブ・エースって。略してエースでいいじゃん。そのまんまだけど。

「あ、彼は補佐のライナ・リュート君。三日くらい前に来たばっかりなんだ」

「初めまして、ライナ・リュート二等空尉です。趣味は勉強です」

僕は箸を置いて立ち上がり敬礼した。面倒くさいけど一応。ちなみに趣味はいい印象を持たれるため。

「高町なのは一等空尉です。お噂はフェイトちゃんから聞いていますよ」

おっ。クロノからの根回しは無い。これはいい印象を持たれてるかも！

「どんな褒め言葉でしたか？」

「何でも補佐としての仕事より、昼寝を第一に考えるすばらしい思考の持ち主だとか」

「・・・・・・・・」

兄が兄なら・・・・妹も妹と言うことか・・・・。血はつながって無いくせに・・・。

僕は壊れた人形のように首を動かし、静かにフェイトさんを見た。本人は普通に麺をすすってたよ。

――――――――くそぅ。反論できない。事実だから。昼寝第一だし。悪いとも思って無いけど。

しかし天下のエース・オブ・エースさんに、変なイメージを植え付けられるのはどうだろうか？

「それは・・・・休息は誰にでも必要ではないですか」

「へぇ～フェイトちゃんもいい部下を持ったね～」

「・・・・・・・・」

終始笑顔のエース・オブ・エース様。どうやら管理局の白い悪魔というのは本当らしい。

何～でだろ～う。イメージうんぬんより、敵意・・・じゃない殺意を感じる気が・・・・・・・。

僕はもう反論はやめだ。もし言うようなら収束砲の直撃かも。かもかも。

「・・・・・まぁそれよりも、高町一等空尉」

「話を逸らしたね」

・・・・こういうときはフェイトさんと同じようなことを言ってくる。親友でしたね。わかります。

「もういいです・・・・・・・僕は戻るのでお二人でどうぞ」

百合百合してろ。そしてそのまま結婚しちゃえ。お似合いだよ。どうぞお幸せに。

「ちゃんと反省してよね」

「さあ？どうでしょうかね」

するわけないだろう。昼寝をこよなく愛するこの僕が。

そして僕はデバイスルームに行った。まだデバイス完成してないし。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「あれ？完成してる？」

デバイスルームに入るとなぜかデバイスが完成していた。

『貴方が昼寝してる間に完成させました』

「おお～～さっすがソル」

後はデータ調整だけだったのでデバイスだけでも出来たらしい。

ちなみにソルだけＡＩを乗せた。性格はルクスと同じ。だが性別は男。このごろ男と話して無いから。

調整のためにここにソルを置いてたんだけど正解だったな。

「じゃあ明日シャワー浴びるとしてもう寝よう」

そのときバシュっと扉が開く。

「――――――――待ってください」

「？」

そして入ってきた人に声を掛けられた。

それが誰であるかは、数分前にあったのですぐに判断できた。

「・・・・高町一等空尉。フェイトさんから聞いたんですか？」

「なのはでいいよ。フェイトちゃんが君はここにいるって言ってたから」

「どうかしましたか？・・・・まだ僕をイジメたいと？」

「にゃははは・・・そんなんじゃないよ」

「それじゃあ・・・デバイスの整備ですか？簡単なことなら出来ますよ？」

「そうなの？」

「ええ。そこの指輪とこのブレスレットと、あそこの×××は僕の自作ですし」

片方のブレスレット見せて、指輪とあれを指差す。

「す、すごいね・・・でも・・・違う話なんだ」

「そうですか・・・・・とりあえず場所を移動しましょう」

「そ、そうだね・・・」

そして僕らはデバイスルームを出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「どうぞ」

「ありがとう」

局の屋上に僕は案内した。

ここは少し高い柵に覆われて、花壇があり洋風なベンチがいくつかあって、案外洒落ている場所だ。

なのはさんはそこの一番いい席に座った。月の光がなのはさんを照らす。絵になるねぇ〜〜。

備え付けられている自動販売機で、カフェオレと野菜ジュースを買って、カフェオレをなのはさんに渡した。

僕はなのはさんが”隣でいいよ”というので隣に座り、野菜ジュースのキャップをあけて一口。

「それじゃあ話を聞きますよ」

「う、うん・・・・・」

何故か喋ってくれない。どうしたんだろう?

「ちゃんと人の居ない場所を選んだつもりなんですけどね。フェイトさんにもバレずに」

「!?ッ・・・・いつ気付いたの?」

「貴方が僕を探していた、と言った時からです。聞かれていい話ならフェイトさんと一緒に探すハズですから。部屋に戻るついでにね」

「そうなんだ・・・。頭がいいね。フェイトちゃんから聞いた通り」

「まさか。足を引っ張ってるだけの邪魔者ですよ。僕は」

「・・・・・そうやって・・・・一人で全部抱えるんだね」

核心を突いてくるねこのひとは。回りくどいのはしない性質(たち)だろうケド。過去の経歴を見ても。

「・・・・・抱えるも何も、現実を見てるだけですよ」

「それは現実じゃないよ。言い訳作って逃げてるだけ」

「・・・・・・クロノから何を聞いたんですか？」

「・・・・・貴方が――――――――――だということを」

なんだ・・・それだけか。なら安心。

「・・・・・なるほど。だから最初にあった時、敵意を向けてたんですか。納得です」

「あれ？そんなに向けてた？」

「ええ。バッチリ」

「ハハハ・・・ゴメンね」

「構いませんよ。親友の隣に化け物がいたら、嫌でもそうなりますから」

「そんなこと・・・・！！」

「ないといえますか？」

「・・・・・・・・・・・・・」

黙ってしまった。しかし沈黙は肯定と受け取れますよ。

「いいですよ。僕は気にしてませんから。気の済むだけ殺気を飛ば

してしてください」

言っとくけどMじゃないからね。気にしても仕方ないだけ。

「・・・クロノ君の言ってた通り。無関心なんだね」

ギクッ。バレてたか。

「そんなこと言ってたんですか?失礼なヤツですね。否定はしませんけど」

「しないんだ・・・。でも・・・私は君を化け物扱いしないよ」

「同情ならいりません。そんな事されるなら拒絶された方がマシなので」

「同情じゃないよ。私はただ君と友達になりたいだけだよ」

笑顔のエース・オブ・エース。だがそれは・・・。

「なのはさん。無理な同情は下手な拒絶より、ずっと傷つく事もあるんですよ?」

「だけど・・・話さなきゃ何も始まらない」

「本人の意思も無視してでも、ですか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜそこで黙るのか。

僕は単に貴方の今までしてきたことを、簡潔に分かりやすく言っただけですよ。

貴方の覚悟を試してみたけど・・・見当違いかな。

はぁ・・・損な役回りだ、これは。

「なのはさん。確かに貴方は人の意思を無視して”お話”してきました。
それで今まで全部解決してきました。しかしこの世の中には貴方の考えに賛同できない人も多く居る。
そして貴方はその賛同できない人にまた無理矢理”お話し”するでしょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「しかし・・・そうして救った人もたくさん居ると思いますよ?」

「!!ッ・・・・・」

「生きるということは誰かを必ず傷つける。しかしそれは悪いことではない。
・・・この際はっきり言いましょう。
人を傷つけたくないなら、今ここで命を絶て。守りたいのなら、人を傷つけることに責任を持て」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから貴方は自分がしてきたことに責任を持つべきです。そうでなければ貴方に敗れた人達の意思も無駄になってしまいますから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから僕なんかを相手に、言い包められちゃダメですよ。貴方のしてきたことは僕の言葉なんかで無駄になることなんですか?」

「・・・・・・・ちがうね。うん。私のしてきたことは正しいのかもしれないし、間違いかもしれない」

「・・・・・・・・・・」

「だけど、この方法で救える人がいるなら私はこの道を進んで行く」

「・・・その方法で救えない人がいても?」

「見捨てない。全力で救う努力はする。けど・・・もしそれで救えなかったら・・・その人の意思を背負う」

「・・・・・・・・合格です。スイマセン、試すようなマネをして。けれど僕は貴方の覚悟を確認したかった」

「いいよ。私も自分の覚悟の本当の意味を・・・見つけることが出来たから」

「そうですか・・・」

「うん。じゃあ改めて・・・・友達になろう?」

そう言って握手を求めるなのはさん。

「例えそれが僕の意思に反していても?」

これが最後の確認だ。

「うん。これは私がやりたいからやるの。私は友達になりたいから、貴方の意思を無視するよ」

「・・・そうですか。それじゃあ改めて名乗りましょう。――――――です」

そう言って僕はその手を握る。

「高町なのはです。よろしくね」

彼女はしっかりと僕の手を握ってくれた。クロノ以来かな。誰かと握手をしたのは。

タッタラタッタッタ～～♪。ライナの中に”友達”というカテゴリーができた。

「最初聞いた時は不安で仕方だったけど、今なら安心できるよ」

「クレームなら、知り合いにとことん甘いシスコン提督までお願いします」

「そうだね。――――君って聞いてたイメージと違ったし」

「ちなみに最初はどんなイメージでしたか？」

「体がでかくて、強面な顔で、不良っぽいイメージだったかな？」

「・・・・・・そうですか。ちなみに今は？」

「真逆だね。身体も普通だし。顔はどっちかと言うと女性っぽいけど、性格はフェイトちゃんから聞いた通り、面倒くさがりやだった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何か傷ついた。女顔って遠まわしに言われて傷ついた。

「――――――――――でも、やるときはちゃんとやるってわかったよ」

「・・・・・・・・・・そこは”いつもちゃんとやってる”って所で

しょう」

「にゃははは。冗談がうまいね、――――――――君は」

「ガハッ！」

身体に多大なダメージが来た。ホントホント。

「そろそろ行くね」

立ち上がり屋上の出口へと向うなのはさん。

「はい。それと人前ではライナって呼んでくださいよ」

「わかってるよ。じゃあねライナ君」

「はい。なのはさん」

笑顔で手を振った後、屋上の階段を下りて行くなのはさん。

その音が聞こえなくなったところで、僕は自身の相棒に声をかける。

「ルクス。人を励ますのって疲れるな」

『主には損な役回りでしたからね』

「こんな僕が人を励ます立場になるとは・・・大丈夫かな?この世は」

『主に心配されるなんて・・・この世界も終わりですね』

「ハハッ。それもそうだ」

そしてしばらく月を見て行く。雲も少ししかなく、月がちゃんと街や僕を照らしてくれる。

「・・・・・月の光りか・・・あのときを思い出すな。この眼を初めて使ったあの夜を」

『今更ですか？過去を気にするなんて貴方らしくも無い』

「そう割り切れるもんじゃないんだよ。このレアスキル――――――」

「――――――『複写眼（アルファ・スティグマ）』と『殲滅眼（イーノ・ドゥーエ）』の呪いは――――――」

本気と書いてマジって言うの面倒だよね（後書き）

はい来ました。主人公チートっぽいです。

あと伝勇伝のキャラはそのまま出ては来ませんので、そこは大目に見てください。

感想や誤字脱字があったらお願いします。

お買い物と影

意外と有意義だった昨日の明日。

つまり今日。

「ちゃんと起きてくれたんだ」

「ええ・・・・。まあ・・・・」

デバイスに”起された”の間違いですけど。スッゲー眠いですけど・・・。

「あれ?私服は?」

「え?私服?制服じゃダメなんですか?」

僕は制服で街に出る気マンマンなんですけど。

「ダメだよ。ちゃんと私服でいないと」

そういうフェイトさんは紺の半袖に、ジーパンとラフな格好で、似合ってる。

「でも無いですし」

あるのといえば、記念でもらった囚人服ぐらい。それで街を歩けと?

「ないの!?何も!?」

「はい。あ、バリアジャケットでいいですかね?」

ちょっとコスプレっぽいけど大丈夫だろう。

「ダメだよ。デバイスは許可が無いと使っちゃダメ」

厳しいな~~。

「じゃあ練習服でいいですかね?」

「・・・仕方ないね。ちゃんと今日買おうね」

「はい」

そして僕らは街まで出かけた。寝たい~~。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxx

「それじゃあまずは服を買おうかな。ライナもそれでいい？」

「ええ」

ミッドチルダの中心部の買い物エリアにいる。

しかし通行人の目が気になる。

まあいくらサングラスで変装しても、隣に金髪美少女がいることには変わりないので仕方ないけど。

「そういえばライナってなんで髪を伸ばしてるの？」

「え？ああ、そういえば切ってなかったですね」

十年監獄にいれば嫌でも背中まで伸びるし。しかしすっかり忘却してた。

「まあ髪なんて気にしてませんし」

「そんなトコもズボラなの？後で髪切ろうね。あそこで仕事があるんだから」

「そういえばそうでしたね」

フェイトさんが指差すのはチルダ・サープラット・ホテル。近くで見るとでかいね。

ここは豪華宿泊ホテルで、著名人たちの御用達の場所らしい。

そこの確か十周年記念のパーティだったかな？

謎の組織に迫る手がかりを手に入れるため、パーティに潜入するのって。忘れてました。

「・・・・忘れてたでしょ」

「・・・・・・・・・・まさか」

なぜバレたのだろう。ううんミステリー・・・・・。

「それじゃああの店で服をそろえようか」

「はい」

店の名前は『ユニ◯ロ』。あるんだユニク◯。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxx

「う～～ん・・・・ライナってやっぱ男らしくないよね」

「・・・・・軽いノリで傷つけるのやめてくれません？」

フェイトさんの選ぶ服を何着か試着していたが、どれもフェイトさん自身が気に入らないらしい。

どれでもいいと思うけど・・・。

「中性的なライナのに似合うとしたら・・・」

「・・・髪を切れば多分男らしくなります！！」

もう僕の心はズタズタだよ。気にしてるんだから僕が女顔だって！！

「そう？それじゃあ、あれでいいね」

指差された服を普通に試着。

はたしてその結果は！！・・・・・・・・別に引きずらなくていいですね。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxx

「嘘じゃなかったらしいね。男らしくなるって」

「・・・ヒドイですよフェイトさん・・・そして元気ですね・・・・・」

時刻は十二時とちょっと。昼寝のゴールデンタイムなのに寝れない。つらい・・・。

場所は『ハーフ・クォーター』ってよく分からない飲食店。何等分するんだ、この店。

僕ぐったり。フェイトさん笑顔。

なぜかと言うと僕は、フェイトさんの荷物持ちをさせられた。

フェイトさんいわく”こうゆうのは男性がやるものだよ”と言われたからやったけど・・・疲れた。

フェイトさんって容赦なく色々買うし・・・ぬいぐるみや服とか・・

・。

僕の格好は、群青色の半袖に、黒のジャケット。そしてスレンダーな青のズボン。

詳しいことは知らない、もとい興味ないないんで省く。

ついでにその後髪を切った。何とか男っぽくなった。よかったよかった。

「ライナの体力が無いだけだよ」

「・・・・・そうですかね・・・？ふ、普通だと思うんですけど・・・・」

人を荷物持ちにしておいて・・・。

それはそうと、お腹がすいてるのでメニューを見てが・・・。

「フェ、フェイトさん？メニューが・・・・・」

「うん・・・私も同じ事考えてた・・・・・・・」

以心伝心すばらしい。携帯要らず。それはそうと。

メニューは確かにおいしそう・・・なんだけど・・・・ネーミングが問題だった。

例えると、『炭焼きハンバーグ（クォーターバージョン）』とか『五目チャーハン（ハーフバージョン）』とか、必ず何等分かにされ

ている。どういうこと?

しかも『何が二分の一、もしくは四分の一になるかは、シェフの気分で決めます♪』とか書いてある。

何それ?見た目と違うんじゃメニューの写真は意味無いじゃん。

突っ込んでほしいの?他の客は何も言わずにに食べてるし。僕らがおかしいの?

「と、とりあえず・・・何か頼みましょう」

「そ、そうだね・・・・・」

僕は『カレーライス(クォーターバージョン)』を頼んで、フェイトさんは『親子丼 (ハーフバージョン)』を頼んだ。

そして三十秒後に来た。早っ。ちゃんと作ってる?

「・・・・これは何の嫌がらせでしょうかね?喧嘩売られてるんですかね?」

「さ、さあ・・・・・?」

確かにカレーはクォーターバージョンだった。すごいムカつく。

だってルーが四分の一で、ご飯が四分の三だよ?足りねぇよ!!なんだこの嫌がらせ!!

ちなみにフェイトさんの親子丼は、ご飯が二分の一だった。まだマ

シだった。

いつでも美形は得をするのか・・・。

「とにかくっ！食べようね？」

「・・・・・・・そうですね・・・・・・」

そして僕はカレーを一口食べる。すると・・・・・・・・・！！

「う、うまい！！ルーだけじゃなくてご飯も！！」

「ほ、ホント？」

フェイトさんも恐る恐る食べると・・・！！

「お、おいしい！！今まで食べた親子丼で一番美味しい！！」

そう！！ここの料理は凶悪にうまい。

「だけど・・・量が・・・・・・」

「くそう！！」

しかしそれは何等分かにされているため、長くは味わえない。

「これ・・・・もう1回頼まないと・・・一人前にならないよ」

「これがここの人たちが何等分かにしてる理由なのか！」

これはヒドイ！！うまいのに多く食べれないから、また客に頼ませる。

それでどんどん稼ごうって作戦か！！ヒデェ！！

しかし手のひらで踊らされると分かっていても、頼みたいと思ってる自分がいる！！

「とりあえず食べましょう」

「そうだね」

そして僕らは普通に平らげた。・・・また来ようかな、ここ。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxx

「今日はありがとうございました。フェイトさん」

「え？」

時刻は夕方。夕方なんて時刻は無いけど。用は五時くらい。

局へ帰る途中フェイトさんにお礼を言う。

「スゴイ楽しかったですし。服も選んで貰いましたから」

「別にいいよ。私も楽しかったし」

「いつかお礼はしますから」

「じゃあ楽しみにしてるね♪」

そして僕の買い物は幕を閉じた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ｘｘｘｘｘｘｘｘ

「準備はどうかな？」

「別に」

「愛想が無いな」

「普通」

「・・・・まあいいか。それよりあの情報は本当なのか？」

「本当」

「なるほど。ついにアイツとご対面か。”シオン”は？」

「『運命のイタズラだろう。これから先は気を引き締めるように』と」

「言われなくてもだな」

「では予定通り？」

「ああ。計画開始の狼煙を上げようじゃないか」

この会話は一体何を意味するのか・・・・・・・。

お買い物と影（後書き）

感想があったらお願いします。

パーティ潜入！結構疲れる

「めんどくさい♪めんどくさ～～い♪」

『主・・・面倒くさいが口癖になってますよ』

「いいやルクス。僕の口癖は昼寝だ！」

『威張ることですか？』

「それよりも。なんだっけ？何で僕ってこんなことしているんだっけ？」

『二十分前に言われたじゃないですか』

「あ、僕はここで昼寝していいと」

『そんな事言われるわけありません。さっさとスーツに着替えてください』

「ボケが通じないなぁ」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

場所は局の広いロビー。

周りにはちゃんとしたドレスやスーツを着ている人がいる。パーティに潜入する局員の人達。

潜入部隊はここで一度集合と言うことになっている。

「ご、ゴメン、ライナ！！ドレスなんて初めて着るからよく分からなくて・・・・！！」

『・・・・・・・・・・・・』

集合場所にフェイトは黒を基調としたドレスに身を包み、所々に金の宝石を身につけていた。

着替えたフェイトはライナがロビーで待っているハズなので急いできた。

だが・・・・・・・。

「あれ？いない？」

ライナと思われる人影は見当たらない。

そんな姿を見ていた他の局員は無言。

いつの間にかここにいる人達はフェイトの姿に見惚れてた。

「――フェイトさん。とってもお綺麗ですよ」

「えっ？そ、そうですか？ありがとう・・・」

こうして口説きにかかる局員が出てきた。

しかしそんな事は知らないフェイトは、顔を真っ赤にして俯いた。

「・・・まるでお姫様です・・・」

「き、きれいだ・・・・・・」

そんな小声が聞こえる。フェイトさんはさらに耳まで赤く染めた。

一般局員もどんどんと集まり、人混みができはじめた。

「はいはいみなさん。仕事に戻ろうね」

騒ぎを聞き付け、ロビーにやってきたリーダー格の一人――――――っていうか、なのはが言った。

その姿は純白のドレスを着て、胸にあるレイジング・ハートがキレイに目立つ。

「あれ？なのは？どうして？」

「クロノ君に頼まれたの。備えあれば憂い無しらしいよ」

「そうなんだ・・・。ありがとう、なのは。」

「ううん。・・・それにしてもフェイトちゃん、どんどんキレイになるよね。嫉妬しちゃう」

「そっ、そうかな？」

「うん、しかも豪華な宝石も買ったんだ。それじゃあお金なくなっちゃうよ？」

「そうなんだけど・・・・・・いいと思ったらすぐ買っちゃうんだよね・・・・」

フェイトは胸にある金色のネックレスを弄りながら答える。

「にゃはは、私はあんまりそういうのには興味ないからわかんないや・・・」

「なのははスイーツだもんね。昔から」

「うん♪そういえば新しいスイーツ店が出たんだってっ！！」

「それはスイーツ愛好家として見過ごせないね。今度休みをとって行く？」

「うん♪そうしよう！！・・・・で、まだライナくんは来ないの？」

「うん、もう来ると思うんだけど・・・・まさかまた昼寝じゃあ・・・・」

「にゃはは・・・ありえそうだから怖いね」

「だから!!ちゃんと持ってるって!!」

『いいえ。ちゃんと確認してください』

「お前は僕の母ちゃんか何かか!!」

『ズボラな主のためを思って言ってるんですけどね』

「ズボラで悪うございましたねぇ!!生真面目なデバイスさん!?」

『主も少しは私を見習ってください』

「デバイス見習う主ってなんだよ!!」

騒然としたロビーに、デバイスと漫才してる声が響いた。

あれやこれやと話していた隊員たちは振り返った。

「や、どうもどうも。さっきのは気にしないで下さい」

ネクタイを片手に２０歳ぐらいの美男が階段をゆっくりと降りている。

どうやらネクタイを結べないらしい。

紺色のスーツを身を包む男は、所々に青のアクセサリーを身につけている。

そして階段を下り、隊員たちがさっとあけたロビーの真ん中を戸惑いながらも進んでくる。

コツコツと靴の音を響かせ、フェイトたちの前までやってきた。

「どうかしたんですか？何かいきなり道を空けられたんですけど」

『主が引かれてるんじゃないんですか？』

「なんで僕が引かれなきゃならない！？」

『昼寝主義者だから、ですかね』

「この世の昼寝主義者達に謝れ！！誠心誠意を持って謝れ！！」

『そんなのどこの次元世界に行っても貴方だけですね』

「そんな事は無い！必ずどこかにいると僕は信じる！！」

『その元気を別のところで発揮してくれると嬉しいですね』

「ルクスには一度、昼寝の大事さを1から1億まで教えなきゃならないな」

『それほど無駄な知識は無いですね』

「何をぉ！？僕のデバイスのクセして昼寝のよさが分からないだと

お！？」

『逆に昼寝好きな主のための、抑止力として私が生まれたんですね』

「嘘だアァァァァ！！」

男は頭を抱えうずくまる。

一同は呆気にとられていた。デバイスと漫才していることもだが・・・。

それよりも、その圧倒的な美男子の登場に呆気にとられていた。

「えっと・・・・・どちらさまで？」

我にかえったフェイトは一番の疑問を聞いた。

男はゆっくりと顔を上げてフェイトに言った。

「はい？どちら様って・・・・決まってるじゃないですか」

そしてニヤッと不適に笑いながら言った。

「モ〇キー・D・ルフィ！」

『自粛してください。某ゴム人間さん』

フェイトはそのボケと突っ込みに覚えがあった。

「ライナ・・・・？」

「？僕が僕以外の何に見えるんですか？あれってボケじゃない？」

『てっきりフェイトさんのボケで言ったかと思ったんですけど・・・』

「私ボケてなんか無いよ！！」

フェイトの抗議の声がロビーに響いた。

しかしすぐに静まるロビー。

「な、なに？何でこんなに静かなの？」

『主のせいですね』

「何で僕！？」

『主が黒と紺を間違えるからいけないんです』

「あれ！？これ黒じゃないの！？」

『どう見ても紺色です。目がないんですか？』

「っていうかお前こそ。これは金色じゃないだろ」

『金色じゃなくて紺色！！』

「？何か違う？」

『字が違います!!そしてそれは金色ではなく金色といいます!!』

「あれ?そうだっけ?」

『はぁ・・・今時小学生でも間違えないようなことを・・・貴方何歳ですか?』

「今年で二十歳だよ!!悪いかコンチクショウ!!」

しかしロビーは無言。

その美男子は再びうろたえて、土下座した。

「・・・・・僕らが悪かったですから、無言だけは勘弁してください」

『無視されるのはもう無理です。だれか突っ込んでください』

本気で土下座している美男子。

そこでなのはがもう一度確かめるように聞く。

「あ、あの・・・ライナ君・・・・・だよね?」

「だからそう言ってるじゃないですか」

『いつ言いましたっけ?』

「だから――――――――」

「はいストップ！それじゃあまた漫才になっちゃうよ」

危うく無限ループになるところをなのはが止めた。

「・・・どうやら僕が誰か分かっていないようなので・・・宣言しましょう」

『ボケないで下さいよ』

「・・・・・・・・・・・・・ぼ、僕の名前はっ！！」

『ボケようとしましたね』

「・・・・ライナ・リュートです。趣味は日によって変わります。彼女募集中です」

デバイスにすっかり虐められた美男子――――――――ってかライナはテンション駄々下がりで宣言した。

「「「「「う、嘘ぉぉぉぉぉお！？」」」」」

そんな絶叫が局に響いたとか。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X

「おっどろいたぁ～～・・・・ライナ君ってスーツ着るとこんなにしっかりするんだ」

「・・・なのはさん。それは僕はいつもダルそうな感じとでも言いたいんですか？」

「え？それ以外に何があるの？」

「・・・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・」

今はパーティ会場に向っている車の中。

ライナをはさむようにフェイトとなのはが後ろに乗っている。

「・・・せまい・・・二人乗りの席に三人乗せるのは間違ってる・・・」

「失礼だねライナ君は。私達じゃ不満？」

「もう少し広ければ嬉しいですけどね」

「仕方ないよ。他の人達は外の警備につくんだから、大きいのは用意できないし」

「潜入部隊って・・・僕となのはさんとフェイトさんだけですか？」

「うん。スゴイチェックが厳しくて忍び込むのは無理だって。だから正式に招待状が来た私達が」

「フェイトちゃんは、前にある事件の経緯で、オーナーさんと知り合いになったんだよね」

「うん。ってそういうなのはも、”不屈のエースを是非私達のパーティの招待したい”って言われたんでしょう？」

「うん。なんか照れちゃうけどね・・・・・」

「さすが。有名人は違いますね」

「そういえばライナは何で招待状が来たの？」

「え？う～～ん・・・シークレットですかね？」

「教えてよ～」

「そろそろ着きますよ」

そしてホテルの前に到着した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxx

「ひゃ～～。大きいですね～～」

「それに見たことのある人もたくさん居る」

「そうだね～～」

車から降りてビルに入るまで、いろいろな人が場を占めていた。

「ルクス。あれは大丈夫かな」

『問題ないものと』

「そっか」

「ライナ～～？何してるの～？行くよ～～」

「あ、はい」

何時の間にかフェイトさんたちはビルの入口付近まで歩いていた。

「お客様。失礼ですが招待状を」

「あ、はい」

「わかりました」

ビルの入口では係員らしき人が招待状のチェックをしている。

僕らは招待状を出した。

「確認しました。高町なのは様と、フェイト・T・ハラオウン様と、ライナ・リュート様ですね」

「はい」

「パーティ会場は二十五階です」

「ありがとうございます」

そして僕らはビルに入って行く。

そしたら今度は受付で荷物チェックらしい。

「失礼ですが、高町なのは様とフェイト・T・ハラオウン様とライナ・リュート様でしょうか?」

「はいそうです」

「あくまで防衛処置ですが、デバイスはこちらに預けてもらえますでしょうか？」

「はい」

その言葉通り、僕らはそれぞれのデバイスを渡した。

『主。くれぐれも粗相の無いように』

「分かってるって、ルクス」

『土産話を期待してます』

「そんな面白い話は無いと思うよ。ソル」

こんな会話をしながら。

「最後にバッグの中身を拝見させて貰ってもよろしいですか？」

「構いません」

僕らはそれぞれのバックを渡す。そして受付の人が拝見する。

「結構です。それではエレベーターはアチラで、会場は二十五階です」

「ありがとうございます」

そして僕らはエレベーターに乗った。そこでなのはさんに話しかけられた。

「ライナ君ってこういうの慣れてるの？」

「え？なぜですか？」

「いや・・・様子を見てたら慣れてるのかな？って思って」

すごいオロオロしてましたもんね、あなた方。見てるこっちが恥ずかしかった。

「普通だと思うんですけどね」

「ところで・・・デバイスは預けてよかったの？」

フェイトさんの疑問。確かに僕らは犯罪者を逮捕しに来ている。

「入らなければ話になりません。そしてデバイス無しでも充分戦えるでしょう？」

僕はデバイス無しでも大丈夫だし、奥の手もあるし。

「ま、まあね・・・」

フェイトさんの顔が引き攣ってる。まさか・・・・。

「肉弾戦無理なんですか？」

「え！？そ、そんなこと無いよ！？」

「ならいいですけど」

そんなこんなでパーティ会場に着いた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxx

「き、緊張するね」

「そ、そうだね。なのは」

扉の前でガチガチになってる二人。パーティ初めてらしいから当然かも。

「もっとしっかりしてくださいよ。なのはさんは不屈のエースでフェイトさんは有名な執務官でしょう？」

「う、うん・・・わかったよ・・・・・」

そして僕は扉を開けて中に入る。

「すごい豪華・・・・・」

「ホントだね・・・・・・・」

会場内はたくさんのシャンデリアなどで明るく輝き、料理が所狭しと並んでいる。

ワインを片手に著名人たちが皆、正装で談笑している。

「――――――――これはハラオウン執務官殿!ご出席ありがとうございます!!どうですかな?我ホテルは?」

そこに一人の男性が現れる。

ところどころに白髪があるが老人で、最高級であろう黒のスーツで身を包んでいた。

口ぶりからしてオーナーさんだろう。

「ベリエル会長。ここまできれいなホテルにお招きいただき、ありがとうございます」

「ハハハっ!!光栄なことですな!!」

フェイトは営業スマイルをしたまま、ここのオーナーのベリエル・カークスティと会話を続けた。

カークスティ家といえば有名建築家を多く輩出している家系らしい。僕は知らないけど。

「高町殿も来て下さいましたか！！」

「ええ。ベリエル会長。招待して頂きありがとうございます」

どうやら僕の出番は無いらしい。二人はオーナーさんと一緒に談笑している。

よく見るとそこに僅かだが人が集まってきている。

（先ほどのオロオロは何処へやら。しっかりとしてくれている）

僕はそこらにあったワインをもらい、会場の隅っこの窓の場所で外を見た。

（一応、警戒はしておかないと）

ワインを飲みながら外を見る僕。意外とワインがうまい。

「本当に来るのかな・・・・・・ん？」

一度会場の方を見ていると、一人の少女がウロウロして困っている。

「これは助けなければ」

てなわけで僕はその少女に話しかけた。

「何かお困りですか？」

「えっ？」

見た目は１５歳位で、真紅のドレスを身に着けている。結構可愛い。

「えと・・・母と逸れてしまって」

「そうですか。ちなみにその御婦人の名前は？」

「ランド・カークスティです」

「・・・これはこれは・・・カークスティ殿のご令嬢でしたか。自分はライナ・リュートといいます」

「私はエル。エル・カークスティです」

「エルですか。素敵な名前ですね」

「そうですか？ありがとうございます」

「それでは案内しましょう。ランド殿なら先ほどお見かけしましたから」

「ありがとうございます」

そして人混みを通り抜けて、他の方と談笑しているランドさんのところまで来た。

「お話中失礼します」

「貴方は？」

「自分はライナ・リュートといいます。そちらのお嬢さんが貴方と逸れたらしく、案内しました」

「そうなんですか。ありがとうございます。エルもお礼を言いなさい」

「はい。ありがとうございます」

お辞儀をしてくる二人。それを僕は営業スマイルで返す。

「いえいえ。今回のパーティにご招待くださり、ありがとうございます」

「どういたしまして。ところで貴方・・・・婚約者は居ますの？」

「え？婚約者ですか？」

「そうです。もし居なければエルはどうですか？これでも自慢の娘なのですが」

「ちょ、ちょっとお母様！？」

「そんな恐れ多いですよ。私には勿体無いほどのお嬢さんです」

「まあ、ありがとうございます」

「ラルドさん。私達にもご紹介してくださいません？」

さきほど談笑していたラルドさんの知り合いがそう言ってきた。

「これは失礼しました。私はライナ・リュートと言います。以後お見知りおきを」

自己紹介したらいろんな人から質問攻めにあった。

「職業は何をなさっているのですか？」

「管理局員です。一応二等空尉です」

「まあ、そうなんですの？失礼ですがお歳は？」

「今年で二十歳です。まだまだ若輩者ですよ」

「若いのにしっかりしていますのね」

「私などまだまだですよ。今はハラオウン執務官の下で補佐をしております」

「ハラオウン執務官とは・・・あの？」

「ええ。アチラで談笑している方です」

「同じ仕事場に居るとやはり浮いた話もあるのですか？」

「彼女は気の難しい方でして。そう言った話は何もありません」

「まあ、イメージと違いましたわ。お似合いの二人ですのに」

「私などが釣り合いませんよ。そうであれば光栄ですがね」

そんな感じの話をしていた。

「では私はこれで」

「この度はありがとうございました」

「いえ、滅相も無い」

そんな感じで別れた。僕は近くのテーブルの料理を食べて休憩。

有名なシェフが惜しみ無く最高級食材を使った、和・洋・中の見事な料理が並ぶテーブルで出席者は会話をしている。気のせいか地球の料理が目立つ。

僕は一度フェイトさんたちのほうへと戻った。

フェイトさんたちはまだベリエルさんと会話していた。

僕に気付いたらしいベリエルさんはフェイトさんに話しかける。

「――――そちらの青年は？」

「ああ、彼は・・・・」

僕はイメージで紳士らしく振舞った。

「ライナ・リュートと言います。一週間ほど前からハラオウン執務官の補佐として働いております。　以後お見知りおきを」

「そうか。・・・・ライナくんでいいかな？」

「構いません」

「君には婚約者がいるかね？」

「ええ。いますよ」

「「えっ？」」

答えた僕になのはさんとフェイトさんが反応した。なぜ？

「ほぉ・・・そうなのか」

「しかし彼女は気難しい方でして。今日も仕事をしながら待っていることでしょう」

「ハッハッハッ！！それはそれは・・・中々愉快な女性じゃな？」

「ええ。一緒に居るだけで楽しいですよ。楽しすぎて虜になってしまうほどに。そこは彼女の悪いところですけどね」

「ハッハッハッ！！君は中々面白い。気に入ったよ」

「ありがとうございます」

「孫を紹介しようかと思ったんだが、それほどの彼女がいるのなら仕方あるまいな。
・・・・・・さて。ハラオウン執務官、なのは教導官、ライナ君。パーティーを楽しんでくれたまえ。
私は他の招待客と話すのでね」

ベリエルさんは、少し離れた場所にいる数人の男を指した。おそらく同じ業界の方だろう。

あの人ほどになると、色々やらなきゃならないこともあるってことかな。

「はい、失礼させて頂きます」

僕らはベリエルさんから離れて会場の隅っこに移動した。

「・・・はぁ、すっごく疲れたよ。パーティってこんなに疲れるの？」

「ホントだねフェイトちゃん。でもライナ君はケロッとしてるよね」

「普通ですよ。まあ、私は何度かパーティに来たこともありますから」

「・・・・似合わないねその喋り方」

「元に戻したら？」

「まあ確かに。疲れますからねこの喋り方」

一人称が『私』って結構キツイ。

「そういえばライナ君って彼女居たの？」

「そうそう。さっきいるって言ったけど」

「ふふっ。内緒ですね」

そして僕はグラスを二つ持ってきて、なのはさんとフェイトさんに渡した。

「これでも飲んで、適当に時間を潰しててください」

「え？ライナは？」

「僕は外に行ってきます。何か行動していないと」

「それじゃあ私達も」

「いえ。お二人にはここを警護をしてもらいたいです。一番人がいるのはここですから、警備は厳重にしておかないと」

「・・・・わかった。でも無理はしないでね？」

「危なくなったらちゃんと私達を呼ぶ事。いい？」

「・・・わかりました。善処します」

そして僕は会場を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxx

「大丈夫かな・・・ライナ」

「大丈夫だよフェイトちゃん」

「なのは・・・」

「私達はここの人達を守らなきゃいけないし」

「そうだね・・・で、ライナって彼女居ると思う？」

「え？う～～ん、どうかな～～～・・・」

「どうなんだろう・・・」

ちょっと浮かない表情をしているフェイトに、なのははニヤリと笑った。

「フェイトちゃんってライナ君の事好きなの？」

「え？違うよ、そんなんじゃないよ」

「それじゃあ別にいいと思うけど」

「そうなんだけどね。なんていうか・・・・・・」

「やっぱそれって――――――――――」

バリィィィン！！

なのはの声を遮ってガラスが割れる音が会場に響いた。

「大漁じゃないか。ハッハッハッ！！」

パーティ潜入！結構疲れる（後書き）

誤字脱字、感想があったらお願いします。

目的不明の敵と正体不明の味方（前書き）

二話同時掲載です。何となく。

目的不明の敵と正体不明の味方

「――――――――きゃあああ！！」

会場は、突如窓から入ってきた黒ずくめの人達の登場によって混乱した。

「静かにしろっ！！」

ドンッと黒ずくめの人達の一人が天井に威嚇射撃。それによってここにいる人が全員座り込んだ。

ガシャーン！！とシャンデリアが落ちてくる。

「ぐあっ！」

そのシャンデリアの破片が一人の客の腕を切ったらしい。

「だ、大丈夫ですか！？」

その傍にいた少女、エルが駆け寄る。

「動くんじゃねぇ！！」

しかしそれをもう一人の黒ずくめの男が、ライフルのグリップで突き飛ばす。

「きゃ！！」

「エル！！」

それを母親であるランドさんが駆け寄る。

「今後怪しい行動をしたヤツは頭ぶち抜くからな！！」

そう怒鳴って会場は静かになる。

会場の隅でなのはとフェイトは身体を屈めながら、今後に事を小声で話す。

（なのは。これは下手に行動できないね）

（うん。デバイスも無いからあの人数を無力化はできないよ）

（もう少し装備してくればよかった・・・）

（外のクロノ君達はどうしてるんだろう・・）

（あっ！ってことはもしかして追ってる組織の・・・！？）

（でもわざわざ騒ぎを起す理由が無いよ。偶然重なっただけじゃないかな）

（じゃあ・・・。追ってる組織はまだホテル内に居るの！？）

（確証は無いけど・・・多分そうだと思う）

（・・・じゃあ私達はここで待ってるしかないね）

（くやしいけど・・・そうするしかないね）

（大丈夫・・・。ライナが何とかしてくれるはずだよ）

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxx

ライナは会場の一階上の男子トイレの個室の中に居た。

大きな音を聞いて会場に戻ろうとしたとき、すでに会場の入口は犯人らしき人達に囲まれていたので、こちらに逃げてきた。

（全員特殊な訓練でもやっているらしい。かなり慣れている）

ここで今後の事を考えていた。

（外のクロノは何やってるんだ・・・ってまてよ？クロノがそんなミスをするとは思えない。
となると犯人達は最初からこのホテルにいたって事？なら従業員に変装していたってことか。
しかし、ここまで下準備をしてきたからには意外と大掛かりな計画らしい。
しかし犯人達の目的は？お金ならわざわざここを狙う必要は無い。
でも別の目的となると・・・・・・・・・）

目的が読めないと行動することが出来ない。

（取り合えずは、お金目的ということにしよう。となるとまずはデバイスを確保しなきゃ）

デバイスは入口。つまり一番下の階にある。

（でもそこはすでに犯人達に制圧されているな。
さっき外や窓のシャッターが閉まったところから、警備室も彼らの支配下。
監視カメラにも注意しなければならない）

トイレの個室にはさすがに無いけど。

（動けない・・・（ライナ。聞こえるか？）クロノ！？連絡していいの！？）

考えことの最中にライナの下へクロノからの通信が来た。
ライナのネクタイピンは通信機になっている。
（これはちゃんと盗聴防止を掛けている。そっちは大丈夫か？）
（きついね。こっちの状況はとして、僕は今、二十六階の男子トイレの個室に居る。フェイトさんとなのはさんは人質と一緒に居る）
（そうか。最悪の事態にはなっていないようだな）
（そっちの状況は？）
（犯人達から金と逃走用のヘリを用意しろと要求が来ている。ホテルの周りはすでに僕らと捜査官が囲んでいる）
（犯人達の人数は僕が見た限りでは十二人。でもその倍は居ると思っておいて。主犯は不明。
装備はライフルやハンドガンと様々。手榴弾を持ってる人も居た。
まだあると思うけど）
（わかった。これからどうする気だ？）
（考え中。警備室も彼らの手中。監視カメラを避けるのは容易じゃないから行動できない）
（一応警備システムをハッキングしようとしているが、期待はしないでくれ）

（デバイスは一階のどこにあるか分かる？）

（ちょっと待ってくれ・・・・・・・・・受付の奥に貴重品専用の金庫室があるらしい）

（了解。じゃあ取りに行ってくるよ）

（大丈夫だろうな）

（さあ？）

（・・・・・もうすこし考えてから行動しろ）

（一応トイレの通気口から行こうと思ってる。ちょうど個室の上に入口があるんだ）

（ちょっと待て・・・・・・・設計図から言うと問題は無い）

（じゃあ頑張りますかな）

（・・・・・無茶はしないでくれよ。お前だけが頼りなんだからな）

（善処するよ。それじゃあ一回通信はきるよ）

（わかった。健闘を祈る）

ピッとライナは通信機を切った。

そして通気口の入口を止めているネジを外して、中に入る。

（明かりが無いや。勘で行くしかない）

ライナは手探りで通気口の奥を進んで行った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxx

「おい。ここ以外の階に人は居たか」

「いえ。今のところは居ません」

場所は変わりパーティ会場。

黒ずくめの人達は、人質を一箇所に集めて周りを何人かの人で囲んでいる。

「そうだ。金色の死神と管理局の白い悪魔が居たっけな。こちらに来させろ」

「はい」

リーダーと思われる男が、二人を指名した。

「お前らだな。立て」

そして犯人の一人がフェイトとなのはを連れてくる。

「初めてお目にかかるかな。私はゴルグ・ダリアリー。こいつらを治めるリーダーだ」

黒い覆面を取りその素顔があらわになった。

黒い髪の毛に黒い目。顔から察するに歳は二十歳後半。右頬に古傷がある。

結構なイケメン。

「ゴルグ・ダリアリー！？」

「知ってるの？フェイトちゃん」

「うん・・・別名『次元の一匹狼』金さえ払えばどんな仕事もやるって、最近裏で有名な仕事人だよ。顔や人相は不明だったんだけど・・・」

「貴方のような方に知っていただけているとは光栄だ」

「そんな一匹狼がなんでこんなことを」

「喋るとお思いで？・・・と言いたい所ですがヒントだけ」

「ヒント・・・？」

「依頼されたのでね。前金も貰ってるので」

「誰から？」

「クライアントについては喋れない」

ゴルグは黙秘。彼にもプライドと言う物があるのだろう。

「さて。それでは」

パァン！

ゴルドのもつ銃から実弾が発射された。その弾はフェイトの右足を貫いた。

「！？ッ」

「フェイトちゃん！？」

「きゃあああああっ！！」

フェイトの足から血が吹き出る。なのはは急いでフェイトに駆け寄る。

それで会場がまたパニックになった。

「さてこの映像を使って脅すか」

「どうして！！」

なのはがゴルグをを睨みながら叫ぶ。その声で再び会場は静かになる。

ゴルグは冷静な顔をして答える。

「彼女を五体満足にしていては何が起こるかわからないからな。ついでにこれを見せれば、急いで外の連中は要求を呑むだろう。エースは失いたくないだろうからな」

「そんな理由で・・・・！！」

「安心しろ。どうせ死ぬ」

「えっ・・・？うっ！！」

なのはは背後から殴られて床に倒れこむ。

「寝ておけ。どうせ逝くんだからな」

「な・・・なの・・・は・・・・・・・・」

足の痛みに耐えながらなのはを呼ぶフェイト。ドレスの一部が血で染まっていた。

（・・・フェイトちゃん・・・・・ライナ君・・・・・）

最後の希望を託してなのはは意識を失った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「ここどこだろう・・・」

ライナはまだ手探りで通気口を進んでいた。

「せめて二十階より下で欲しいな・・・」

そう思いながら、入り乱れてる道を進んでいく。

「どれくらい経ったんだろう・・・二人とも大丈夫かな・・・」

人は暗闇ではすぐに時間の経過が分からなくなる。
自分では五分だと思っているけど、実際は三十分経ってたりするから怖い。

「今は急がないと・・・・ん？なんだろこれ」

通気口を進んで行くと、少し凹んだ感じの感触があった。

「明かりがあればな・・・・って何か置いてある」

棒状の物らしい。そして手で感触を確かめて行くとボタンがあった。
それを押す。すると明かりがついた。

「おおっ！懐中電灯！でも何でこんなトコに」

おいてあった場所を見てみると、メモ書きがあった。

『これを見ている方。それはおそらくこのホテルが非常事態になったからでありましょう。
そんなとき用に、ここに懐中電灯とホテルのマスターキーを置いておきます。
これは私しか知りません。ですのでこれを見ている方に使っていただきたい。
これがあればこのホテルすべての鍵は解除可能です。金庫室や警備室も。
電子キーの場合、そのキーに書いてある八つの数字がパスワードです。

できればこれが悪人の手に渡らないことを祈っています。

ｂｙベリ

エル・カークスティ』

「なるほど・・・ベリエルさんは予めこうなることを分かっていたんだな・・・」

そして懐中電灯を頼りに、ライナは進んで行く。

「必ず返しに行きます。それまで待っててください」

こうして心強いアイテムをゲットしたライナはさらに進んで行く。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxx

「くそっ・・・・」

場所は変わり外。

そこはホテルを囲むように車が鎮座している。その外側をテープで囲んである。

そして黄色いテープの外には、たくさんの野次馬や報道陣が駆けつけている。

そして臨時の作戦本部のテントで、クロノは腕を組みながら連絡を待っていた。

（ライナ・・・頼むぞ・・・お前しか居ないんだ・・・！）

犯罪グループ二十人以上で質量兵器を所持、しかも多くの著名人が人質。管理局は手を出せない。

そんな状況を覆せるのは一人の悪友だけ。

本来なら絶望的な状況だが、クロノはライナを信じている。

「ハラオウン提督！」

「何だ」

一人の部下がクロノの下へと急ぐ。その手には携帯端末。

「これを！！」

「ん？・・・・こ、これは！！」

そこに居たのは覆面を被った犯人と、足から血を流しているフェイトと、その傍で気を失っているなのはだった。

「犯人から”エースたちを失いたくなければ、すぐに要求通りにしろ”と・・・・」

「くそっ！！」

ドンッ！と机を殴るクロノ。その手は血が出てきてしまっている。

「提督、指示を・・・・」

その言葉でハッとするクロノ。

（ここを指揮しているのは僕だ。僕が冷静でなければ出来ることも出来なくなる）

「要求通りに金とヘリを用意してくれ。大至急だ！！僕の名前を出してもいい！」

「はい！！」

クロノの指示でバッと散る部下達。心の中で悪友に祈る。

（ライナ・・・・頼む・・・・急いでくれ・・・・！）

「なのはちゃんとフェイトちゃんが人質ってホンマ！？」

「主はやて！今ご無理をされては・・・！」

そんなときに走ってやってくるのは、夜天の主である八神はやてと、その守護者の一人シグナムだった。

「はやて!?君は療養中だろう!」

「友達の一大事にじっと何かしてられんわ!」

「主はやて!まだ任務での怪我が完治して無いというのに・・・・・」

よく見ると右足を少し引きずっている。それでも無理をして走ったらしい。

「・・・・状況を説明しておくと・・・非常にマズイ状態だ」

「二人になんかあったんか!?」

「・・・・・・これを見てくれ」

そしてさっきの携帯端末を見せる。それを見た瞬間二人の顔が強張った。

「なあクロノ君!二人とも大丈夫やろ!?・・・・死んじゃったりなんか・・・・・・」

はやては泣きながらクロノに詰め寄る。しかしクロノは渋い顔をするだけ。

「・・・・・正直に言うと大丈夫・・・・ではない。むしろ危険だ」

「そ、そんな・・・・嘘や・・・・・・」

はやてはその場に座り込んでしまう。両手をついて顔からは涙が零れ落ちている。

「・・・・こちらは何も出来ないのですか？」

シグナムがクロノに尋ねる。

顔は普通だが内心は違う。握りすぎて手から出ている血が証明している。

「・・・うかつな行動は出来ない。なのは達だけでなく・・・あそこには、ほかの著名人の方もたくさん居る。慎重にいかなきゃならないんだ・・・・」

クロノも唇を噛み締めながら答える。唇から血も出ている。

「・・・ただ時間が過ぎるのを待つしかないとは・・・・！」

「それはまだ早い」

「ど、どういうことや？クロノ君」

再起したはやてがクロノに聞く。しかしその目は赤く腫れている。

「今、フェイトの補佐がホテルで頑張ってくれている」

「それは確か・・・提督の推薦で補佐になった・・・ライナ・リュートと言う男ですか？」

「ああ。そうだ」

「しかし・・・彼はテスタロッサの話を聞く限り・・・・」

「実力不足だと？それは違う。アイツは必ずやってくれる」

クロノの言葉には確信した響きがあった。

「アイツは今、たった一人でデバイスも武器も無しで二十人以上のテロリストと戦っているんだ。
人質と言うプレッシャーに耐えながら。時間制限がありながら。
僕はそんな彼を信じたい。何度も言おう、アイツは必ずやってくれる」

「・・・・・私はその男を誤解していたようです。私もその男を信じて待ちましょう」

「せや・・・友達のために・・・命を賭けている人を信じるんや」

二人も祈るようにホテルを見上げた。

（頼んだぞライナ・・・お前に・・・全てを託す！）

クロノも二人に習うようにホテルを見上げた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「よいしょよいしょ・・・・まだかな下は・・・・」

ライナはまだ通気口を彷徨っていた。

「ん？あれは・・・・」

懐中電灯で辺りを照らしてみると、出口らしいところがあった。

「やっと見つけた！」

急いでそこまで行き、閉じられている網を殴って破る。

そしてそこから顔を出す。

「うおっ。ここってもしかしてエレベーターの？」

そこはエレベーターの通り道だった。下は見えないほど高い位置。

「はしごは・・・あったあった」

すぐ隣にはしごがあったのでそこに移る。

「急がないと・・・！」

そしてそのはしごの両端を持って、滑って降りる。

時間が経つと、一番下であろうところでエレベーターの上部分が見えた。

「急ブレーキ」

滑るのをやめて、一つ一つ丁寧に降りて行く。

「さて。降りたはいいけど此処からどうするか・・・」

とりあえずライナは付近を懐中電灯で照らす。すると・・・箱型のでかいものが置いてある。

「なんだこ・・・・・れ・・・・・・」

言ってる途中でこれが何か分かり、顔が引き攣った。

（クロノ。聞こえるかい？）

（おおっ！ライナ！どうしたんだ？）

（悪いニュースがある）

（・・・・どうした？）

（エレベーターの上の部分に、このホテルを吹っ飛ばせる程の、デカイ爆弾がある）

（なんだと！！）

（時限式で、盗聴器とかは仕掛けて無い。爆発まで後・・・三十分を切っている）

（どうにかならないか！？）

（おいおい。僕に爆弾の解体をしろって言うの？今の状況で）

（すまない・・・。そしてこちらにも悪いニュースがある）

（何？）

（フェイトが撃たれて、なのはは気絶している）

（・・・・わかった。爆弾は一度置いておき、今は人質の救助を最優先にする）

（わかった。こちらも人を退避させておく。・・・・・・ライナ）

（ん？）

（・・・・・死ぬなよ）

（・・・・・ただで死ぬ気は無いさ）

そして通信を切るライナ。

「せめて人質を救うまでは・・・・・・」

そして、エレベーターの中に入るための扉を開けてエレベーターに入る。

「慎重にいこう」

そしてエレベーターのドアを開ける。

「ん？エレベーターが開いたぞ」

「見てくるか」

二人の黒ずくめの男がこちらにやってくる。

「なんだ。誰も乗って無いじゃないか」

「見張りに戻るか」

そしてエレベーターに背を向けた瞬間、ライナは飛び出してその二人を手刀で気絶させる。

ちゃんと監視カメラを気にして。

「装備を借りるよ」

一人の身包みをはいで、エレベーターに犯人を閉じ込めておく。そして扉を閉める。

「受付は・・・あっちかな」

ライナは奴らの仲間に成りすまして、受付の方まで向かう。

「くそっ！あかねーぞ！どうなってんだ！？」

「爆弾でふっ飛ばさない限り無理っしょ」

「ここを爆破するとシャッターもぶっ壊れちまうよ。これ、外からは硬いけど中からは脆いんだ」

金庫室の前に数人の犯人達が集まっていた。どうやら扉を開けたいらしい。

（どうやら受付の人数は三人。残りは上だろう）

「あの。スイマセン」

「ああん？何かようか？」

「見張りの最中に、置物と置物の間に、隠してたであろう鍵が見つかったので」

「おおっ！でかした！！これで金庫室が開く！」

「おう。これであの設計図と”アスタール”は俺等のものだ」

そして電子キーにパスワードを入れると、ガシャンと金庫室の扉が開く。

「おおっ！これでねん――――――――――ガッ！」

「何――――――――――グッ！！」

「お前――――――――――ガッ！！」

感激している犯人達にライナは、銃のグリップのところで殴り気絶させる。

「これで一応ここは制圧かな。デバイスを取りに行かないと」

そしてライナは金庫室の中に入って行く。

「どれだろう・・・あ、これだ」

そして僕のデバイスを入れた箱が見つかったので、鍵を使って空ける。

「久しぶり」

『あれ？なんですその奇天烈な格好。コスプレショーでもしましたか？』

「ああ・・・。今はルクスの突っ込みも懐かしく感じる」

『主。どうかしたのか』

「緊急事態だ。レイジングハートとバルディッシュもつれてく」

『・・・・・例の組織が？』

「多分無関係だけど、フェイトさんとなのはさんが危険なんだ」

『マスターに何が！？』

一緒に入っているバルディッシュが騒ぐ。

「撃たれたらしい。下手すると死んでしまう。あとここにはドデカイ爆弾が仕掛けられてる」

『本当ですか！？』

「でなきゃ、マスターキーを使ってここまで来ない」

「ほう。マスターキーを持っているのか」

『「！？」』

突然声がした。ライナが声のした方を向くと、怪しい仮面を被った人物が居た。

手にはデバイスらしき剣を持っている。

「アンタは誰だ・・・・」

「私は私だ。それよりもマスターキーを渡して貰えないだろうか」

「何に使う気だ」

「”アスタール”が欲しいのでね」

「・・・・渡せない。そしてチェックメイト掛けてるつもりだろうが・・・そうじゃないよ」

すでに僕は指をデバイスに付けている。いつでもセットアップできる。

「ふっ・・・仕方ない。今回は諦めるか」

そしてその人物は転移魔法を展開した。

「お、おい！貴方は誰なんだ！？」

「いずれは君の敵になる味方さ。ああそれと、監視カメラは何とかしておいたから行くといいよ」

そしてその人物は転移して消えた。

「・・・・・どうなってるんだろう」

『それどころではないのでは？』

「そうだった・・・・行こう！」

そしてライナはパーティ会場まで駆け出した。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X

「了解」

そしてオートパイロットのヘリは、ホテルのヘリポートまで飛んで行く。

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・・無事でいてや・・・・・」

はやては祈るようにヘリを見送る。

「主はやて。そろそろ私達も避難を」

「いやや。最後までこの行く末を見守る」

「・・・・でしたら私も残りましょう」

そしてシグナムもヘリを見守る。

（無事で居てくれ・・・・二人とも・・・・・）

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「ハアハア・・・くうっ・・・・ハアハア・・・・」

パーティ会場では、数十人の犯人達が警戒しながら人質を囲んでいる。

なのははまだ気を失っている。フェイトはゴルグの隣で必死に血が流れて行くのを抑えている。

しかし気休め程度にしかならず、すでに血の水溜りが出来始めている。

隣のなのはの純白のドレスは、フェイトの血で染まっていた。

「ヘリが来やしたぜ」

「そうか。では上に上るとしよう」

ゴルグは立ち上がりバッグを置いて何かのスイッチを入れた。

「これで全て解決だな」

しかし突如、警備室から入る連絡がゴルグを動揺させる。

『ゴルグさん！大変です！』

「どうした？」

『何者かが猛スピードで、兵士達をなぎ倒してそちらに向ってます！』

「なんだと！？」

そして驚くと同時にパーティ会場の扉がぶち抜かれた。

「さあて、この借りはきっちり返させてもらうよ」

「・・・ラ・・・・・・・・・イ・・・・・ナ・・・・・・・・・？」

フェイトは霞んでいる視界でも見えた。

そこには背中に十字架を背負い、両腰に銃を携え、銀の髪に真紅の目をした青年が立っていた。

目的不明の敵と正体不明の味方（後書き）

誤字脱字、感想があったら下さい。

一応解決・・・・（前書き）

今回はずっと三人称です。

一応解決・・・・

「誰だきさまは！！」

「誰でもいい。それより人質を解放してくれ」

ゴルグは怒鳴って侵入者を問いただす。しかし侵入者は答える気は無い。

「お前はそれ以上入るなよ。でなきゃ人質はどうなっても知らないからな」

ジャキっとなのはに銃を向けるゴルグ。

「諦めて。人質を殺したって、あんたらはどうせ捕まるか死ぬだけだ。だったら罪は軽い方がいいよ」

「・・・・だったらどうする？一を捨てて九を助けるか？」

そしてここにいるゴルグの仲間も銃を向ける。

「・・・・僕を殺しても変わらない。君らは捕まるだけだ」

「じゃあ・・・・・試してみるかな！！」

そして犯人達は一斉にマシンガンを乱射した。

ドドドドドッ！！

ライナは避けようとはせずただ受けた。
砂煙が上がり、ライナの姿は見えないが・・・・。
「これで生きてるわけねぇ・・・・」
ゴルグは安心しきっていた。それが致命的なミスとも知らず。
「グハァ！！」
「ゴホッ！！」
そんな声を出して犯人一味全員倒れる。
「だれもあれが僕とは言って無いし」
そしてライナはゴルグの背後に立っていた。
「なっ――――――――――――グッ！！」
そしてゴルグの首に手刀で気絶させる。
「幻覚だったのでしたとさ。チャンチャン♪」
そして犯人達が全員制圧されたパーティ会場。人質の人達はボケーッとしていた。
（クロノ。人質は無事・・・救出成功）

（おおっ！やってくれたか！！）

（急いで人質と犯人達を外に出す。準備しといてくれ）

（わかった！）

そしてライナは通信を切る。

「皆さん！もう大丈夫です！慌てずにホテルを出てください」

その言葉に、一拍置きパーティ会場が歓喜で包まれた。

「落ち着いてホテルから出てください！外には局員が居ますから！」

そして人質の皆さんは会場から出て行く。警備室にいた他の犯人達も一緒に運んで貰った。

「フェイトさん！大丈夫ですか！？」

ライナは倒れているフェイトに駆け寄る。

「・・・ラ・・イ・・ナ・・・・・・・・・やって・・・・・・・・・く・・・れた・・・・んだ・・・・・・」

「喋っちゃダメです！」

『マスター！』

バルディッシュが叫ぶ。僕はフェイトさんに渡す。

「バル・・・・・・ディッ・・・シュ・・・・・・ゴ・・・・・メン・・・ね・・・・」

『マスター！！』

傷口を塞いでも、フェイトさんの心拍数はどんどん下がって行く。

（人は約三十％の血液がなくなると死んでしまう。フェイトさんは十五％は血を流している。
でも輸血できる血なんて・・・！）

ライナは悩む。そんな事しているとある考えに思いたった。

「そうだ・・・。確か僕とフェイトさんは同じ血液型のはず・・・」

『ちょっと待ってください！自分の血を輸血する気ですか！？』

「それしかない」

『十五％も無くなっては主の命に危険性が・・・！！』

「こうしないとフェイトさんは救えないんだ！！」

そしてライナは自分の唇を噛んで血を出す。

「・・・・・・・最初に謝って置きます。スイマセン」

そしてライナはフェイトとキスをした。

フェイトはこんな状態でも手足をピンッと伸ばして驚いている。もし動けたならライナを殴り倒しているだろう。

しかしこれ以外に、フェイトに血を分ける方法が無かったのも事実。

ここには注射器も輸血パックも無いのだから。

コクッ・・・コクッ・・・っとライナの血をフェイトが飲む。

それをしばらく続けて、ライナはフェイトから離れた。

「えっと・・・他意はありませんから・・・・・・」

顔を真っ赤にしても説得力は無い。

「・・・・ん？・・・・・ライナ・・・・・・君？」

どうやら気絶していたなのはが起きたらしい。

「なのはさん・・・フェイトさんをよろしくお願いします」

「え!?あ、うん。わかった。ってフェイトちゃん大丈夫!?顔真っ赤だよ!?」

「・・・気・・・にし・・・ない・・・・・で・・・・」

何とかフェイトは言葉を紡ぐ。少しは楽になったらしい。

「それでは、レイジングハートです」

「ありがとう。レイジングハート、セットアップ」

そしてなのはの姿はバリアジャケット姿になる。

「それじゃあ私はフェイトちゃんを運ぶね」

そう言うが・・・・。

「あれ?身体に力が・・・・入らない・・・・?」

なのはは座ったまま、動けないで居た。

「軽い脳震盪ですね・・・・・それじゃあ僕が抱えるんで、捕まってください」

背中の剣と槍を消してなのは抱える。格好はなのはが、後ろから抱きしめている感じ。

「え／／／／／!?」

「首をちゃんと持ってください。それじゃあフェイトさんも」

そしてフェイトはお姫様抱っこで抱える。

「／／／／／！？」

うまく喋れ無いが、羞恥心は起動しているらしい。

「飛び降りますよ！！」

そしてライナはシャッターをぶち破り、外へと飛び出した。

「ひゃ～～～～！？」

抱きついたままのなのはは悲鳴を上げる。

「しっかりと捕まってくださいよ！！」

そして地面につく直前で急停止。そのまま着地した。

「なのはちゃ～～ん！！」

「テスタロッサ！！」

二人の名前を呼び、駆け寄って行く人影。

「どうぞ。ハラオウン執務官はまだ危険な状態ですから」

「わかった！」

ライナは二人になのはたちを預けて再びホテルに舞い戻ろうとする。

「皆！！急いでここから避難だ！！」
クロノが走りながら駆け寄ってくる。
しかしライナは首を横に振った。
「僕はいまから爆弾を処理しに行く」
「何を言ってるんだ！！爆発まで後、五分を切っているんだぞ！？」
「大丈夫だって。それじゃあ」
「あっ！おい待て！！」
クロノの静止を聞かずにライナはホテルへと入っていく。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxx

「あそこに纏めておてよかった・・・・」

ライナはパーティ会場においてあった、二つの大きな爆弾を抱えて走っている。

一つはエレベーターにあった爆弾。もう一つはゴルグのバックに入っていた爆弾。

「爆発まで後・・・二分」

ダッシュしながら爆弾のタイマーを見ているライナ。

「こりゃあ・・・階段じゃないほうがいい」

そして窓から飛び降りて、外から上へと上がった。

「後一分!!」

そしてライナはホテルの一番上のヘリポートまでやってきた。

「まだ上だ!」

その更に上空まで飛ぶライナ。そして爆発しても安全な場所まで爆弾を持って行く。

「後は・・・放り投げるだけ！」

そしてライナは爆弾を上に投げる。

しかしその瞬間爆発した。

ドゴォオオオオオオオオンッ！！

夜空とは言いがたい、オレンジ色の閃光を最後に見て、ライナは爆発に巻き込まれた。

一応解決・・・・（後書き）

次でパーティ編は終わりです。

ライナの容姿が変わったことについては後で明らかにします。

誤字脱字、感想があれば下さい。

病院って絶好の昼寝スポットだよね（前書き）

久々の主人公視点です。

病院って絶好の昼寝スポットだよね

僕の目に映るモノは人の骸の山。老若男女と様々。

辺りを覆い尽くす血。見慣れた人の血だ。

直接感じる死。しかし何も思わず、ただ立っている僕。

僕は血のように赤い空と、全てを塗りつぶすような黒い月を仰ぎ・・・・呟く。

「なんだ・・・・・ここは・・・・・・・」

骸の山に立つ僕。他には何もなく、僕だけがこの場所に立っていた。

「・・・・・僕はこれを見たことが・・・・・ある・・・・・？」

見たことは無いはずなのに、何かの記憶とこの景色が重なる。

「なんなんだ・・・・・・」

何処を見渡してもはるか向こうに地平線が見える。

本当に何も無い。

「なにがしたいんだ・・・・！何のためにこんなものを見せる・・・・！」

僕は叫び問う。自身の意味を。見るものを不幸にするこの僕の意味を。

「何のために僕を・・・・！」

それは僕から何もかも奪っていき、長年に渡って縛り付けている。

そして、僕が手に入れて行くのは人々の不幸だけ。

だが僕にはどうすることも出来ない。これからも僕は進むしかない。

「何のために・・・・・何のために僕を！！」

僕が立ち止まることは許されない。

孤独を進み、希望に苦しみ、悲しみに縛られ・・・・それでも生きろと。それが僕の道だと。

欲しく無い力と、欲しかった幸せ。

失った自由と、手に入れた呪い。

守りたかった人と、壊してしまった命。

自らを偽る正義と、己をさらけ出す悪。

「何で・・・何で・・・・・・僕なんだよ・・・・・・・・・」

僕はただ――――――――――。

x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x

x x x x x x x x x x

「・・・・・ん？・・・・・グットモーニング・・・・？」

僕が目覚めたのは何処かの病室。

窓が開いていて風が入ってくる。外から、カーテンを通じて太陽光が入ってくる。

自分の姿を見てみると、腕や足が包帯でぐるぐる巻かれてる。

「ルクス・・・ソル・・・・いる？」

・・・・・・・・・・・・・返事は返ってこない。どうやらいないらしい。

「私はいます」

何処からか返事が聞こえる。ホラー？ってわけ無い。

「ああ。そういえば爆発に巻き込まれたんだっけ」

「ええ。ちなみにマスターは一日寝てました」

「人格って入れたっけ？ベルカ」

「入れてもらいましたが、マスターが起きるまで気を失っていました」

「出てきていいよ？別に」

そして、荷物の間から出てきたのはちっちゃい人物。

真紅の髪に銀の瞳で服はよくわからない、ルクスが決めたから。興味ないからいいけど。

「おはようございます」

「はいはい。おはよう」

そう、想像していた人も居ると思けど、僕が作ったのはユニゾンデバイス。

名前はベルカ。コイツはペンダントになることも出来る。

ホテルでの潜入準備のために作ったもの。

でもホテルの受付のときに間違えて、これも預けてしまったことを少し嘆いたりした。

てなわけで、×××には”融合騎”と入れてください。

「どういう状況なんだろう」

「怪我の具合で言うと両腕を粉砕骨折、右足は火傷と打撲で左足は複雑骨折。まあ早い話、ボロボロですね」

「あ・・・そう。バリアジャケット着てそんなダメージなんだ・・・・」

「とっさに両手足を犠牲にしたから、これで済みましたけど」

「まあ、それは置いておくとして。どう説明しようかな・・・ベルカの事」

「普通に説明すればいいと思いますけど」

「だよね。別にやましいことはして無いし」

それにしても包帯グルグル巻きって・・・初めて体験した。まあ両手足だけだけど。

「昼寝するよ。おやすみ」

「おやすみなさい」

そして僕はまた眠った。やること無いからしょうがない。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・イナ・・・ん・・・・ラ・・・・・イ・・く・・・」

呼ばれてる。誰に？お昼寝させてよ。これが僕の至福の時なんだから。

一応狸寝入りを決め込んでいる僕。

「ダメだよはやてちゃん。おきないよ」

「せっかくお見舞いにきたんやけどね〜〜・・・・・叩けば起きるんちゃう？」

「ダメだよ。怪我人なんだから」

「おい・・・リュートと言ったか？起きてるのは分かってるぞ」

ギクッ。バレた。

「え？起きてるの？」

「ああ。さっきと多少呼吸の動きが違う」

「なら早く起きたほうがええで～～？」

一人は分かるけど、他の二人は分からない。声からして女性だろう。

でも・・・・・どっかで聞いたことがあるような？

「起きないなら・・・・体と首が別れることになるが？」

「怪我人なんですけど・・・・・・」

渋々起き上がった。これでも結構痛いんだよ？ギブスとかで。

「初めましてやな。ウチは八神はやて。よろしくな♪」

「私は剣の騎士シグナム。よろしく頼む」

「自分はライナ・リュート二等空尉です。こんな格好でスイマセン」

包帯グルグル巻きの格好は褒められた格好じゃないから。

「いやいや。なのはちゃんと、フェイトちゃんを助けてくれて・・・・ありがとな」

「私からも礼を言う」

「ありがとね。ライナ君」

美女三人からお礼を言われるって・・・これで嬉しく無い男は、性同一障害か人間じゃない。

「いえ。そんな大した事じゃないですよ。フェイトさんはどうですか？」

「今は隣の病室で寝てるよ。出血が多かったけど大丈夫だって」

「そうですか・・・よかった・・・・」

目の前にいるのに救えないなんてもうゴメンだから・・・・さ。

「そういえば・・・何であの時、ライナ君の髪が銀になったり、瞳が赤くなったの？」

ギクッ。

「えっと・・・それは・・・・・・・・・」

「私ですよ」

「「「！？」」」

病室の机のペンダントから声が発せられる。

「はぁ。ベルカ、ノーマルモード」

その瞬間ペンダントは人型になった。それを見てなのはさんが「あっ！」と声を上げる。

「それってもしかして！」

「そう。僕の作ったユニゾンデバイス。ベルカです」

「ベルカです。よろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀するベルカ。そしてシグナムさんが納得したように声を出した。

「ユニゾンしていたんだな・・・・」

「ええ、そうです」

「ほほ～～。ユニゾンデバイスを持ってたんやな」

「ええ。三日で作りました」

「「「三日！？」」」

なぜか驚くなのはさんたち。そして八神さんが崩れ落ちる。

「・・・・ウチがリインを作るのに・・・・・どれだけ時間を・・・・・」

「ま、まあ・・・・ハハハ・・・」

苦笑い・・・・・。もしここで一人で作ったって言ったら泣いてしまうかも。

「八神さんは、怪我をされているのにありがとうございます」

「え？気付いてたんか？」

「ええ。右足を半歩下げてるでしょう？それは怪我をしている足に負担をかけないためでは？」

「・・・・・こりゃ参った。頭ええな～～ライナ君は」

「それほどでもありませんよ」

「謙遜せんでええよ？」

「事実ですよ。大体の人は余裕で気付けます」

「・・・・それは君の中だけじゃないんかな・・・・？」

「へ？」

「あ、何でもあらへん。それと私ははやてでええよ」

「わかりました、はやてさん」

「そろそろ行くよ。ちゃんと休んでてよね」

「りんご剥いて置いてあるから食べてな～～」

「わかりました。お忙しい中、ありがとうございます」

そしてなのはさんたちは病室を出て行く。

「さて。林檎があるのはいいけど・・・ね・・・」

両腕骨折ね。動かせないよね。食べれないよね。

「では私が食べさせるしかないですね」

「よろしく」

フォークを持って、りんごに刺して運んでくる。

しかし・・・・・・。

「ん～～～！ん～～～！」

ベルカは頑張っていると思うけど・・・どうやら重いらしい。

「・・・・無理しなくていいよ？」

「そんな・・・ハアハア・・・ことは・・・・・ハアハア・・・ありません・・・・」

肩で息してる人の台詞とは思えない。

「ど、どうぞ・・・・・」

何とか僕の方へたどり着くベルカ。

そしてフォークの先端に刺さっているりんごを咀嚼する。

「おいしいよ。ありがとう」

「どう・・・・いたし・・・・まして・・・・・・」

どうやらバテたらしい。フラフラとしている。

「一度寝て体力を回復させて」

「はい・・・・・すいま・・・・・・せん・・・・」

「謝らなくていいよ。おやすみ」

「はい・・・・・・・」

そしてペンダント状態に戻り、机の上で沈黙する。

「っていうか何時の間にか夜だったんだ」

窓の外を見ると、あたりは暗くなっていた。

「誰か電気を消してくれるとありがたいな～～・・・・なんて」

誰もいないから消している人も居ないよね・・・・・。

「何、独り言を言ってるんだ？」

「げっ」

「おい、〝げっ〟ってなんだ、〝げっ〟て」

「言葉」

「そんな事は聞いてない・・・・・・」

来たのはシスコン提督。困るわ～～。テンション下がるわ～～。

「どうだ？調子は」

「いいように見えるなら、今すぐここの医者に見てもらって」

「減らず口だな」

「まあ心置きなく昼寝できるけどね」

「お前の場合治りが早いだろう。大体一週間で完治。明日には歩けるんじゃないか？」

喋りながらクロノは花瓶に持ってきた花を入れる。しかしそれは問題だった。

「ちょっと待てい。何で見舞いの花がユリ！？」

「君にぴったりだろう」

「ユリには、首落ちるって言葉がある花なの！！見舞いの花じゃない！！」

「ああすまん。わざと間違えた」

「ウザイ！！っと、一日寝れば怪我なんて治るものだよ」

「そんな原始的な身体をしてるのはお前だけだ」

「お褒めの言葉として受け取っておくよ。で？見舞いなんかじゃないよね」

「見舞いは見舞いだ。だが一応君の耳に入れておこうと思って」

「へぇ。どんな情報？」

「まずはゴルグ・ダリアリーからだ。彼は”エンブレム”と言う人物に雇われたらしい。偽名だろうがな。そして人員はすべてゴルグ一人で集めたらしい。これが半年前だ」

「結構前からだね。ってよくそんなの分かったね」

「ゴルグ自身が口を割った」

「・・・・・拷問なんかしてないよね？」

「ああ。決してなのはとはやてとシグナムに、フェイトを傷つけられた怒りと、日々のストレスを発散させるために、デバイスの使用許可を出したわけではない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

人はそれを拷問というよ。

「そのあと、僕と部下数名で魔王式の”★Ｏ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＩ★！”なんかしてないしな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

それが拷問じゃないなら何が拷問なんだ。

「それと例の組織の情報はガセらしかった。だがガセ情報の場所と日時で違う事件が起こる。これは偶然だろうか？」

「・・・・エンブレムってヤツが組織のメンバーだと？」

「可能性は高い。おそらく僕らを誘き出して、ホテルで亡き者にしようとしたんだろう」

「と言うことはすでに僕らの事はバレてるってことか・・・・」

「そうだな。それと明日面会の予定が入ってるぞ？」

「誰から？」

「ベリエル・カークスティからだ」

「なるほど。ちょうど僕も会いたいと思ってたんだ」

「そうか。それと君のデバイスは、あの爆発でダメージを受けたか

らデバイスルームで修復してる」

「変な場所いじらないでよ」

「わかっているさ」

そしてクロノは病室を出る。そして僕は一言。

「明かり消しとけよ・・・・・・・・・・」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxx

次の日。僕の右足の打撲と両腕は治っていた。つまり歩けるようになった。

イエイ！・・・・・・まあ杖を突きながらだけど。

そして僕は今、面会者が来るのを待っている。

すると・・・・・。

コンコン。

「どうぞ」

「失礼するよ」

「「「失礼します」」」

僕が返事をすると、ベリエルさんと、ランドさんに、エルさん。

それと・・・・誰？

「ライナさんは大丈夫なんですか！？」

エルさんが僕の傍に駆け寄る。

「大丈夫。右足と腕は治ったから歩けるよ。左足ももうじき完治するらしい」

「そうですか！？よかった～～・・・・・」

「こらエル。すいませんライナさん」

「いえいえ。構いません。それで・・・そちらの方は・・・？」

青髪の人で歳は三十代だと思う。凄いイケメン。

「ああ、紹介が遅れました。私はエルの父でアイン・カークスティです」

「自分はライナ・リュート二等空尉です。このような格好でスイマセン」

「いえ！貴方には父と妻と娘をを救って頂きました。感謝しても仕切れないほどに」

「そう言っていただけるのは嬉しいです。それとベリエルさん」

「なんじゃ？」

僕は病室の机から鍵と懐中電灯を取り出す。

「貴方のおかげで助かりました。これはお返しします」

「おおっ！これは君の手に渡っていたのか！いや、よかったよかった！」

そしてベリエルさんはそれを受け取る。

「これをもっていると言うことは、君は通気口を巡ったということか？」

「ええ。それしか道がなかったですから」

「何と・・・！そこまでやってくれたとは・・・！ワシは感服したよ」

「当然の行動ですよ。褒められたことではありません」

「いやいや。謙遜しなくてもいい。私は君への恩は一生忘れないだろう。こちらとしても何か御礼をしたい」

「いえ！そのようなことは！」

「いや、させてくれ。そうでなければワシの気がすまん」

「それでは・・・その一つあるんですが・・・」

「遠慮なく言ってくれ」

「犯人達の一味が言っていたんです。『あの設計図』って心当たりありますよね？」

「「！！っ」」

アインさんとベリエルさんの顔が驚きの顔になる。

「ランド・・・・」

「わかりました。エル？少し席を外すわよ」

「わかりました。ライナさんお大事に」

「はい。ありがとうございます」

そしてランドさんとエルさんが病室を出る。

「娘達には聞かれるわけにはいかないのでな」

「・・・・・・何をしているんですか？貴方達は」

僕の表情は厳しいものになっていただろう。

二人は病室のイスに座った。そしてアインさんが口を開く。

「・・・・・これから話すことは他言無用でお願いします」

「・・・・・・内容によりますよ」

僕は一応釘を刺しておく。

「・・・わかった。君だから話そう。私達は建築設計の能力はご存知の通りだと思う。そして私達はある日、管理局からある設計の依頼を受けた」

「・・・・・・・・・・・・」

「巨大次元航空艦の設計だ」

「え？」

「そして私達は最初は、観光用なのかと思いそれを引き受けた。だが引き受けた瞬間彼らはある言葉を口にする」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「『これは殲滅用次元航空要塞。いわば兵器だ。丈夫な造りにしてくれよ』と」

「！？」

「私達も耳を疑ったが、契約はしてしまったから断れなかった。そして私達はやむなく設計に取り掛かった。その道のプロも管理局から派遣されてね。そして半年ほど前にそれが完成したんだ」

「半年前！？」

タイミングが良すぎる。やっぱエンブレムって人物は例の組織の一味の可能性が大きい。

「そして私達はサープラットホテルの金庫室にしまっておいた。そこを狙われたらしい」

「・・・・情報が外部に漏れたということですか」

「おそらくは」

「・・・・・・・・・一応黙っておきますが、いざって時は覚悟しておいて下さい」

「わかりました」

「それではそろそろ失礼するかの」

二人は立ち上がり病室のドアを開ける。

「おお、そうじゃった。君がもし婚約者に困っておったらエルを紹介しよう」

「それはいい。私もそれには賛成ですね」

「え!?」

そして二人は病室から出て行く。

「・・・・なんて台詞・・・・」

一度息を吐き、窓の外を見る。そこにはボールで遊んでいる子供達が見える。微笑ましい光景だ。

「アスタールの事は・・・・気にしなくていいか。アレはいろんな場所に行ってしまうし」

設計図の事とアスタールの事をクロノに話さなくて正解だった。

「・・・・・ちょっと部屋を出ようかな」

僕はペンダント状態のベルカを持って部屋を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「隣だったよね」

僕は松葉杖をつきながら、隣の病室の前に来ている。フェイトさんの病室だ。

「取り合えずノック」

コンコンッ。

「はい。どうぞ」

「失礼します」

バシュって音を出して扉が開く。自動ドア最高！

「どうもフェイトさん。お体は大丈夫ですか？」

「あ、ライナ。おかげさまでね。ってそれを言うならライナも」

フェイトさんは個室で上半身を起こしながら迎えてくれた。

雑誌を読んでいたらしい。そばにファッション誌らしきものがある。

「左足複雑骨折と、両腕が少し痛むぐらいですよ。今日はお見舞いに」

「入院中の人にお見舞いされるって変な気分だよ」

「安心してください。僕もです」

僕は、フェイトさんのベットの近くにおいてあるイスに腰を掛けた。

「フェイトさんはいつ退院ですか？」

「二日ぐらいでかな。別に大怪我をしたわけじゃないしね」

「銃で足を撃たれるのは大怪我ですよ。血もたくさん流してましたし」

「まあ・・・あの時ライナが助けてくれなきゃ、死んじゃってたからね」

「本当に焦りましたよ。応急処置したからいいものを・・・・・」

「そ、そうだね／／／／／」

顔を赤くするフェイトさん。なぜ？何で顔を赤く・・・・・・あ。

「・・・・えっと、フェイトさん？」

「え！？な、なにかな！？」

「その・・・・・気にしてます？・・・・・応急処置の方法」

「え！？そ、そそ、そんな事にゃいよ！？」

・・・・・絶対気にしてる。いやまあ気にするなって方が無理かな。

「あ、あれは！その・・・人命救助で！仕方なかったで！ノーカンでお願いします！」

「・・・・人のファースト奪っておいて・・・・・」

「うっ！・・・えっとライフセイバーの方も、人工呼吸はノーカンしているって聞きますし！それと同じですって！！」

「そうなの？」

「いや知りませんけど・・・多分そうです！！フェイトさんもそのほうがいいでしょう！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

何故そこで黙るのでしょうかねぇ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

変な感じに会話が途切れて、お互いに顔を赤くして無言。いたたまれない空気だ。

しかし自分の中でこの状況の脱出方法が見つからない。

だれか！！マニュアルをくれ！！この状況を脱出できるマニュアルを！！

《なに幸福な状況でわめいてんだよ！！ｂｙ天の声！》

ヤバッ！天からお叱りを食らった！どうする僕！？って別にｂｙって言わなくてもいいよ！

「フェイトさん！！大丈夫ですか！？」

「こらバカスバル！ちゃんとノックしなさい！！」

「お見舞いに来ました。フェイトさん」

「私もです」

急に扉が開くと思ったら、青髪の少女がいきなり入ってきた。それをオレンジ髪の少女が止める。

その後から赤い髪の少年と、ピンク髪の少女が何かを手に持ちながら入ってくる。

「スバルにティアナとエリオにキャロも・・・みんなありがとう」

どうやら元機動六課のフォワードメンバーらしい。

そしてエリオって子とキャロって子が、小包をフェイトさんに渡す。

中に入っていたのはフルーツ盛り合わせ。定番だね。

「ありがとう二人とも」

そしてフェイトさんは頭を撫でる。お～二人とも幸福そうな顔してます。

「えっと・・・フェイトさん。こちらの方は？」

ハイ来ましたよ。僕の事。

「彼はライナ・リュート君。私の補佐をやってくれてるよ」

「ライナ・リュートです。よろしくおねがいします」

「スバル・ナカジマです！よろしくお願いします！」

手を差し出されるが僕は首を横に振った。

「スイマセン。今僕は腕を怪我してるので・・・握手はちょっと」

「あ、そうなんですか」

「他の皆さんもよろしくお願いします」

そして残りの三人にお辞儀する。

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

「エリオ・モンティアルです。よろしくお願いします」

「キャロ・ル・ルシエです。よろしくお願いします」

他の三人もお辞儀で返す。

「じゃあ僕は一回部屋の戻るので」

「うん。助けてくれてありがとね」

「当然のことをしたまでです。それじゃあお大事に」

「うん」

松葉杖をつきながら僕は自分の個室に戻った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「昼寝できない・・・・・暇・・・・・」

ダラーンとベットで垂れながら寝てる僕。

「ルクスがいればな〜〜・・・・ベルカはおきないし・・・・」

今日は呼んでもうんともすんとも言わない。作って一週間も経ってないのに反抗期？

「シスコン提督、略してシス提め・・・ユリの花を置いていきやがって・・・・・」

僕の隣には白いユリがちょっと多目においてある。

「ヒドイな〜〜・・・・はぁ・・・暇だ・・・・」

暇な。英語で言うとｆｒｅｅ。主に寝てるだけの僕の状態を言う。

「ご飯まだかな・・・・暇×五十・・・・」

昼寝の権化たる僕が、昼寝できないとはヤバイ。世界が終わる。

「あと二つの・・・デバイスはどうしよう・・・・」

長剣、槍、ガンソード、融合騎と来たら・・・・なにかな?

知り合いのデバイスでもパクっちゃおうかな。大体の武器なら使えるし。

じゃあ好奇心でハンマーでも作ろうかな?杖とかでもいいし。

「イマイチ欲しいのがな～～・・・・・・」

アイディアが浮かばない。これはしばらく保留にしとこう。

「寝よう。暇だし」

そして僕は眠った。一日何回寝てるんだろう僕。気にして無いけどね。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「失敗か」
「役に立たないよね。あの男」
「仕方ないさ。彼がいたのだから」
「久しぶりに会ってどうだった？」
「別になんとも」
「ツンツンしちゃって～～～！！」
「・・・・・はぁ。それより設計図を取れなかったらしいな」
「まあ、あれがあるから別にいいだろうけどね」
「アスタールは？」
「どっか行っちゃったよ」

「そうか。設計図は次の機会としておこう」

「次はどうするの？」

「奴らと彼らをぶつけてみようと思う」

「へぇ～～～。ガンバ！」

「お前もやるんだぞ？」

「えぇ～～～！？やだよ～～～～！！」

「まあそう言うな。いいことがあるかも知れないぞ？」

「そうかな？じゃあやってみようかな」

「その意気だ」

この会話は今後、大きな意味になる・・・・・・・・・・・か？

病院って絶好の昼寝スポットだよね（後書き）

デバイスでいい案のある人はください。

誤字脱字、感想待ってます。

再会と新たな事件（前書き）

しばらくはこっちの小説に力を入れたいと思います。

それと今回のギャグは少なめです。

再会と新たな事件

「ルクス～～。僕が死んだら骨はちゃんとした場所に保存して貰って～～」

『寝言は寝て・・・いえ、寝たらダメなので、寝ない程度に寝てから言ってください』

「日本語が成り立ってないぞ」

どうもどうも。ライナ・リュートです～～。

今、僕は休んで溜まりに溜まった仕事をやってます。

死んでしまう・・・・・。仕事溜まりすぎだ～～！！

僕が退院してから三日。

退院してからすぐに溜まった仕事をやらされてるのだよ。

ああそれと、すこし報告しておきたいこともあるので報告。

まずはと、ティアナ・ランスター執務官とはよく話す様になった。

階級は下なので敬語。しかし色々と話したりする。主に仕事の話。

意外と有意義な話してるよ。真面目な話。

でもボケは突っ込んでくれる。ルクスが二人いるみたい。

スバル・ナカジマ一等陸士とは友達かな？

明るい感じで、僕とちょっと似てる所があるからすぐに気が合った。

格闘術も教えてる・・・って彼女と僕のは違うから、ちょっとした模擬戦だけど。

そういえばスバルが、よくお姉さんの自慢をしているので会えたらなぁと思う。

エリオ・モンティアル保護隊員とは師弟関係？っぽい。

真面目な子だけど、数少ない男友達なので気が合う。

彼と話している時に僕が槍を使うといったら、”是非教えてください！”って言われたので少し稽古してあげた。

でも、僕なんかすぐに追い抜かれてしまいそうで・・・・・ショック・・・・。

キャロ・ル・ルシエ保護隊員とは兄と妹って感じ？かな。

最近、色々と暇つぶしの話をしていたら、何時の間にか”兄さん”って呼ばれるようになった。

それを聞いたフェイトさんは、少し複雑そうな顔をしていた。

そりゃ僕が兄って納得がいかないだろうけどさ・・・あそこまでの顔をされると悲しい。

あ、何か最終話っぽいなコレ。エピローグってこんな感じでいいかな？

「出かけていいかな・・・終わったし」

『特に言われてませんし、別にいいのでは？』

「だよね。久々に悪友にでも会いに行きますか」

『あの方々ですか？』

「そう。あの痛い”自称最強野郎（笑）”」

『自称最強野郎？そんな事言ってたんですか？』

「違うぞ？ルクス。その後に（笑）をつけないと」

『あ・・・・そうですか』

「それじゃあ出かけましょう！」

そして僕は街へと繰り出した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「いつ来ても変わらないのかな？ここは」

『そうですね』

僕らが来たのは、局から歩いて五分、そこの駅に乗ってさらに１５分で、さらにそこから歩いて１０分でつく田舎町。

町並みも家も、地球で言う昭和の感じの建物ばっかり。擬似的にタイムスリップしたみたいな感覚になる。

「元気にしてるかな・・・・みんな」

『大丈夫だと思いますよ？あの方々は』

「そうだね・・・・・」

そして僕は街を歩いて行く。

この通りは店などもいっぱいあるのだが、人は殆どいない。

「田舎町の・・・宿命かな」

『駅は近いのですが、近いが故に、ここの若者は駅でミッドまで行ってしまうんでしょう』

「逆効果・・・・・ってわけね」

田舎の悲しい現実を目にしながらも、僕はさらに歩いて行く。

「あ、駄菓子屋だ。懐かしい」

『そうですね。昔はよく来ましたからね』

「何か買っていこうかな」

僕は駄菓子屋に入っていこうとする。すると・・・・。

「うわぁぁぁぁ!!」

「逃げろぉ～～～!!」

「こら～～!!待ちなさ～～～い!!」

二人の小学生と、駄菓子屋の店の方が騒いでいる。

どうやら小学生が何かを盗んだらしい。それを店の人が追いかけてる。

マジで昭和っぽい。

「あ～～あ～～・・・・・」

『どうします?』

「一応・・・・・管理局員だからさ」

『一応・・・・ですか?』

「そう、一応」

僕は小学生達の前に立ち、腕を握って持ち上げる。意外と軽い。

「「うわっ！」」

「君達。物は盗んじゃダメだよ？」

「「・・・はい・・・・」」

「素直で宜しい。じゃあ謝ろう」

そして小学生の二人は、走ってきた店の人に向き合って、

「「ご、ごめんなさい・・・」」

と謝った。そして彼らが盗んだであろう・・・バッチ？を渡そうとする。

「すいません。それこれで足りますか？」

僕はテキトーに札を出して尋ねる。

「え、ええ・・・多すぎです」

「僕が買いますよ。少年たち？今回は奢るけど、これに懲りたらもうやっちゃだめだよ？」

「「は、はい！ありがとうございます！」」

そして一礼した後、小学生達は住宅街のほうへダッシュする。

「えっと・・・お釣りは・・・」

「ああ。いりませんよ。次からは気をつけてくださいね」

「はい・・・ありがとうございます」

店の方も戻って行く。

『似合いませんね。主が真面目な行動をすると』

「いつも僕は真面目に昼寝してるよ？」

『それを世間一般では不真面目といいます』

「はいはい・・・急ごうかな」

僕はすこし歩くスピードを早くして目的地に向う。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「変わってないね・・・・・・なにもかも」

『いいことかもしれませんけどね』

僕の着いた場所は、木造のでっかい屋敷の前。

立派な門が付いていて”陣野剣道場”という看板がある。

「でもインターフォンはつけたんだね」

『さすがに・・・・ですね』

ピンポーンとインターフォンを押す・・・・・前に。

「もう!!いい加減にして!!」

「まてって!!話を聞けって!!」

木刀を片手に走ってる女性と、それを追いかけている青年がいる。

「話すことなんてない！」

「こっちにはある！！」

「知らない！」

「聞いてくれたっていいじゃないか！！」

「ヤダ！」

・・・・・どうやら口論をしているらしい。

「待てよ理利（りり）！」

「しつこいって紅（こう）！！」

・・・・・・・・・え・・・・・・・？

「あっ！理利！」

「うるさい！！話なんて聞かない！」

「違う！！前前！」

「え？あああああっ！どいてどいて～～！」

「え？」

ドガッ！！ピュー～～ドシャ～～！！

擬音を訳すると、少女が動きの止まっていた僕に突っ込んで、僕は吹っ飛び、地面に転がりながら落ちるって感じ。

すげー痛いです。転がったよ?ギャグマンガ並みに。

「あああっ!だ、大丈夫ですか!?」

そして僕の方へと駆け寄る女性。

「あ、だ、大丈夫大丈夫・・・・」

「そうですか・・・・よかった~・・・」

ホッと胸を撫で下ろす女性・・・・・ってか・・・・・・。

「理利!大丈夫か!?」

もう一人の青年も来る。ってかどう見ても僕の方が大丈夫じゃないでしょうに・・・。

「・・・・アレ?・・・えっと・・・どこかで会った事・・・ありません?」

おっ。女性がそんな事を聞いてきた。覚えててくれたんだ。

「ありますよ。・・・・大きくなったね、リーちゃんにコーちゃん」

「リーちゃんって・・・・・まさか!?」

「その呼び方って・・・もしかして!?」

「久しぶり。二人とも」

「「兄さんなんですか！？」」

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「いや～覚えててくれてたんだね」

「そりゃもう。よく遊んでくれましたし」

「そうそう！」

僕は今、話しながら二人の案内で屋敷の中を歩いている。

「こっちは大きくなってて分からなかったよ」

「十年ぶりですし」

「育ち盛りだしね」

「まったくだ」

そしてさらに足を進める僕ら。

そのときに紅が真剣な顔で口を開く。

「・・・・・・・・兄さんは・・・・この十年何していたんです？」

「・・・・・・・特に」

コレホント。監獄で寝たりしてただけだし。

「じゃあ！何で一回も連絡くれなかったの！？」

理利も聞いてくる。心配掛けちゃったな・・・でも監獄からじゃあ連絡なんて出来ないし。

「今は話せない。これでも苦労してるからね、僕は」

「・・・いつか話してくれますか？」

「いつか・・・・・・ね」

そして会話が途切れる。二人とも再会のテンションはなくなってしまった。

変な空気なので、話題を逸らす。

「師範は元気？」

「えっ？あ、うん。今もこの道場で剣を教えてるよ」

「俺たちも、ですけど」

「立派になったね」

「けど・・・その・・・・」

言いにくそうに理利が顔を伏せる。それを見かねたらしく紅が話す。

「・・・・・葵(あおい)さんが・・・去年亡くなりました」

「・・・・・・そっか・・・・・・葵さんが・・・・・・」

そして何時の間にか障子の前についていた

「着きました。師範の部屋です。師範?失礼します」

ピシーッと障子がスライドされる。中にはラフな格好をした三十代ぐらいの男性がいる。

「どうかしたか・・・・・どちらさんだ?」

「兄さんです」

ピシッ。

あ、師範が固まった。まあジッとしてれば溶けるだろう。

「マジでか・・・・・・?」

「ええ。お久しぶりです」

「てめぇ・・・・・十年間どこで何してた!?」

殺気を出しながら僕を睨む師範。

「まあそれは言えませんが・・・今は管理局員をやってますね」

「・・・・・戻ったのか？」

「ええ。今は二等空尉ですけどね」

「そうか・・・・クロノ坊はどうしてる？」

「昇進コースを爆走してますね。もう提督ですよ」

「そうか・・・。まあ無事って判ればそれでいい」

「そうですか・・・それで・・・アイツはどこに？」

「アイツなら”特訓だ～～！！”とか言って山に篭ってるさ」

「あ、そうですか。じゃあ僕が来たことでも伝えてください」

「会わないのか？」

「一番挨拶したかった人達に挨拶できましたし。こちらも中々忙しくて」

「ハハハッ！お前が忙しいというか！人は変わるもんだな！」

「面倒くさいですけどね」

「そうか。帰るならこれを持ってけ」

そして僕は師範から何かの地図を渡される。

「これは？」

「・・・・・・葵の墓がある場所だ」

「・・・・・・・・わかりました。貰っていきます」

そして僕は部屋を出ようとする。

「兄さん。また稽古してくださいよ」

「約束だからね！」

「分かってるさ、紅、理利。じゃあまたくるよ」

そして僕は部屋を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ルクス。ここかい？」

『間違いないかと』

地図を頼りに僕は歩いて近くの墓地まで来ていた。

「一応花は買ったけどね・・・・」

『私の事は言わなくて良かったんですか？』

「いいさ。あの感じだともう忘れてるし」

『はあ・・・まあ直接の面識もありませんし、仕方ないですね』

「そういうこと」

僕は入り組んでいる墓地を進んで、一つの墓の前まで来る。

「・・・・・・葵さん・・・・・久しぶりです」

僕は花を墓に置き、線香をあげ合掌する。

「遅くなってスイマセン。十年ぶりですね。僕は管理局員に戻っています。
この十年は・・・暗い部屋での一人暮らしでしたね。
理利と紅が大きくなっていたことに驚きました。しばらく見ないうちに大きくなっていましたね。
陣野さんは・・・お変わりなかったですね・・・・・。
・・・・葵さん。僕は元気ですから安心してください。葬式に顔も見せないバカな男ですがね・・・・」

『主・・・・・・泣いてますよ』

「え!?」

僕は目に手を当てる。何時の間にか泣いていたらしい。

「あれ・・・・?決めてたんですけど・・・もう人が死んでも泣かないって・・・・でも・・・・止まらない・・・・」

『主・・・・・・』

僕は何とか涙を止める。そして報告を続行する。

「・・・葵さん。今僕はある方と一緒に仕事しています。スゴイ美人で強い方と。
僕は何とか足を引っ張らないように頑張っていますが、これがまた難しくてですね。
小学生までの知識では限界があるみたいでして・・・ね。

執務官って知ってます?僕はその候補官で、そのある方は執務官なんです。
僕は今のところ、執務官を目指して頑張ってるところです」

僕は一度言葉を区切り、深く息を吸う。

「名前は・・・・・フェイト・T・ハラオウン・・・なんですよね。何の偶然か金髪美人でしてね。
彼女を思い出します。しかし・・・僕は彼女に・・・・・いや彼女達に恨まれるでしょう」

『そんなことは!』

「いいんだルクス。僕はこういうことになるって分かっていたんだから」

『主・・・』

「葵さん。もうすぐそっちに行くかもしれないですから、気長に待っててください。では」

僕は立ち上がり、墓地を出てそのまま駅に向う。

その間、僕らは一言も喋りはしなかった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「眠いな～。昼寝しておこう」

『今、夕方ですけど』

「夕寝とはいわないでしょ」

『寝るのは構いませんが・・・・夕食は？』

「夜食にすればいいさ」

僕らは今、局に帰ってきたところ。駅が混んでいてスゴイ時間がかかった。

局に入ると、ガヤガヤといろんな人が走り回っている。

「なんか騒がしいね」

『何かあったんでしょうか？』

「ま、いいや。さっさと部屋に戻ろう」

僕は気にも留めずに部屋へと戻ろうとする。

『いや主・・・それはさすがに』

「昼寝のほうが大事」

『・・・何言っても無駄そうですね』

「正解」

僕は慌ただしい空気もスルーして部屋へと戻る・・・・・が。

「ライナ！？どこ行ってたの！？」

フェイトさんがこっちに猛スピードで走ってくる。

「どこって・・・仕事もなかったので私用で」

「あ、そうなんだ・・・じゃなくて！！ライナ、今すぐ準備して！！」

「・・・・・・Ｗｈｙ？」

「大量のガジェットが街で暴れてるの！！」

「ええ～～・・・・・・」

せっかく昼寝しようと思ったのに・・・・・・。いや、理由つけて断ろう。

「え～僕は今、色々と疲れ「行くよ！！」え！？ちょ、ちょっ！！首掴まないで！！」

僕は首をつかまれたまま、空へと連れて行かれた。

あれ？前にもなかったけ？こんなこと。

再会と新たな事件（後書き）

ライナと今回の新キャラたちの関係はまだ謎ってことで。

主人公設定はもう少し待ってください。

誤字脱字、感想ください。

困りますよ～～（前書き）

バトル要素はあまり入ってこないです。

あと、デバイスで喋るのは大体ルクスです。

困りますよ～～

みなさんこんにちは。初めての方は初めまして。

ライナ・リュートです。

僕は今、他の局員と臨時で作ってある作戦本部の部屋の中で、クロノから説明を受けている。

「皆も知っていると思うが、今ミッドの南西部で大量のガジェットが破壊活動を行っている。そして南西部の防衛機能はもはや機能していない。

住民の多くは前もって避難できたので重傷者等はいないが、局員の中には重傷者が多数いるらしい。

僕らはこれより南西部の局員と協力し、ガジェットの排除と逃げ遅れた住民、および局員の救助に向う」

「質問いいですか？」

僕は一応挙手して尋ねる。

「構わない」

「では。ガジェット達の詳しい情報が欲しいのですが」

「主は？型だが、？型や？型も目撃されている」

「ガジェットたちの目的は？」

「今のところは不明。ただ街を破壊しているだけだ」

「他の増援は？」

「敵の場合はどんどん増えている。こちらの増援は時間がかかるらしい。僕らだけで対処するしかない」

「わかりました」

僕は一応の事は聞けたので座った。

「他に質問は無いか？」

シーーーーン・・・・・。

「・・・・では各員準備をしてくれ。１９：００に出撃して貰う」

『了解！』

そして皆さん部屋を退室する。

僕もそれに習い部屋を出ようとすると・・・・・。

「ライナ。すこしいいか？」

「なんだい？クロノ」

「君には別の任務を行って貰いたい」

「へ？救助とかガジョットの排除じゃなくて？」

「それもやってもらうが、もう一つ余分に」

「ええ～～・・・自分でやりなよ。暇でしょ？提督って」

「失礼だな。僕はこれをマスコミとかに話さなければならないんだ。ここの指揮官だからな」

「へいへい・・・・で、何をすれば？」

「実は今回のガジェットは、動きから推測すると遠隔操作なんだ」

「自立じゃないと？」

「ああ。だから君には操作しているヤツを捕まえて欲しい」

「・・・なんで僕？理由は幾つか思い当たるけど」

「想像の通りだと思う。そんなに人員は割けないし、一番信頼できる実力者である君に頼みたい」

「・・・フェイトさんは？」

「これは一人の方が何かとやりやすいだろう？」

「あ、そう。じゃあリミッターを」

「わかった。ワンランク下げよう」

「話が早い」

と言うわけで僕のリミッターはワンランク下がった。

「じゃあ先に行ってるから、フェイトさんにはテキトーなこと言っておいて」

「わかってるさ。それとホラ」

ヒョイっと、クロノからベルカと、もう一つガントレットを投げ渡される。

「頼まれていたものもな」

「ちょっと！投げないで下さいよ！！」

講義するベルカ。しかし僕らはスルー。

「どうも。じゃ」

「ああ」

「無視しないで下さいよ！！」

こうして僕は部屋を出て、一人現場へと先に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「あれ・・・？ライナがいない」

私はバルディッシュの調整と作戦の確認をして、後は出撃を待つだけ。

だけどこういう時に補佐官がいない。どういうこと？

「クロノなら知ってるかな？」

私はクロノがいるであろう作戦本部の部屋に行く。

そしてノックして部屋に入る。

「クロノ」

「なんだ？まだ時間じゃないぞ」

「そうじゃなくて。ライナがどこにいるか知らない？」

「ああ。彼なら一足先に現場へ向ってるよ」

「え？何で？」

「彼がそう進言したからだ。僕もよくは分からない」

「あ、そうなんだ」

「アイツなら心配ない。君は目の前の任務に集中してくれ」

「うん」

私はちょっと腑に落ちないけど部屋を出た。

（なんで一人で行っちゃったんだろう・・・。私に何も言わないで・・・）

「私って信用されて無いのかな・・・・・」

でも私は頭を振って切り替える。

「これから任務。今は任務に集中しよう」

私は待機室に戻った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ルクス。見えた？」

『はい。後一分ほどでガジェットの群れとぶつかります』

「じゃあルクス、ソル、ライト、セットアップ」

パァっと光って変身。背中に長剣と槍。腰には二丁のガンソード。

「デバイスリンクは？」

『問題ないです』

『同じく』

「よし。ベルカ。ユニゾン」

「了解です」

ユニゾンしたことにより、僕の姿は銀髪灼眼となる。
バリアジャケットも青と赤をベースとしたものに変わる。足と背中からは銀の魔力光が散っている。
「ちゃんとできてるね。僕の最後のデバイス」
ドカァァァアン！！
街からは火の手が上がる。もはや火の海と化している。
その周りにはガジェットが”これでもか！”っている。まあ三桁は軽く越えてるね。
僕は剣と槍を背中から抜く。
「行くかな。魔光一閃！」
僕の剣から放たれる斬撃で、ガジェットが数機破壊される。
それでガジェットたちは僕に気付く。
「首謀者を探せって・・・無理じゃない？」
見渡す限りガジェット、ガジェット、ガジェット。気持ち悪～～い。
「まあ、派手に動けばアチラの出方も分かるだろうし」
僕は槍を構える。

「さあさあさあ！昼寝の時間を削った罪は重いよ！」

『『『はあ・・・・・また昼寝ですか』』』

デバイス達が呆れてるが華麗にスルー。

「突撃！」

僕とガジェットたちはぶつかった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「時間だ。諸君、健闘を祈る」

クロノの言った時間になった。

私を含めて三十人ぐらいの執務官、およびその補佐官がこの事件に

当たる。

「先ほども言ったが、こちらの増援は早くても一時間後だ。期待はしないでくれ」

増援は期待できない。ガジェット五百機以上に、三十人と言うのは少なすぎる。

それは誰にでも分かっている。でもやらなきゃいけない。

「まず始めに言っておく。自分の命を粗末にはするな。危険だと思ったらすぐに離脱してくれ」

『はい！』

「では・・・出撃！！」

クロノの掛け声と共に私達は空へ上がる。

「ハラオウン執務官殿。こちらは出来るだけ貴方のサポートをします」

「背中は安心してください」

二人の執務官の方がこちらに来る。

今回は三人一組のパーティを組み、この作戦に当たることになっている。

「いえ。私の方も出来るだけ気を配るようにします」

「はい。それでは行きましょう」

私は顔では平常を装っていたけど、少し不安が残っていた。

（ライナがないと・・・こうも不安なんて・・・・）

他の二人の実力は知ってるし、一緒に仕事をした事もある。充分に強い。

だけど信頼を置く補佐官がいないと落ち着かない。

（ダメダメ。ライナがいなくてもやらなきゃいけないのに・・・・・）

自分では分かっているけど、どうしても不安が残る。

（・・・・どうしちゃんたんだろう・・・・私）

「ハラオウン執務官！もうすぐ現場ですよ！」

「！？は、はい。わかりました」

考え事をしすぎてしまった。何時の間にか目的地に着きそうだ。

火の上がる街やガジェットは目視できる。

（今は任務に集中しないと・・・・！！）

そして私達はガジェットに攻撃しながら突入した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「魔光五閃！」

僕の刃から５つの斬撃が飛び、ガジェットたちを切り刻む。

「ふぅ。ここは制圧かな。ルクス、今何時？」

『１９：１０分ですね』

「じゃあもう執務官達も来てるかな。・・・しっかし多かったなぁ～」

僕が振り向くと、後ろには大量のガジェットの残骸がある。

ついでに、僕とガジェットの戦闘で街は瓦礫の山と化している。

『そりゃあ７００機を一人で倒せばこうもなりますよ』

「おっ。千まであと三百か。夢の千人斬りだな」

『人じゃないですけどね』

「些細な違いさ。それよりもさ、後でこの建物とかの賠償請求とかくるかな？」

『まあ、緊急事態だったからとでも言えば大丈夫では？』

「なら好き勝手に壊せるな」

『主、性格歪みましたね』

「冗談だって。それはそうと、ガジェットって減らないね～」

僕の５０メートル前方には、またまたガジェットの団体さん。

「今さ、ガジェットによる”街を壊そうツアー”でもやってるのかね」

『だとしたらスゴイ参加人数ですね。人じゃありませんが』

「この無限ループ疲れた。たまには違うインパクトが欲しい」

『じゃあガジェットはほっといて、首謀者探しでもします？』

「あっ、そういえばそんなこと頼まれたっけね」

『主って記憶力あるんですか？』

「あるよ。興味のないものには働かないけど」

『そうですか。で、どうします？』

「夢の千人斬りしたら行こうかな」

『そうですか。バカな夢でも追うことに意味がありますもんね』

「バカは余計。そろそろ団体さんがお待ちかねだ」

ガジェットたちは、僕らの周りを囲んでいるが近づいてはこない。

『私達を鑑賞でもしてるんでしょうかね？ツアーだけに』

「だったら有料だって分からせないとな。まあ当然・・・・」

僕は刀と槍をしまい、二丁のガンソードを取り出す。

「料金はアンタらの死だけどね！」

僕のガンソードから放たれる光弾と斬撃が、ガジェット達を吹き飛ばす。

『人じゃないですけど』

「それ二度目」

僕は夢の千人斬り制覇を目指した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・・・この夜にふさわしい客だな」

燃え盛る街を見下しながら、腰に一本の剣を携えた男が呟く。

「クールにカッコつけるのはいいけどさ、手伝ってくれない？」

その男の後ろで、モニターを操作する女が言う。

「そういうのは俺には向かないだろう？」

「・・・機械オンチめ（ボソッ）」

「何か言ったか？」

「別に？」

「ならいいが。今のところは作戦通りだな」

「そっちは何もして無いでしょうが」

「俺はボディガード専門だろう？」

「まあそうだけどさ。あっ、今ガジェットの撃破数が１０００を越えた」

「想定内だろう。まだまだガジェットはあるしな」

「操作するのは私だけど」

「それが仕事だろう」

「はいはい。暇人は気楽でいいですね」

「喋りながら４桁のガジェットを同時に操る君が言う言葉じゃないな」

「しかし・・・彼のためにここまでするのって・・・ちょっと異常じゃない？」

「バカを言うな。今倒された１０００機のうち、七割ぐらいは彼がやったのだぞ」

「まあそうなんだけど」

「お前は過小評価しすぎだ。俺でもどうなるかわからん相手だ」

「へぇ～～。でもリミッターがあるんでしょう？」

「アイツには、それを覆すほどの知力がある」

「それって・・・単に貴方が馬鹿なだけじゃ・・・・・」

「悪いがアイツと比べないでくれ。物差し自体が違うのだから」

「はいはい・・・おおっ？フェイトって執務官が、彼を除けば一番ガジェットを倒してる」

「彼のほかに注意すべき相手は、彼女ぐらいだろうからな」

「あ～～あ。暇だな～～」

「集中しろ」

「はいはい」

喋る二人の後方で、何百というガジェットが飛び立つ。

夜空に青い輝きを放つ月が顔を出す。その光はとてつもなく不気味なものだった。

困りますよ～～（後書き）

もう少しうまく纏められれば良かったと思います。

誤字脱字、感想お願いします。

アスタール（前書き）

誰視点って書いた方がいいんですかね？

些細な質問ですけど。

「よっしゃ！ついに千人斬り達成！！」

『よくもまあ・・・・無駄なことしましたね』

「喜ぼうよ」

『もうすこし、きれいな場所で見たら喜べたでしょうけど』

僕らが振り返ると、そこにはガジェットらしき鉄くずと建物のガレキの山。

「・・・・・やり遂げることに意味がある」

『つまり過程はどうでもいいと？』

「・・・・・・・・・・・首謀者を探そう」

『誰かのせいで無駄な時間を過ごしましたからね』

それを言わんでくだせぇ～～～～。

『主。１５メートル後方に生体反応です。しかしどんどん微弱となっていきます』

「げっ。マジで？僕らの戦闘に巻き込まれた？」

『それ以外に心当たりありますかね？』

「救出しなきゃ。救出救出」

『・・・・・・・・まあいいですけど』

僕は後ろに走って、ルクスが言う所のガレキを退かすと、二人位の人達が埋まっていた。

だが周りにはまだガレキが散乱している。

「ルクスさんや、ガレキを吹っ飛ばす。テンペスタード」

『モード・テンペスタード』

そして僕の剣と槍は光の粒子となり、粒子が再び集まると一つの大剣になる。

「吹き飛べ！」

『デザートサイクロン』

その大剣を地面に叩きつけると、そこを中心に竜巻が起こる。

それがガレキやら何やらを吹き飛ばす。そして民間人たちの周りのガレキは退かされた。

『ちなみに。吹っ飛ばしたガレキがそこら中に散らばっていますが』

「誰もいないじゃん」

『・・・・・さて、何故私は誰もいないのに、こんな事を聞いたのでしょう？』

「何だよ！怖いじゃないか！本当に誰もいないよねぇ！？」

『御自分で確かめてみては？』

「・・・・・・・・くされデバイスが（ボソッ）」

『小声で言っても聞こえますけど』

「もういいっ！！そこの人達、大丈夫ですか？」

だが返事は無い・・・ただの屍のようだ。

「くっ！僕の救助が間に合わなかったばっかりに・・・・！！」

『誰がこの人達をこんな目に合わせたんでしょうかね？』

「・・・・・・・・・ぼ、僕はそんなヤツ許せない」

『そうですね。私も許せません。千人斬りなんてバカな夢を追いかけるあまり、業務上過失致死を起こす愚かな主・・・・・いえ犯罪者を』

「・・・・・・・・生きてるよね？」

『さあ？御自分で確かめてみては？』

「生きてるって事にしとく。これを置いていこう」

僕は胸のペンダントを二つに割り、救助した人達を安全な場所まで運んで、横にして割ったペンダントを置く。

これは局員緊急用のエマージェンシーシグナル。つまり発信機。

これならすぐに他の局員の人が見つけてくれるだろう。

『その代わり、主の緊急時には使えませんが』

「大丈夫さ。ついでにどこに首謀者がいるか分かったし」

先ほどの技は、電気信号などを遮る効果もある。

遮った場所から逆算すると、１０ｋｍぐらい離れたデパートの屋上にいるということが分かった。

『さすがは、無駄に知力の高い主ですね。この場所には無数の電気信号があるのに』

「すべての電気信号の延長線上がそこってだけさ。って無駄は余計」

そして僕はそちらに飛んだ。

『最初からコレ使えばいいじゃん・・・・とは思ってはダメですよ？』

「そうそう。決して忘れていたわけではないからね」

誰に対して言ってるかは・・・・・謎。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「はぁああ！！」

私は今、ガジェットたちを破壊しながら救助活動をしている。

「ハラオウン執務官！こちらに怪我人が！！」

他の二人は、後ろで怪我をした民間人達の応急処置を行っていた。

「私は救助活動を続けますから、二人はその方々を安全な場所へ」

「大丈夫なんですか？」

「無茶はしません。それに一刻を争うかもしれませんし」

「わかりました。できるだけ急ぎますので」

「はい」

そして二人は怪我人達を運んで飛び立っていった。

「行こう。バルディッシュ」

『はい』

私達は再びガジェットを破壊しながら進む。

そして進んで行く内にまたガジェットの群れに出会った。

「キリがない」

『かれこれ１００機は倒しました』

「でもやらなきゃ――――――――――」

「飛竜・・・・一閃！！」

ドォオオオオンッ！！

いきなり１０機位いたガジェットたちが、空からの連結刃による攻撃で破壊された。

「シグナム！」

私が呼ぶと、空からシグナムが降りてきた。

「遅くなった。大丈夫か？」

「はい。そちらはどうして？」

「遅くなったが増援だ。主はやてと高町もいる。ここは違う場所だが」

「そうなんですか」

「ああ・・・そういえばお前の副官がいないが？」

「あ、ライナとは別行動なんです」

「そうか。では、私は救助活動を行っている隊員たちへの、連絡係もかねているので用件を言うぞ」

ＡＭＦの影響で、通信は取れなくなっているからだと思う。

「はい」

「まずは現状報告だ。ガジェットたちは南西部から中央部に進んでいる。一応ハラオウン提督たちが防衛しているが、数が多すぎて抑えきれないらしい。一通り救助活動をしたらそちらに向ってくれ」

「はい」

「あと、お前の補佐はほっといておけと」

「え？」

「理由は知らないが、そう言われたのだ」

「で、でも・・・・・・・」

「納得できないかもしれ――――――――な、何だあれは！？」

「え！？」

シグナムが空の方を見て驚くので、私も空の方を見る。

「な、何・・・・・？」

そこには・・・・・巨大な黒い龍がいた。

いや、正確には無数のガジェットが集まってそう見えているだけだと思う。

「軽く千は越えてるぞ・・・・！」

「ど、どこへ行こうと・・・・・・？」

ガジェット達が向おうとしているのは、南西の方角だった。

「ミッドは北東だぞ？」

「・・・・あ、向っている先に、小さいけど魔力光が見えます」

「そこの戦闘への増援・・・・か？この数で？」

「わ、わかりませんけど・・・・・」

スドォオオオオオン！！

「「！？」」

私達が話していると、いきなり銀色の砲撃がガジェットたちを貫いた。

そしてガジェットの群れで出来た龍は、その砲撃によって四散した。

一気に、二分の一は砲撃によって破壊されたと思う。

「ど、どこから・・・・」

「・・・・どうやらあの場所らしいぞ」

シグナムが指差すのは、先ほど小さな魔力光が見えた場所。つまり・・・・・。

「そこで戦っていた人の砲撃!?」

「俄には信じられんが、そうだろう」

「い、一体誰が・・・・・・・」

「わからない。味方だとは思うが・・・・」

『高速で接近する魔力反応。さきほど魔力光が見えた場所からです』

「「!!ッ」」

バルディッシュの言う通り、そこから小さな光がこちらに向ってきている。

「敵なのか!?」

「くっ!!」

私とシグナムが戦闘体勢になるが、その光は私達のはるか上空を通り過ぎ、その光は散らばったガジェットの群れに突っ込んで行く。

「なに？」

「どうして・・・」

そしてその光は急に大きくなり、光にぶつかるガジェットは破壊される。

「な、なんだと・・・・・・・」

シグナムは驚いてそれを見ているが、私はそれどころではなかった。

「な・・・・・何・・・で・・・・・？」

私は、光が大きくなる瞬間にある人の顔を見た。

「嘘・・・・・どうして・・・・・」

それは私がよく知る人。私が信頼を置く人。

「どうしてライナがあんな・・・・・」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「あ〜〜・・・・ダメだ。疲れた」

『2千機破壊しておいて、いまさら疲れましたか』

「普通疲れるでしょ」

僕は、先ほどユニークなガジェットドラゴンを吹っ飛ばして、デパートの屋上で向っている。

『ここまで来たら弱音なんて吐かないで下さい』

「ま、そうなんだけどさ」

『貴方のデバイスならこれぐらい造作も無いことです。ちがいますか？』

「ふっ、その通り」

そして僕は目的地にたどり着いた。

「ようこそ。君は今は、ライナ・リュート君かな」

降り立ったら、中々ダンディなおじさんが迎えてくれた。

「どうも。大規模破壊テロ犯さん？」

僕は、なるべくにこやかな笑顔を返してやった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「はじめましてかな。俺の名前はエンブレム。そちらも知ってるとは思うが」

僕と向かい合う、笑顔を絶やさないダンディな男。見た目二十代後半から三十代前半。

「偽名で言われてもねぇ・・・・」

「君こそ本当の名では無いだろう？」

「そうですね。じゃあ時空管理局です。無駄な抵抗はしないでお縄になってくれれば助かります」

小声で”僕が”とつける。

「悪いがそれは出来ん」

そして腰から刀を出す。日本刀かな。

「やれやれ・・・・血の気が多い方ですね」
僕もガンソードを構えて戦闘態勢。

「ちょっと。ここで戦わないでよ」

しかし、男の後ろから声が聞こえたので見てみると、なにやらモニターを操る赤髪美人がいる。

「それはアチラに聞かんと分からん」
そしてお二人がこちらを向く。

「戦いたくないなら、今すぐ投降してくれません?」

「それは選択肢に入って無いわ」

「ありゃりゃ。こりゃ一本取られました」

「・・・・聞いたとおり。中々いい男の子ね」

「え!?初対面でいい印象持たれたのって・・・・・・うううぅ」
感動で涙が出た!!本当に!!久しぶりに!!初対面で!!いい印象を持たれた!!

「な、なんで泣くのかしら・・・・?」

「さ、さあ・・・・・・？」

お二人が苦笑しているが、僕の感動の涙は止まらない！！

だが・・・・・・。

「ライナ！」

・・・・・・どうしてでしょうかね？

「何でフェイトさんがいるんですか・・・・・・・・」

「それは私のセリフ！！どうして一人で行くの！？心配したんだから！！」

・・・あれ？クロ猫ヤマトが誤魔化してくれたはずだよね？

「ちなみに私もいるが」

「な～～ぜ～～・・・・・・」

シグナムさんも今、こちらに来た。

どうやらフェイトさんは物凄いスピードで来たらしい。

「中々豪華なキャストだ」

「そうね」

二人の声で、フェイトさんたちはそちらに意識を向ける。

「時空管理局です。武器を捨てて投降してください」

「今発見したわ。二度も同じ事聞かされるとウザイ」

「同じく」

アチラさんは投降の意思は無いらしい。

「戦うのは勝手ですが、三対二ですよ」

向こうの力量はどうだか知らないけど、オーバーS二人に、ニアS一人。

状況は圧倒的にこちらが有利のはず。

「ふっ。これを見てもそんな事が言えるかな？」

そして男は懐からあるモノを取り出す。

「！？そ、そいつは！！」

「おや、やはり分かるか。君の想像の通りのものだ」

ヤツが取り出したのは黒い結晶。

「・・・・何故そんなものを持ってるんでしょうかね？」

「君の想像に任せる。それより他の二人が話に付いて来れて無いぞ？」

その通り。お二人とも頭に？マークを浮かべてる。

「・・・・説明面倒くさいけど・・・・仕方ない」

頭を掻きながらも僕は説明を始める。

「この世の魔力は森羅万象、すべてのものに宿っている。そしてその魔力は常時放出され、いろんな流れを作っている。
しかしその流れにバグが生じて、本来流れるべき魔力が滞留して、やがて魔力の塊となる。
それは大きな魔力の塊となり、魔力の流れに乗って色々な場所を漂う。
そして時間が経つと、意思を持つ魔力を媒体とした生き物となる。
知能は低いのですが。
これが一般的に幽霊と言われたりしますね。
でもこいつらは一週間ぐらいで消えて、魔力の流れに飲まれます。
ですがこれらは偶然生物に宿ったりすることがある。
それが一般的にリンカーコアと呼ばれる物です」

二人とも驚いている。まあこれは一般的に知られていないことだし、しょうがない。

「説明続けますね。その魔力の塊はスゴイ量なんでして。最低でもSはいきます。
だけど宿る時間が遅ければ、どんどん魔力が消えていっちゃんですよ。

でもそうなる前に、ある人為的なことをして結晶にする。
それがあの男の持っているものです。
あれの名称は『アスタール』見た目はリンカーコアと同じですけど」

「見事な説明だな」

パチパチと拍手をする男。

「ですが・・・・デメリットも知ってるんですよね？」

「ああ。もっとも、俺には意味の無いものだが」

「デメリット・・・・・？」

フェイトさんが疑問系で尋ねてくるので説明。

「『アスタール』は本来バグです。しかし、リンカーコアは生物との融合でバグではなくなる。
しかしバグを取り除く前の『アスタール』状態では、何が起こるかわからない。
まあ、いい事が起きないのは確実ですが」

「それは昔の話だ」

「昔？」

「今はすでに、結晶にした『アスタール』のバグを取り除く技術がある。
これは取り除いた物の一つだ。つまりデメリットは発生しない」

ふ～～～ん・・・・・・。

「何故『アスタール』が人々に知られていないか、知ってますよね？」

「ああ。これはドーピングのようなものだ」

「その通りです。『アスタール』は魔力を引き寄せる性質がある。だから使えば、自分の体のリンカーコアと、くっ付いてしまいます。ついでに言うと、『アスタール』は結晶にしても少しずつ魔力は減ります。

その特性が、自分の体の中のリンカーコアにも出てきてしまう。つまりどんどん魔力が無くなっていき、最終的に空になる」

「その代わり、リンカーコアの魔力量は倍以上になる」

男が口を挟む。フェイトさんたちはついてこれてるらしい。

「正解です。しかし力を得るにはリスクが高すぎる。だから――――」

「それを欲するものが現れないようにしなければならない。有望な若者の数を減らしてしまうからな」

「・・・・・・・・その口ぶり。やはり知ってるんですね」

「ああ。『アスタール』の情報は管理局が厳重に規制している。過去のある失敗によってな」

「・・・・・・・・・・・・」

「君ならわかるだろう?管理局の裏が、どれほど卑劣で・・・どれほど理不尽か」

「・・・・・・知らないね」

「隠さなくてもいい。我々は知っている。君が哀れで悲しいモルー――――――」

ドン!!

僕はヤツが言い切る前に銃を撃った。

僕の弾はヤツの刀によって弾かれる。

「血の気が多いのは君もなんじゃないか?」

「知らないです。あんたと一緒にしないで下さい」

「やれやれ・・・これだから化け物は・・・・・っと、そういえば君たちも化け物じゃないか」

「「!?」」

ビクッと身体を震わせるシグナムさんとフェイトさん。

「貴様ら二人が管理局で働くとは・・・・」

「や、やめて・・・・・・」

「くっ・・・・・・・・」

フェイトさんが声を出し、シグナムさんは拳を握る。

「まあ管理局だからか。こんな物でも傀儡にしたいんだな」

「やめて・・・・・・・・・言わないで・・・」

フェイトさんは一滴の涙を流す。シグナムさんは無言で俯いている。

「まあ化け物には化け物がお似合いだな」

「やめて!!」

フェイトさんは声を荒げて、男に突っ込む。

ガィィン!

フェイトさんのバルディッシュと男の刀がぶつかる。

「やはり化け物・・・いや欠陥品は血の気が多いらしいな」

「!?、きゃあ!!」

男の言葉で一瞬動揺してしまい、その隙を突かれて壁に蹴り飛ばされるフェイトさん。

「テスタロッサ!」

シグナムさんが急いで駆け寄る。

「ハッハッハッ！これは珍しい！化け物同士が仲良くしているぞ？」

狂気のような笑い声を上げる男。

「貴様ら物がこんな人間のような行動をするとは！！」

「貴様！！」

シグナムさんが男を睨む。男は驚いている。

「俺は本当の事を言ったまでだぞ？化け物に睨まれる覚えは無い」

「くっ！・・・・・・」

シグナムさんは悔しそうに地面を殴る。

「傑作だな。化け物がこんな事をしてくるとは」

「やめ・・・て・・・・・・」

痛みに耐えながらも声を出すフェイトさん。

「これは笑の種になりそうだ。化け物たちが手を取り合うなど」

「お・・・お願い・・・・・・もうやめて・・・」

涙を流しながらのフェイトさんを、男は見下したような目で見る。

「汚いな。まあしょうがないか。何せ貴様は――――――――」

「やめて！！ライナの前で言わないで！！」

「アリシア・テスタロッサの、出来損ないのクローンなのだからな！！」

涙を流してのフェイトさんの言葉は、男には届かず無情にも言われてしまった。

「ああ・・・・いや・・・・・いや・・・・・」

そんな言葉を発するフェイトさん。シグナムさんも苦しそうな顔をする。

フェイトさんの顔は絶望の色で染まっていた。そして視線は僕の方を向いている。

僕はフェイトさんの方は見ずに、男の方を見て言う。

「僕は化け物さ。彼女達は違うけどね」

アスタール（後書き）

悪役って難しいですね。シリアスって難しいですね。

あと、アスタールは変な解釈ですが、改良したということにしておいて下さい。

誤字脱字、感想があったら下さい。

そんなに悪が好きかい？（前書き）

今回は、大体三人称です。

「僕は化け物さ。彼女達は違うけどね」

ライナはハッキリと言った。

「ほう。笑えんジョークだな」

「ウケなんか狙って無いさ。今回は」

「そうか。では――――――――」

「始めますか。不屈の幻影（レイジング・ファントム）」

その言葉とともに、ライナと男と女を黒い線が囲む。

「安全な場所まで避難してください」

ライナはフェイトたちにそう言い残した。

「待てっ！お前は・・・！！」

シグナムが声を出すが、彼らを囲んだ黒い線から壁のような物が出てくる。

そしてそれは彼らを閉じ込めた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

彼らがいる場所は異質だった。

上は何も無い黒い空、下は生物の骨が転がっており、現実から離れた空間だった。

「わざわざ不利な状況にするのか？」

「そうさせたのは貴方だろう」

「そうだな。あれを言えば化け物どもは使い物にならなくなる」

「もう少し、精神を鍛えた方がいいわね」
男はあまり動揺は見せず、女の方も目立った反応は無い。
「ここは君の幻覚か？」
「そうとも言えるし、そうじゃないとも言える」
「ハッキリしてほしいわ」
「そうとしか言えないです。自分らで推理してください」
ライナが冷たく言うと、女性は息を吐き、どこからか異形のモノを取り出す。
あえて言うなら、刀とバスーカとドリルを足して、三で割った感じ。
「私が操作を切り離したことで、ガジェットたちはスタンド・アローンになったわ」
「つまり彼女が操作しなくてもガジェットは動く」
男達は余裕の表情で補足する。
しかしライナは無表情。大して驚いてもいない。
「そんな事は分かりきってます。僕が二人をこの空間に閉じ込めたのは、単に倒すためです」
「さっきの君の言葉を借りると、戦うのは勝手だが二対一だぞ？」

「そうですね」

ライナの表情に変化は無い。余裕すら感じさせるほどの態度だった。

「しかしただ戦うのでは面白くない。すこし昔話でもしようか」

「何のつもりですか？」

「何、俺がそういう気分だというだけだ」

「あんまり変なこと言わないでよ」

「わかってる」

男は剣と『アスタール』をしまう。

「あるところに一人の少年がいた。その少年はある一点を除いては、いたって普通だった。

しかし少年のある一点は、周りの人物に恐れられて、少年の周りには誰もいなかった。

そして少年の両親は、息子を悪魔と騒ぎ立てて、殺そうとした。

そのとき少年は”死にたくない”と思った。そしてそれは現実となった。

少年の目の前では、両親が腹を真っ二つにされて死んでいた。

少年は両親の死体を放置し、少年は必死になって家を出た。

そして新たな道を探すべく、仕事を必死になってやった。

人を殺したり、味方を見捨てるなど日常茶飯事だった。

そして少年は正義の組織へと入れられた。

そこで少年は、神童や天才児などと言われていた。少年に寄り付く

輩はそんなのばかりだった。
だが少年は自らを偽り、正義にために戦った。
しかし少年は正義によって一度死んだ。
少年は思った。”僕が何をしたんだ。何でこんな事になったんだ”
と。
少年は諦めなかった。
少年は、全てを偽り再び正義のために戦った。
しかし、またしても少年は正義によって弾圧された。
だが少年は今も正義にために、悪と戦っている。
・・・・・・・・・・・・・・この少年とは一体誰か、想像はつくだろう?」

一通り話した男はライナへと尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・そんなヤツ、知り合いにいないね」

「そうか。まあそれでもいい」

「貴方はどうして管理局の下で働くの?」

女の方からの質問。

「正義のために」

ライナは迷わずそう告げた。

「貴方はその正義によって二度死んだのよ?それなのに何故そう言えるの?」

「俺も疑問だな。そんな正義に下るなら俺は悪になる」

二人はライナの答えを理解できなかった。

「簡単なこと。正義のために戦いたいから」

「馬鹿なことを。正義があるなら必ず悪も存在する。光があれば必ず闇もある」

「だから、正義がある限り悪もあり続けるのよ？」

「それはそうです。だから互いを認め合う正義を作りたい。だから戦う」

「互いを認め合う？何を馬鹿なことを。正義と悪は水と油、決して交わらない」

「同じ人間なら分かり合えることも出来る。僕はそう信じたい」

「それはエゴだな」

「それでも構わない。間違ってるなら正せばいい」

「お前のそれは理想論だ。所詮人にとって他人とは、蹴落とす対象でしかない」

「人が生きる限り、必ず誰かを傷つける。
よく人は”支えあって生きている”なんて言われるけど、アレは間違い。
支える前に、必ず迷惑をかける。

人は”互いに迷惑を掛け合って生きている”はずだ。
だから人は、他人に迷惑を掛け合い、そしてどれだけ相手を許せるか、それが大事。
それが人の生き方。人の本質。何者も逆らえないと僕は思っている」

「ずいぶんと極端だな」

「そうですね」

「無駄話はこれまでとしておこう」

男は『アスタール』を飲み込み、刀を抜く。男からはドス黒い魔力が漏れ出す。

ライナは無言で背中の刀と腰のガンソードを抜く。

「お前は手を出すなよ」

「わかってるよ。私は戦いが本業じゃないし」

女は武器を持ったまま下がる。

「では、はじめるとしよう」

ガギィィィン!!!

ライナの剣と男の剣がぶつかり、火花を散らす。

「一分は持ってくれよ？」

「その言葉。そっくりお返ししますよ」

ライナと男の剣撃の応酬。その光景は皮肉にも綺麗な戦いだった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「あ・・・・ああ・・・・・」

「しっかりしろ！テスタロッサ！！」

場所は変わってライナの作った結界？の外。

そこには、心ここにあらずのフェイトと、呼び覚まそうとするシグナムがいた。

「いや・・・・いや・・・・・」

フェイトは過去のトラウマを刺激されたか、いくら言っても正気を取り戻さない。

「くそ・・・今は離脱するか・・・・」

どの道、フェイトがこの状態では足手まといになるだけ。

「いや・・・・いやだよ・・・・・」

嗚咽を漏らしながら言葉を繰り返すフェイト。

「すまんな、テスタロッサ・・・今は許せ」

「うっ！」

ドゴッとフェイトの腹を殴り、気絶させる。

「・・・・必ず帰って来い。ライナ・リュート」

フェイトを担いで、ライナたちを閉じ込めている黒い空間を見ながら、シグナムはデパートから飛び立った。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXX

「ハッ！」

「フン！」

ガキンッ！ガキンッ！

ライナと男は幾度と無く剣をぶつけている。

両者肩や腕などに小さな切り傷が残っている。

「しぶとい」

「そりゃどうも！！」

ガキィィィン！！

二人が再び剣をぶつけ合い、鍔競り合いになる。

「まさかここまでやるとはな」

「手加減してる人が言いますかねっ！！」

ライナは鍔迫り合いの中、ガンソードを振るう。

その攻撃を男はバックステップでかわす。

しかしライナはそのまま魔力弾を放つ。

「その程度」

剣を巧みに振り回して、男は魔力弾を打ち落とす。

「まだっ！」

「ムッ！？」

ライナはその隙に、剣に魔力を纏わせ必殺の一撃を放つ。

「豪魔光一閃！！」

「チッ。月光」

男の刀から黒い斬撃が放たれて、銀と黒の斬撃がぶつかって相殺される。

二人は一度離れて様子見。

「中々の一撃だった」

「難なく相殺されましたけど」

「『アスタール』の力だな」

「あ～～あ・・・・もう本気出しますか」

「そうか。では俺も本気を出そう」

次の瞬間、男の身体は黒の魔力で包まれた。

「これで君も終わりだ」

「さあ?それはどうでしょう」

その言葉と共に、ライナの周りの空間が歪む。

「なに?」

「さて問題です」

「後ろか!?」

男はいきなり後ろから声が聞こえたので、後ろを斬りながら振り返る。

「この空間はどんな効果があるのでしょう？」

男の剣は確かに斬った。しかし斬ったのはライナの幻影だった。

「チッ。こんな物を用意していたのか」

「「「まさか。できれば使いたくは無かったですよ」」」

何重にもなってライナの声が響く。

「フン。ならば」

男の黒い魔力が空間を侵食する。

「うわ。何てチートですか？それ」

「『アスタール』の能力だ。貴様と同じな」

「やっぱりですか」

「そろそろ出てきたらどうだ？」

「わかりましたよ」

空間が歪むと、そこからライナが出てきた。

「仕切りなおしですか？」

「そうだな『アスタール』バースト」

さらに男を覆う魔力がさらに倍増される。

「消えろ。咆哮月下」

真っ黒の魔力の砲撃が四方八方に放たれる。

「舐めるなよ」

ライナはなぜか武器をしまう。そしてライナへ攻撃は直撃する。

そして直撃したところから煙が上がり、視界が遮られていく。

「終わりか？」

「まさか」

煙が晴れると、そこには巨大な青い盾を持ったライナがいた。

「お披露目だ。ファグーン」

その盾は一度バラバラになって、盾から剣へと形を変える。

「なんだ？それは」

「僕の最後のデバイス。さて、こちらもそれ相応の力を出しますか」

ライナは剣を構える。その剣からは常時、粒子が散っている。

「・・・・・いや、どうやら時間切れらしい」

「なに？」

「そうだろう？ジェシカ」

「ええ。タイムアップよ、ブレム」

そして二人は、見たことの無い魔方陣を展開する。

「何で！？この空間で転移は出来ないはず・・・！」

驚きで声を荒げるライナ。

「自分で推理すればいいんじゃない？」

さっきのライナの言葉を、女はおちょくるように返す。

「中々楽しめた。次の戦いはお互いに全力でやろう」

「待て！！」

ライナの静止は聞かず、二人は空間から消えた。

「・・・・・・チッ。消えてしまった・・・解除」

ピシピシッと空間に亀裂が走り、バリィィンっと砕けて、もとのデパートの屋上に戻る。

「あ～～あ・・・・疲れた～～～」

『あの・・・・主？何があったのでしょうか』

「後で話すよ。とりあえず首謀者は逃げてしまった」

『失態ですね』

「強かったからさ。あっちは逃げたけど」

『とりあえず帰ります？』

「うん。フェイトさんがちょっと心配だから」

『ずいぶんショックを受けていたらしいですからね』

「一難さってまた一難。僕を過労死させる気かな？」

『貴方は寿命意外では死ね無いでしょう？』

「まあそうだけどさ」

『主にはいい薬です。たまには真面目に働いてください』

「真面目に働いてるつもりだけどな～～～～」

『その寝言は、１００回見直しすることをオススメします』

「ひどっ！」

そして僕は作戦本部の方へと飛んでいった。

そんなに悪が好きかい？（後書き）

今回は事件の途中だったので、早めに更新しました。

ヨシヒロ様。盾と言うアイディア、ありがとうございました。

次回は多分エピローグです。

誤記脱字、感想あったらお願いします。

自分の事は自分で決めて（前書き）

シリアスです。

あとフェイトファンの方には謝罪しておきます。

自分の事は自分で決めて

「・・・・スヤスヤ・・・・・」

みなさんこんにちは、ライナ・リュートです。

僕は今、自室で寝てます。

って言っても昼寝じゃないよ?最近忙しかったから、ちょっとした休憩。

前のガジェットによる大規模破壊活動事件は、表向きではスカリエッティの残党の仕業と言うことになった。

あの事件の真実を知ってるのは、ここの一部の局員と、増援に来た一等空尉以上の人だけ。

これは口止めされていて、言ってはならないらしい。

まあそれはいいとして。

事件のその後について・・・・気になる人もいると思うので回想します。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ここは何処かの提督室。

「さて、ライナ・リュート二等空尉。なにか弁解はあるかな？」

「・・・・・・何のことでしょう？」

いま、シスコン提督の前で尋問みたいなことされてます。

「では懇切丁寧に説明してやろう。君はガジェットを２１０３機破壊した。それはいいそれは。

だがな・・・救助した人を変な場所に放置し、街を破壊しすぎだ！！」

はいそんな事らしいです。

そりゃあ少しはいけないかな～～とは思ったけど・・・・ね。

「君には厳重な処罰―――――――ってお い！！聞いてるのか！？」

「聞いて無いし、興味も無いし、時間も無いから」

「おいっ！！ライナ！！話はまだ終わってないぞ！？」

「失～～礼～～～しました～～～～」

ってなわけで僕はある場所に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「来たか」

「ここって定番なんですかね？シグナムさん」

「いろいろと話しやすいだろう」

僕が来た場所はいつか、なのはさんと話した局の屋上。

そして座る場所もなのはさんと同じ。

そういえばあの時も、今日みたいに月が明るい夜だったな～。

それはそうと。

なぜここ来たかと言うと、事件が終わった時、いきなり通信で”話がある”なんていわれて、ここに来いと時間指定で呼ばされた。

「さて。単刀直入に言う、お前は何者だ？」

「ライナ・リュート。階級は二等空尉。現在はフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官の元で補佐をしています。それぐらいですかね？あ、あと魔道師ランクは総合ＡＡＡ＋で――――――」

「そんな事は聞いてない」

はい、自己紹介をしていたらバッサリ斬られました～。

「最初あった時には気付けなかったが・・・・貴様からは血の匂いがする」

貴方は犬か何かですか？って言ったら負けだと思う。

「あ、戦闘で怪我したときの――――――――」

「ふざけるのも大概にしろ」

なんかドスの響く声で注意されてしまった。

「お前からは、決して少なくはない血を浴びた匂いがする」

「毎日流血シャワーを浴びてますからね～～美容にいい」

「・・・・・・お前は何者だ」

再度シグナムさんからの質問。面倒だな、誰でもいいじゃないか。

「会ったことあるんですけどね～～」

「何？」

「――――我が命じる。汝が欲する光を現せ――――」

「何を――――――な、なんだ!?これは!?」

シグナムさんの体が光る。眩しい。

「騒がなくていいですよ。すぐに収まる」

「貴様――――――――――あっ!!」

シグナムさんから放たれる光が、徐々に収まって行く。

そしてシグナムさんの髪は銀になり、瞳は赤くなる。

「久しぶり。って言っても直接会うのは初めてかな」

「その通りだ。複写眼を受け継ぎ者よ」

「悪いけどそう言われるのは好きじゃないんだ。夜天・・・じゃないリインフォースだっけ?」

「そうだ。で、なぜ私を呼び覚ましたのだ?複写眼で何か見たか?」

「色々と面倒になったから」

「そうか。まあこっちは適当に誤魔化しておこう」

「ありがとう。でも君は教えなくていいのかい?」

「私の残留データが守護騎士たちに残っていたことか?」

「質問を質問で返さんで」

「それはすまない。で、今回の事は偶然だ。本来なら私は消えるはずだった」

「だったら喜ばしいことじゃ・・・」

「いや。私は騎士を通して見守ることにする。私をトリガーに防衛プログラムも出てきては困るからな」

「あ、そう。それでいいなら僕は何も言わないけど」

「だが・・・・時々でいいから、話し相手にでもなってくれないか？」

「いいよ。美女の頼みなら大体受け持つ僕だから」

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして。じゃあハイ」

僕は席を立ち、自分の胸へ指差す。

「なんだ？」

「いきなり倒れたトコを、僕が支えたってことにしておけば大丈夫かな思って」

「そうか。では」

リインフォースは僕に体重を預けるように寄りかかる。

周りから見れば抱き合ってるように見えなくも無い。

不可抗力だけど、何かいい匂いが鼻を刺激する。

自分で言っといてだけど結構照れるな、コレ。

「そろそろいいか？」

「う、うん。よろしく」

そして再び光が放たれる。そして髪はピンクに、瞳は多分青に戻ってる。

何故多分なのかは、眼を瞑ってるから。もしかして寝てる？

「シグナムさ～～ん？起きて下さ～～い」

「すぅ・・・・・・・すぅ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

穏やかな呼吸をして寝てらっしゃる。

寝かせるなら、寝かせると言っておいて欲しい。

そしてもう一度、シグナムさんの方を見る。

「すう・・・・・すう・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

寝顔はカワイイけど、起こさなきゃ・・・・・でも何か・・・罪悪感があるんだけど。

しかし今の状況を誰かに見られたら・・・・社会的に抹殺されるかも。

でも日々の疲れが溜まって寝てるのなら、起こすのもな・・・・・。

「いや！心を鬼にして起こすべきだろう！！」

はい、保身に走りました～。

「起きて下さい！シグナムさん！」

すこし強めに肩を揺らす。

「う・・・うん・・・・・？」

「あっ、やっと起きてくれましたか。心配しましたよ」

「・・・・・・何が・・・・・・」

「突然倒れたんで、僕が支えたんです」

「そ、そうか・・・。すまないな」

「いえいえ。で、そろそろ起き上がってくれるとありがたいんですが・・・」

「？　!?ッ、あ、ああ、すまないな!!」

いきなり顔を赤くして立ち上がるシグナムさん。

そりゃあんな格好では恥ずかしいですよね。

「いえ。僕は気にしてませんので」

「そ、そうか。・・・・・ん？何故私はここにいるんだ？」

「フェイトさんの事じゃなかったんですか？」

取ってつけたような話題の逸らし。

でも気になっていたのは事実なので、聞いてみた。

シグナムさんは「そうだったか・・・・？」的な顔をしていたが、まあ気にも留めずに答えた。

「テスタロッサは今・・・部屋で落ち着いてるはずだ」

淡々と言ってるつもりだろうけど、シグナムさんの言葉も顔も、明らかに元気が無い。

「何があったんでしょうかね？」

「？　お前覚えてないのか？」

「何をですか？」

「私達が・・・その・・・・・」

「化け物って事をですか?生憎、敵の言葉を鵜呑みにするほど馬鹿じゃないんで」

「そうか・・・・つまらん質問をしたな」

「いえいえ」

やっべ。すげー罪悪感あるよ。

真相知ってるのに隠して、それを知らずにホッとしてる相手見ると、罪悪感がぁぁぁぁぁああ・・・・。

「そろそろ私は行くとしよう」

「そうですか。お体に気をつけてくださいよ」

「言われんでも分かってるさ」

そしてシグナムさんは屋上の階段を下りていった。

僕はこれまたあの日のように、月明かりに照らされた町を見る。

「ルクス。気のせいかも知んないけど、シグナムさんの喋り方変わった?」

『どうでしょう?明確な違いはありませんでしたが』

「あえて言うなら・・・すこし軽くなったみたいな？」

『実力を認めたんじゃないんですか？』

「直接戦闘を見られた覚えは無いけどな～～」

『あとは・・・フラグでも立ててしまった・・・・・？』

「ん？何か言った？」

『いえ何も。（考えすぎですね。あのシグナムさんがこんな男を好きになるはず無いです）』

？　ルクスがちょっとおかしい。いや、まあ元からおかしいんだけど。

「フェイトさん・・・・どうしようかな・・・」

『励ましてあげましょうよ。副官の仕事です』

「おそらく違うと思うけど・・・」

『何を仰るのやら。さっさとフェイトさんの部屋に行く！！』

「今はそっとして置いた方がいいと思う気が・・・・・」

『面倒くさいだけでしょう』

「あ、ばれた？」

『はぁ・・・。とにかく一度行ってください』

「行ってくださいって・・・。何言えばいいのさ、ノープランだけど」

こういうのは、なのはさん辺りが適任だろうに。前例もあるんだし。

『それをカッコよく決めるのが貴方の存在意義です』

「そんな理由が!?」

『そうです』

「”そうです”じゃねぇ!!・・・・・いいんだよ、僕がやらなくても他の人がやる」

『そうやって、誰かがやるから理論に逃避しないで下さい』

「いつ作ったけ?そんな理論」

『さあ?で、これは貴方の責任でもあるんですよ』

「まあそうだけどさ・・・。ってお前、この頃僕の事貴方って呼ぶな」

『ええ。主から貴方に降格しました』

「なんで!?」

『なんとなくです。決して貴方に”くされデバイス”と言われたからではありません』

「・・・・・・・・・・・・・」

忘れてた・・・。こいつスゴイ根に持つやつだった・・・。

「わかった、わかったよ。明日にでもフェイトさんに逢ってくるよ」

『明日なんですね』

「いや、もう遅いし・・・さ」

『わかりました。貴方は睡眠時間を何よりも大切にしますからね』

「分かってくれたなら結構」

そして僕は屋上の階段を降りた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

てなわけで冒頭に戻ったりします。

「・・・・起きようかな」

『いよいよですか？』

「お前は持ってかないよ」

『何でですか！！』

「ＡＩを乗せてるのは持ってかないよ」

僕は制服を着て部屋を出た。

ファグーンとライト以外のデバイスも持たないでね。

邪魔されたくないからさ。

後ろから抗議の声が聞こえてくる。ルクスだけだけど。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

僕はある人の部屋の前に来ていた。

「何で僕がこんな事を・・・・・」

今更だけど激しく面倒くさい。

「ま、いいや」

僕は扉をノックする。そしてインターホンを鳴らす。

「フェイトさん。いますか？ライナですけど」

『・・・・・・どうかしたの』

うおっ、冷たい反応。

「いや、特に理由は無いのですが」

『・・・・・・じゃあ帰って』

「そういうわけにも行きませんから、ここに居座りますよ」

そして僕は扉に寄りかかる。

「ここからは僕の独り言です。聞き流したいなら聞き流しても構いません」

一応僕は宣言して独り言を始める。

「いけないかな～～と思いながらも、少し調べてきましてね。アリシア・テスタロッサ。かの有名な魔道師にして、ＰＴ事件の黒幕、プレシア・テスタロッサのたった一人の愛娘」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

調べたってか、知ってたけど。

「まだプレシア・テスタロッサが管理局に勤めていたころ、ある次元航空船の稼動実験中に事故が起きて、それが原因で命を落とす」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

アチラさんは何も返してこない。まあそうだろうけど。

「そしてプレシア・テスタロッサは管理局を辞め、違法ロストロギアを多く集めていった」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

まあロストロギアは全部違法っぽいけど。

「そんなある日、一つのプロジェクトに興味を持った。名を『プロジェクトF．A．T．E』。通称『プロジェクトF』」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「これの目的は、使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生。プレシア・テスタロッサは狂ったようにこれを研究した。そして研究の成果が出て一人のクローンが完成した」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「それはプロジェクトの開発コードを取ってF．A（フェイト）．T．Eと名をつけた。それが――――」

『・・・・・・・・私だよ。フェイト・テスタロッサは、作られた人工生命体』

初めて返事が返ってきた。

『そこまで知ってるってことは、結構危ないところまで見たんだね』

「ええ、一人で調べましたから。クロノが喋るとは思えないですし」

『・・・・・・ライナはどう思う?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『生態カプセルから生まれた私を・・・化け物だと思う?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『黙ってたことを怒ってる?私の下で働かされてたことを悲しんでる?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『PT事件のせいで将来を潰されたことを恨んでる?・・・・・・・・・答えてよ、ライナ』

若干、フェイトさんの声が震えてる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・どうして黙るの?・・・・・・・・・同情で言わないの・・・?』

「じゃあ言いますね・・・・・・・・・くだらない、虫唾が走る」

『く、くだらない・・・・・・?』

「はい、マジでくだらないです。正直失望しましたよ、貴方には」

『・・・・・・・・・・・・・』

「確かに、こんな上司の元で働かされたことを悲しみますね。もう僕に言えることは何も無いです。
これほど無駄な時間を過ごしたのは初めてかも」

『・・・・・・・・・・・・』

「それじゃあ、勝手に自分を責めて励まして貰ってください」

そして僕は部屋の前から立ち去ろうとする。

『どうして・・・私は・・・・・いやだよ・・・行かないでよ・・・私を一人にしないでよ・・・』

そんな声が聞こえてくる。だが無視する。

「ライナ君」

だが、いきなり背後から呼ばれる。僕の知ってる方の声だ。

「何か用ですか?なのはさん」

「・・・・・・・・・・・・なんでそんな事言うの?」

「盗み聞きですか。感心しませんね」

「私が聞いてるのはそんな事じゃないよ」

チッ、何だコレ。何で僕が悪者みたいにされなきゃならないんだ。

「答えてといわれたから答えたまでです。僕の正直な気持ちです」

「それがさっきの言葉だったの？」

「ええ、同情するよりはいいかと」

「・・・・・フェイトちゃんは化け物じゃないよ」

「それを決めるのは貴方ではないでしょう」

「・・・・・どうしても認めないんだね」

「何を認めればいいのか教えて頂きたいですね、天下の教導官様？」

今の僕はキレてるので、皮肉っぽく言ってみると、あちらから殺気が飛んできた。

「ライナ君。お話しよ？」

「ここでですか？遠慮します」

「じゃあ訓練場で」

「構いません。手加減はしませんが」

「それはこっちの台詞だよ」

そしてなのはさんはこの場を立ち去る。

「ちょうどいい。そんなにお話したいならこちらにも考えがあるよ」

クックックッと黒い笑いをする僕。久々にSな行動が出来る。

「フェイトさん。貴方は一度、自分の周りをよく見ることをオススメします」

そして僕は一度部屋に戻って訓練場へ向った。

自分の事は自分で決めて（後書き）

急展開でした。

でもリインフォースとの件はちゃんと意味があります。

誤字脱字、感想おねがいします。

あとプロジェクトFの方をすこし改造しました。

戦いってキツイ

「とりあえず・・・・なんです？このギャラリーの数」

「さ、さあ・・・？私も知らないけど、多分ライナ君のせいじゃないかな」

「へ？」

僕は今、局の訓練場でなのはさんと向き合っている。

しかし、その周りにはなぜか知らないけど、たくさんのギャラリーがいる。

ってか僕の方にすごいブーイング飛んでくるんですけど。主に男性。

それに比べてアチラは応援されてますね。人望の差かな。

「知らなかったの？最近、ライナ君って局では有名なんだよ」

「は？」

「一ヶ月くらいで、大きい事件をいくつも解決に導いてる新人って」

「はぁ・・・・・・・」

「それに『十字架（クロス・ジャッジメント）の断罪者』って二つ名もついちゃってるし」

「何ですか、その中二病みたいな名前・・・・」

別に嬉しくもなんとも無い。二つ名なら色々ある僕だし。

「ライナ君。真面目にやってよ」

「失礼ですね。僕は普段から真面目にやってますよ」

「そういう態度が真面目じゃないの」

「申し訳ありませんが、僕の中ではこれが真面目なので」

「そうなんだ。じゃあ私が正してあげるよ」

そう言ってレイジング・ハートを構えるなのはさん。

「今更ながら、やっぱこれって無駄な時間ですよね」

愚痴りながらも、二丁のガンソードを手に取る僕。

あっ、ちなみに今の僕はフル装備。でもリミッターはＡＡＡ＋のまま。

背中に長剣と槍、腰にガンソード、ユニゾンしていて、両肩にファグーンがある。

ファグーンは簡単に言うとビット。

でも合体の組み合わせで色々な武器、または防具に形状を変えることが出来る。

今の状態は羽根のような形をした盾。

「合図とかは？」

「必要かな？」

「愚問でしたね、すいません」

「わかれば・・・いいよ！！」

言葉と同時に、砲撃を放つなのはさん。

「それぐらいで牽制のつもりですか？」

盾で難なく防ぐ。そしてガンソードの砲撃を放つ。

「人の事言えないね」

なのはさんは飛び上がってそれをかわす。

「アクセルシューター」

ピンク色の魔力球がなのはさんの周りを囲む。数はざっと２５。

「ジェットバレット」

僕の周りも、銃弾の形をした銀の魔力光で埋まる。

「遠慮なく行かせてもらいますね」

「望むところだよ」

そして、二つの色の魔力光がぶつかった。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
X

言わずと知れたシスコン提督である。

「まあなのはは、あいつの正体を少なからず知ってるから問題は無いだろうが」

そう言って観客席になってしまった休憩室を見渡す。

職務はいいのかと、突っ込みたいぐらいの数が集まっていた。

「・・・・まあ、なのはの本気の戦いなんて早々見れるものでも無いし当然か」

それほど彼女が人気なのに驚いたが。

「だが・・・なのはでもおそらくは苦戦するだろうな。なんせ――――ん？」

僕は言葉を区切り、ある方向に足を運ぶ。

「どうしたんだ、フェイト」

「・・・・・・あ、クロノ」

フェイトは人ごみから遠ざかった、ここと隣接したテラスでコーヒーを飲んでた。

「どうした？元気が無いが」

「え？そうかな・・・・・」

明らかに元気が無い。顔は何十にも陰がかかってるように見える。

「報告にあった二人組の事か？」

僕はフェイトと向かい合わせに座った。

「やつらの事はこっちで調査中だ。君が心配しなくてもいい」

「いや・・・そういうんじゃないんだけど・・・・・・」

「じゃあなんだ？僕には相談できないことか？」

「・・・・・・実は、ライナに知られちゃったんだ」

「何をだ」

「私が、プロジェクトFで作られたクローンだって事を」

そんなことか。アイツは言ってないだけで、すでに知ってるぞ。関係者だしな。

「それでお前が悩まなくていいだろう」

「まあ・・・そうなんだけど・・・」

フェイトの顔は元気とはかけ離れた顔だった。その顔に僕は見覚えがあった。

「わかった。お前がなぜ悩んでるか当ててやろう」

「え？」

「ライナにその事について”くだらない”的なこと言われたんだろう」

「え！？ど、どうして分かったの！？」

「まあ長い付き合いでな。以前に僕が君のようになってた時、そう言われたんだ」

「そうなんだ・・・」

「ちょうどいい。少し僕とライナの昔話をしよう。今のお前には必要かも知れない」

「う、うん・・・・・」

「アレは、僕がまだ新米だったころだったかな・・・・・・・」

X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

ｘｘｘｘｘ

「ここで間違いは無いか？」

「はい。執務官殿」

「・・・・・嫌味か？」

「滅相も無いですよ。ハラオウン執務官」

僕とライナは、ロストロギア回収任務で、第３１管理世界の《グレイモ》へ行っていた。

元は人が居たんだが、戦争で互いを一人残らず殺してしまったんだ。

そして長い間放置され、世界全体がジャングルと化してる世界だ。

だが今も、その爪跡が多く残っている場所だ。

そしてここは、ＡＡ＋以上の猛獣がウジャウジャいるため、本来なら僕らのような子供は来ないが、管理局は万年人手不足だから、仕方なく僕らが行った。

当時、僕は執務官に成り立て。ライナはその補佐だった。
他にも二十人ぐらいの隊員もいたけどな。僕はそれらを纏めるリーダーだった。
未熟ながらも執務官だったからな。階級が一番上と言うことで。

「この奥の遺跡に、ロストロギアがあるという情報が有力だ。迅速に回収しよう」

『ハッ！！』

執務官として、初めての任務だったから気合が入ってたんだろうな。

「お～～い・・・クロノ」

「何だ、ライナ」

「もうちょい様子見ない？」

「何故だ」

「いや・・・何が起こるかわからないし、急がなくてもいいかなって」

「ここの指揮官は僕だ。それは僕が決める」

「あ、そう」

思えば、このときのライナの忠告を聞けばよかったと今でも思う。

「遺跡の入口だ」

僕らは遺跡の入口から突入していった。

中は失われた文明の壁画が書かれていた。まあ、ありきたりな遺跡だった。

進んで行く内に広い部屋にたどり着いて、その部屋の真ん中にロストロギアが置かれていた。

そのロストロギアは、まあ古代文明の遺物である石版だ。

「よし。回収するぞ」

「お、おい。発見したんなら、一度帰って装備を整えるべきだろ」

そのときの僕らは、あるかわからないロストロギアのために、金は割けなかったから最低限の装備しか持たされなかった。

だが、あるとなれば話は別だ。多少装備を整えてから行くべきだろう。

「ここまで何も無かった。戻るのも時間の無駄だ」

だが・・・僕はホントに愚を犯した。気持ちが焦ってたのかもしれない。

そして僕はロストロギアを持ち上げた。

そのときに、いきなり外された台座が床に沈み、遺跡が揺れたんだ。

「なんだ！？」

「どうなってるんだ！」

「あっ！入口が！！」

そのゆれで入口が崩れて閉じ込められてしまった。

「ジェットバズーカ！」

しかしライナの砲撃で天井に穴をあけて、そこから全員脱出した。

そして脱出した後、遺跡を見ると遺跡が変形して、ゴーレムのようなものになったんだ。

――――――――ゴオォォォォォオオ！！

そのゴーレムが咆哮を上げて、その口から極太のビームが発射された。

「グアアアアッ！！」

「ゴハァ！！」

その攻撃を回避できたのは、僕とライナだけで他の隊員は直撃を食らった。

「くそっ！」

「おい！クロノ！！」

僕は頭に血が上って、一人でゴーレムに突っ込んでいった。

「くらえ！！化け物！！」

僕は全力の砲撃を打ったが、ゴーレムの片手で難なく弾かれた。

そしてその片手が、僕を押しつぶそうと迫ってくる。

（早すぎる！！）

しかし僕の前を一つの影が通り過ぎた。

「ぐぅ！！」

「ライナ！？」

ライナが、障壁を張りながら僕を守る。

だがゴーレムの攻撃は生易しいものではなく、どんどん押されていく。

「よせ！！お前だけでも逃げるんだ！！」

「うるさい逆！！突っ立ってないでさっさと逃げる！！」

ピシピシと障壁にヒビが入り、支給品の杖にもヒビが入る。

「ライナ！！」

「だからさっさと逃げ・・・・！」

「しかし！！」

「お前は執務官なんだぞ！！現場に私情を挟むなよ！！」

「！！ッ」

「お前が生き残るんだ！それもってさっさと行け！！」

「・・・・・必ず増援を呼んでくる！くたばるなよ！！」

「ハッ、上等だよ！！」

そして僕は一度その場を離脱した。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「そして増援を呼び、戻ってるころにゴーレムは破壊されていた。
幸い最初の攻撃を食らった局員は命に別状は無かった。
だがライナは、そこから５００ｍ離れたクレーターの場所で、全身の骨を折られ、片目はつぶれて、腕や足は曲がってはいけない方向に曲がって、血だらけの状態で発見された。
その周りには、粉々に砕けた杖の残骸があった。
なんとも・・・見たものをトラウマにさせるような光景だったな」

「そんなことが・・・・・・・」

「結果的には成功したが、僕はあのときの責任を感じて、一人部屋に篭ってしまったんだ。
”僕は執務官にはふさわしくない、友達を傷つけることしか出来なかった”ってな」

「・・・・・・・・・・・・・」

「で、食事もロクに取らないし、クルーが心配して部屋に来ても、冷たく追い返すだけだった」

「・・・・・・・・・・」

「そんなある日、ライナが部屋に来たんだ」

X
XX
XXX
XXXX
XXXXX
XXXXXX
XXXXXXX
XXXXXXXX
XXXXXXXXX
XXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXX

『クロノ。いるんだろう?』

「・・・・・・・帰ってくれ。自分を傷つけた相手なんて見たくないだろ」

『だったらわざわざ大怪我してるのに来たりしないよ』

「・・・・・・・じゃあなんだ」

『さっさと部屋から出ろよ。僕の真似事かい？』

「君と一緒にするな」

『じゃあさっさと出ろ。みんなも心配してるぞ』

「・・・・・・今は一人がいいんだ」

『今ねぇ・・・・いつになったらその今ってのは終わるんだ？』

「・・・・・・・・・僕が執務官なんて無理なんだ」

『一度くらいの失敗で心折れんなよ。誰でも失敗ぐらいするさ』

「だが・・・・その失敗でお前を・・・・！」

『僕は死なないって。現に僕はこうして生きてる』

「だがそれは結果論だ！一歩間違えれば・・・・」

『いつまで終わったこと引きずってんだ。”そうだったら”なんて言い出したらキリ無いぞ』

「だが！！」

『たく・・・・くだらないことでウジウジすんな。今、僕は貴重な時間を割いて励ましてるんだぞ。
元気なヤツが怪我人に気を使わせんな』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『何のために僕がお前の代わりに残ったと思ってるんだ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『まったく・・・こんなことになるんだったら残らなきゃ良かった』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『じゃあ――――――――』

『あ!!見つけたよライナ君!!』

『げ!!看護婦の姉さん!!』

『さっさとベットに戻って!!まだ起き上がるだけで精一杯でしょ!!』

『だ、大丈夫ですって!!』

『いいえ!!私は貴方を連れて行く義務があります』

『ちょっ!!首掴まないで――――――――――グエェェエエ!!』

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「まあその言葉が心に響いて、僕は執務官を続けることにしたんだ」

「ハハハ・・・・・・・・・・・」

「フェイト。過去をいつまでも引きずるな。どんなに悔やんでも過去は過去だ。やり直しは聞かない」

「うん・・・・・」

「それと・・・自分の存在を人に求めるな。自分の存在を決めるのは自分だ」

「・・・・・・・・・・・・」

「だから僕は、未熟ながらも執務官としてやってこれた」

「・・・・・・・・・・・・」

「まあ強情かもしれないがな」

そして僕は席を立つ。

「提督も暇じゃないからな。そろそろ失礼するよ」

「クロノ」

「ん？」

「・・・・・・・ありがとう」

「気にするな。これは大体アイツの請負だ」

まったく・・・励ますなら僕を呼ばないで、自分でやればいいのに。

不器用なところはいつまでも治らないな。

僕は最後に戦うライナをチラッと見た。

そこには、なのはの砲撃をかわしながら、苦しい表情をしているライナがいた。

（遠慮なく行かせてもらうと言った割に、手加減してるじゃないか・・・ライナ）

そしてその場を去った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ディバインバスター！」

「ファグーン！ガード！」

僕は今、なのはさんと戦闘を繰り広げている。

状況は僕がわずかに不利。砲撃はアチラが上で、いずれ押し切られる。

だけどアチラは遠距離砲撃で近寄らせてくれない。

「魔光一閃！」

僕の放つ斬撃はなのはさんの砲撃と同レベル。だからすぐに相殺される。

（アレ使ってもいいんだけど・・・・・）

「戦闘中に考え事？」

「戦闘中に話しかけますか？」

「ライナ君手加減してるでしょ」

「それはお互い様だと思いますよ」

後遺症でまだ本気が出せないのは知ってますけどね。

「ブラスター１！リリース！」

「ええっ！？」

いきなりリミッターを解除してきた！！

「ディバインバスター！！」

「クッ！ジェットバズーカ！！」

僕も砲撃を撃つが、あちらのほうが威力は高いらしく押し切られた。

「グハッ！」

そして５メートルぐらい吹っ飛ばされた。

「ライナ君。本気出す気になった？」

そして倒れてる僕を、飛びながら見下しているなのはさん。

その姿はまさに――――――――

「くそ・・・さすが白い悪――――――グハッ！！」

ちょっと愚痴ろうとしたら、誘導弾を１０発ぐらい叩き込まれた。

『（主。もう使っていいんじゃないでしょうか）』

（・・・・・・そうだね。本気を出して欲しいみたいだし）

「わかりましたよ。本気を出します」

そして一度空を仰ぐ。そして出来れば使いたくは無い力を使う。

「未来より伝わりし星の陽よ。希望を見て絶望を知れ。

過去から続く人々の陰よ。悪を弾圧して正義を祭り上げろ。

幸せの許されない世界。その瞳に未来の光は見えず。

偽りしか信じれない心。されど道が折れはしない。

守ることの出来ない力。それがお前の進む道。

過去を忘れ、今を信じられず、未来の見えない牢獄。

汝は、何を見て、何を望み、何を信じる?」

「な、なにを・・・・?」

「遅い。『深淵の幻影世界(ダークネス・ファントムワールド)』起動」

この言葉と共に、僕となのはさんを黒炎が囲む。

「これが、貴方の望んだ僕の本気・・・・の一部」

その黒炎は大きく広がり、訓練場を包むほどになった。

「後悔しないで下さいよ」

いつかのビルの戦いのように、黒炎が空を覆い、外との干渉が絶たれた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

――――――異質。

この空間を表す言葉は、これ以外には存在しないだろう。

空は、黒炎が覆ったというのに、血のような赤い空。

地は拳銃やら剣やらが地面に刺さっており、それには例外なく血痕が付いている。

所々に砲撃されたような大きなクレーターがある。

そして所々には血の水溜りが出来ている。何処かの戦場を思わせる景色だった。

だが一つ、この空間には景色よりおかしいことがある。

これだけの血や武器があるというのに、人がいないのだ。

大規模で戦ったような形跡もある。

というか、ついさっきまで戦っていた感じだというのに、人の一部分さえ見えない。

いるのは、なのはとライナだけ。

なのははこの空間を見て固まっていた。ライナはそんなのお構いなく話す。

「ここが何なのか分かって無いみたいな顔ですね」

「・・・・・・・・・・何をしたの？」

「簡単に言うと、これは忘れられた過去の映像ですね」

「過去・・・・？」

「ええ。そしてこの空間は、僕の幻覚でもある」

「・・・・レイジングハート、ホント？」

なのははデバイスに意見を求めた。だがデバイスは何も喋らない。

「レイジングハート？」

「ああ無駄ですよ。僕たち以外はこの場所に干渉できない。たとえＡＩでもね」

ライナはファグーンを最初の形に戻す。

「さて。仕切りなおしと行きましょう」

「・・・・・・・・・」

ライナはガンソードを構え、なのはは杖を構える。

「ショットバレル」

先に攻撃を仕掛けたのはライナ。ソルから砲撃が飛ぶ。

「アクセルシューター！」

すかさずなのはは打ち落とす。そしてライナは一気に接近してくる。

なのはは魔力弾を展開して向い打つ。

「魔力結合解除」

しかしライナの言葉で、なのはの魔力弾は消え去る。

「え！？グッ！」

その現象に驚いた隙に、ライナはライトの方で撃ち抜く。

なのははよろめくが、魔力弾を撃ちながら体勢を立て直す。

ライナはバックステップで避けて距離をとる。

両者は距離をとって様子を見る。

なのはは先ほどの現象について、思考をめぐらせていた。

（さっき魔力弾を消えたのは・・・多分この空間のせい。でも原理が分からないと対策なんて・・・）

「ファグーン行け」

ライナのファグーンが、肩から分離してなのはの方へ向かう。

「ディバインバスター！」

なのはは砲撃を撃つが、それも当たる直前で消える。

そしてライナは、ファグーンによるオールレンジ攻撃を仕掛ける。

なのはは障壁を張って防ぎながらも考える。

（障壁が張れるし、さっきのとっさに撃った魔力弾も消されなかった。発動には条件が必要なんだね。けど私の攻撃は消されちゃう・・・・・これは・・・・・あ！）

なのはは何かを思いついたらしく、ファグーンに魔力弾を放つ。

その色は、ピンクではなかった。

「解除」

ライナの言葉で消される。しかし・・・・・。

ドゴォン！

なのはの魔力弾は消えずにファグーンに直撃した。

「！？」

「チッ」

ライナは舌打ちして、魔力弾を撃つ。

なのはは障壁を張って、防ぎながらの砲撃を放つ。

ライナはそれを消そうとはせず、サイドステップで避けた。

「バレましたか」

「うん。この空間の秘密に気付いてね」

なのはの導き出した答えは単純。

なのはの撃っていた魔力弾はライナの魔力弾だったのだ。自分の魔力なら消すことなんて簡単。

ライナはそれをなのはが撃ってるように錯覚させた。

しかし障壁やとっさの攻撃には反応できなかったから、なのはの魔力は消えずにすんだ。

そしてこの空間の秘密は――――――――――。

「自分の魔力と相手の魔力を入れ替えることが出来る。でしょ？」

「正解です」

そう、この空間は相手と自分の魔力を入れ替えることが出来る。

だからなのはが発動する魔力の色は銀色。そしてライナの発動する魔力の色はピンクになってる。

だからライナはなのはが攻撃するたびに、同レベルの魔法を使っていた。

なのはが出す魔力は銀、しかしそれを知らないなのはは、ライナが出したと思いコントロールしないで、
ライナの出したピンク色の方に意識を向ける。

そして思ったとおりに動くので、自分が操作してると思う。そしてなのは消えることに驚く。

実際はライナが魔力を操作して消していた。自分の魔力だから。

ちなみにファグーンを撃ってたのは、なのはが魔力弾を撃つ場合のカモフラージュとして。

なのはは、この赤い空間で気付きにくかったが、障壁の色が違うこ

とに気付き、一連のことにも気付いた。

「これの弱点は、相手がそれに気付いた瞬間、効力が切れるという点なんですよ」

だからライナはさっきの砲撃を消さなかった。いや消せなかった。

「しかし、こんなに早くにバレるとは思ってませんでした」

ピシピシと赤い空に亀裂が走る。

「もうこの空間に意味は無いですから」

バリィィン！

空間が壊れて、もとの訓練場に戻る。

ギャラリーはワァアアア！！と盛り上がっている。

「僕の負けです」

ライナは武器を捨てる。

「え・・・？」

なのはは杖を構えながら、呆然としている。

「あれが破られた瞬間、僕の負けは決まってました」

「で、でも・・・・・」

「僕の負けですよ。悔しいですけどね」

そう言って、ジャケットを解除してこの場を立ち去るライナ。

「ちゃんとフェイトさんとは話しますから」

そう言い残して。なのはは呆然と立ち尽くしたままだった。

戦いってキツイ（後書き）

ＤＦＷ・・・うまく説明できた気がしません。

疑問に思うところがありましたら、気軽に言ってください。

楽しい音で音楽とは言わないよ？コレホント（前書き）

タイトルと本編はあまり関係ないです。

楽しい音で音楽とは言わないよ?コレホント

「ゴホッ!ゴホッ!ゴホッ!」

僕は今、自室で血を吐いてます。あ、ジョークじゃないから。まあ咽る程度だけど。

「・・・・・・無理しすぎたかな」

『主・・・・なぜ力をセーブしたんですか?』

「・・・・・・別に。深い理由は無いよ」

『嘘です!無理に力を制限するから、身体に負担がかかっているというのに・・・・・・!!』

「・・・本気を出したら殺しちゃうだろ?」

『それは・・・・・・そうですが』

「大丈夫さ。僕は寿命意外では死ねない」

『不死ではないでしょう』

「そうだけど。身体は他の人より丈夫だよ」

『そういう問題でも・・・・・』

「気にしたら負けさ。この後、僕はフェイトさんに会わなきゃいけないな」

『・・・・勝とうが負けようが、そのつもりでしょうに』

「そう。だからわざと負けたし」

『本気を出さなかっただけでしょう』

「同じことさ。さて、クロノが励ましてくれたこと祈るかな」

『・・・・・・・・言うんですか？』

「まさか。僕は自分を偽ってるんだよ？」

『・・・・・・・・そうですね』

「わかればよろしい。それじゃあ置いてくよ」

僕は机の上にベルカ、ソル、を置く。ルクスはスリープにして持って行く。

なぜって？さっき”スリープでいいので連れてって下さい！！”と言われたので。

「じゃ」

そして僕は部屋を出る。

・・・・・・・・最近、ベルカとソルの出番の少なさを考えながら・

・・・・。

X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

「・・・・・・迷った・・・・・・」

一ヶ月ぐらい局にいたというのに、道に迷った。

「よく考えたら、僕ってあまり自室から出てなかった・・・・・・」

前は迷わず、フェイトさんの部屋に行けたのにな～～。

「仕方ない・・・今のうちに言葉でも考えておくか」

僕は近くにある自動販売機で、炭酸飲料を買って、そこらのイスに腰を下ろした。

「さて・・・・・カンペでも」

僕はポケットからメモ用紙を取り出し、原稿を書く。

「『先ほどはスミマセンでした・・・・・僕がすべて悪かったです』・・・・・・・・微妙だ」

クシャっと紙を潰して次の案。

「『すべての責任は僕にあります・・・・だから結婚してください』・・・・・なぜ口説く」

明らかに話が飛躍しすぎてるからボツ。

「『貴方は悪くない・・・貴方を陥れたあのシスコン提督が悪いんです』・・・意外と説得力あるな」

しかし、こんなこと言う気にはなれないのでボツ。

「あ～～あ・・・いい案が思い浮かばない・・・・・」

メモ用紙を放り投げて、天井を見上げる僕。

「そもそも！僕が何故こんな事しなきゃならん」

今更ながら、自分が何故こんなことしてるか分からなかった。

「どうすりゃいいかな～～・・・・・」

炭酸飲料を飲みながら考える僕。

「ああ～～、後先考えずにやるのは辛い～～」

実は・・・・・・・気付いてる方も多いでしょうが、僕はノープランです。

「・・・・・・・・誰？」

「ハハハッ♪初めましてぇ～～じゃないよね？」

何か知らないが、僕の隣に変わった口調の金髪美少女が座ってきた。

服装は管理局の制服。

「制服がここまで似合わない人、初めて見ました」

「あっ、ひっど～～い。私気に入ってるのに～～」

「知らないです」

「ま、いいけどね～～。それよりさ！ちょっと遊ばない？」

「それを異性間でやったら誤解を生みますよ」

「やだ～～そんな意味じゃないよ?文字通り遊んで欲しいの。複写眼持ち?」

「!?」

僕は何時の間にか立ち上がっていた。

そして警戒心をさらに出しで、この終始笑顔の金髪美少女を睨む。

「・・・・・誰ですか。アンタは」

「くふふ～～♪誰でもいいよ?ご想像でね」

「・・・・管理局員じゃないですね」

「最初から気付いてたくせに～～」

笑いながら僕の言葉を肯定する。

この人は、管理局員で義務付けられている名札の着用をしてないし、司法組織にはあるまじき髪型だし、なにより言動が・・・・・ね。

「さすがだね。複写眼さんは洞察力もいいのかな?キャハ♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

何だこの人。電波さんか?変な電波でも受信されてるのか。

「・・・・・・何のようですか」

「んー？忠告♪」

「・・・・・・？」

「今から十二時間後に、ミッドチルダのどこかにある水素爆弾が爆発します♪」

「・・・・・・・・・は？」

一瞬何を言われたか分からなかった。

「威力はちょうどミットチルダを消し飛ばすぐらい♪」

「じょ、冗談ですよね・・・・・・？」

「フフフッ♪冗談じゃないよ？まあ別にやらなくてもいいけど」

「・・・・・・・何が望ですか」

「だから言ったじゃん。私は遊んで欲しいの♪」

「・・・いいでしょう。やってあげますよ」

正直引き受けるべきではないと思ったが・・・この美少女の言葉は嘘とは感じられなかった。

「それでこそだよ♪場所のヒントは過去の亡霊。それじゃあ頑張ってね♪あっちゃんと一人で解くんだよ?じゃないと・・・・どうなっちゃうかな?キャハ♪」

そして少女がピカッって光ると同時に消える。

「・・・・・・つくづくこの不幸を呪うさ」

僕は愚痴りながらこの場を去った。

洒落になってない

僕は制服を捨てて、私服に着替て走りながら外に出た。

「ルクス。今から僕の言うことは他言無用」

『どうかしました？フェイトさんにも会わず』

「この街のどこかに爆弾が仕掛けられたらしい」

『えっ！？』

「美少女から喧嘩売られてね。今から一人で探しに行く」

『・・・・・・わかりました。装備は整えなくて？』

「時間が惜しい。あと、ベルカたちは少し眠ってて貰う」

僕は電車に乗り、ある場所へ向う。

『主。見当はついてるんですか？』

「まあね。キーワードは過去の亡霊。これが当てはまるのはそんなに多くない」

『・・・・・・ゆりかごですか？』

「その通り。今は大穴のあるただの土地だけど、当てはまってると

思うんだ」

『確かに・・・・・そうかもしれません』

「まあ、その前に別の場所に行くけど」

僕らはそんな会話をしながら向っていた。

このとき・・・・・・僕は気付いていなかった。

後ろにサングラスで変装した、金髪執務官と魔王教導官が後をつけていると言うことに・・・。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

時は少し巻き戻る。

フェイトは仲直りしようと、自分なりの答えをライナに伝えようと心に決めた。

「・・・・・・ライナってどこにいるんだろ」

先ほど自室に行ったが、留守だったので局をグルグルと回っている。

「もしかして・・・・・避けられてるのかな・・・・・・・・」

フェイトは、持ち前のネガティブ思考を発動させている。

「はぁ・・・・・・・」

ズズーンっと暗いオーラを放ちながらも、ライナを探すフェイト。

『・・・なぜこんな事をしなきゃならん』

「！！」

フェイトはその声で立ち止まり振り返る。

そして来た道を逆走すると、ライナが自動販売機の横で何かをしていた。

「ライ――――――――ッ！？」

フェイトは呼ぼうとした瞬間、声を詰まらせた。

ライナの隣に、知らない女性がいたのだ。

フェイトは咄嗟に隠れて、扉の影からそれを見ていた。

何か話してるらしいが、この距離では聞こえない。

（・・・・・なんか親しそう・・・・・どういう関係なんだろう・・・・・）

なんて感情を抱いていた。

そして金髪の女性が消えたと思ったら、ライナはいきなり走り出した。

（え！？）

フェイトは急いで、しかし気付かれない程度で追った。

ライナの向ったのは自室。

フェイトは廊下の突き当たりに身を隠して、ライナの出てくるのを待った。

（・・・・・私何してるんだろ・・・・・ライナと話さなくちゃいけないのに・・・）

自分の行動に今更ながら疑問に思い、ライナの部屋の前まで行こうとすると、

「！？」

バシュ！

といきなり扉が開いたので、フェイトは再び身を隠した。

そしてすぐ隠れたことを後悔した。

（バカバカ！何で隠れちゃうの！私のバカ！）

そして、扉からダッシュして出てきたライナに視線を向ける。

中から出てきたライナは、この前買った私服でどこか出かける格好。

（どこ行くのかな・・・・ハッ！もしかしてさっきの子とデート！？）

なぜか知らないけど、フェイトは居ても立ってもいられなくなった。

そして自室に戻ろうと、足を進めていた時、

「「キャ！！」」

誰かとぶつかりそうになり、咄嗟に避けて尻餅をついてしまった。

「ご、ごめんなさい・・・急いでたので・・・・」

「あ、私こそ・・・・前をよく見てなくて・・・・」

そして起き上がろうと、お互いにぶつかりそうになった相手を見る。

「な、なのは・・・・・・？」

「フェ、フェイトちゃん・・・・・・？」

立ち上がり、少しの間の沈黙・・・・・・。

「ど、どうしたの・・・？フェイトちゃん」

「わ、私は・・・・ライナと話をしようと・・・・・・」

「え？フェイトちゃんも？」

「？　もしかしてなのはも？」

「うん。さっきの模擬戦で・・・・ちょっとね」

なのはは、あの幻覚が見せた映像について少し気になっていた。

（もしかして・・・あれがクロノ君の言ってた”人々の罪”って言うのなのかな・・・）

「そうなんだ・・・・私は私なりの答えを話そうと・・・・・」

「そっか。じゃあ一緒に行こう？」

「うん。――――――って、ライナさっき何処かへ出掛けたんだった」

「そうなの？じゃあ帰ってくるまで待とうよ」

「そ、そうなんだけど・・・・・その・・・・・」

「？　どうかしたの？」

歯切れの悪いフェイトが気になって、なのはは顔を近づける。

「実は・・・・さっきライナが、女性と話してたんだ」

「？」

「その話は聞けなかったんだけど、そのあと急いでライナが外に出たんだ」

「えっと・・・・？」

「・・・・・・・デ、デートかな？って思って・・・・・・・・」

顔を赤くしながらそんな事を言うフェイト。

実際はミッドの命運が懸かっているのだが。

それを聞いて、なのはは一つため息をついて言った。

「つまりフェイトちゃんはそれが気になるから、ライナ君の後を追いたいってことだね」

「べ、別に気になってなんか・・・・・・」

「なんか？」

顔を赤くしてそっぽ向くフェイト。そこに追い討ちをかけるなのは。

「・・・・・・・・まあ、ちょっとだけ・・・・・・」

「正直じゃないね～～」

と言いながらフェイトの手を引くなのは。

「じゃあフェイトちゃんのご要望もあるから、ちょっと後を付けてみようかな」

「あ、あくまで上司としてであって、決してライナの彼女が気になってるわけじゃ――――――――」

「はいはい。わかってるよ～～」

そうしてこの美少女ストーカーペアが誕生したのだった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ついたついた」

僕が来たのは陣野剣道場。

「あ、兄さん」

「やや〜〜。紅」

インターホンを押すと、紅が出てきた。

「今大丈夫かな？」

「はい。ちょうど子供達に剣道を教えてたところです」

「ちょっと見学してもいい？」

「いいですよ」

そして紅と一緒に剣道場へ向う。

「今は理利と由姫（ゆき）も教えてます」

「あれ。帰ってたの？前いなかったけど」

「はい。修行も終わったらしいので」

「・・・・・・もうちょっと遅くてもよかったのに・・・・・」

少し行く気が失せた。

「兄さんは昔から由姫が苦手でしたからね」

「あの熱血は無理」

そうして会話して行く内に、剣道場についた。

中から”えいっ！やあっ！ボキッ！グハッ！”なんて音が聞こえる。

・・・・・・・・ボキッ！って音は気にしないで置こう。

「理利、由姫。兄さんが来た」

紅が道場の中に入って行く。

僕もその後に続いて入る。

「久し――――――」

「兄～～貴～～！！」

いきなり木刀持った黒髪美少女が僕の目の前に飛びかかる。

普通なら喜びそうな描写だが、相手が相手なので喜べない。

「甘いよ」

てなわけで、僕は横に移動して背中を押す。

「みぎゃ！」

変な声を出して倒れる美少女。

「いきなりこれは無いんじゃないかな。由姫」

「うるせぇ！１０年間何も連絡してこなかったくせに！！」

「こちらにも都合ってものがあるんだけど」

「うっさい！！」

すぐに木刀で切りかかってくるが、取り上げる。

「没収」

「あ！かえせ！！」

「由姫・・・・。言葉遣い直そうか。一応女の子なんだから」

「余計なお世話だ！それと一応も余計だ！！」

あ～～あ・・・黙ってれば大和撫子って感じなのに・・・・・・もったいない。

「由姫ちゃん。気持ちは分かるけどダメだって」

理利が汗を拭きながらこちらに来る。

「チッ」

なぜ舌打ちされるのかわからない。

「師範は？」

「自室にいると思うよ」

「わかった。じゃあね」

由姫が怖いので剣道見学は断念。本来の用事に戻った。

後ろからガーガー言ってるが無視。

「失礼します」

「おう。ってお前か。何だ？」

「ちょっと座りますね」

僕は部屋の中のイスに座った。陣野さん・・・・陣野辰一（じんのたついち）さんは向かいで座った。

「真剣な用です」

「そうか。まあ、お前がここに来るときは大体そうだな」

「実は、僕は今から１２時間後には死んでるかもしれない」

「・・・・・・・・・・・・・」

「ですから今のうちに、これを」

僕はポケットから、ソル、ライト、そしてベルカを出す。

「・・・・デバイスか」

「ええ。ユニゾンデバイスは・・・事故が起こらないように調整しました」

「これをどうすればいいんだ?」

「必要になるときに、託してくれればいいです。まあ遺言とでも思ってくれればそれで」

「・・・・・・・・わかった」

「ありがとうございます。それでは」

僕は席を立ち、扉に手をかける。

「一つだけ聞きたい。お前は”また”死ぬ気なのか?」

それは答えるべきかな。

「死ぬ気はありません。自分の正義の赴くままに進むだけです」

「そうか・・・・・なら行け」

「ええ。元からそのつもりです」

僕は部屋から出た。

「最後の・・・・・・・・・仕事かな。多分」

そして僕は屋敷から出て、駅に乗った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

一方なのはたちは・・・・。

「田舎だね」

「そうだね。ライナ君どこ行っちゃったんだろ」

街の中を彷徨っていた。

「諦めて帰る？」

「う～～ん・・・・私はもう少し探す」

「じゃあ私も」

「なのはは帰ってもいいよ？私一人でも」

「気にしな――――――――あ！ライナ君だ」

「え！？どこどこ！？」

なのはが指差した方向には、走りながら駅に向うライナがいた。

「どうしたんだろ？」

「とにかく追おうよ」

なのはとフェイトは走り去るライナの後を追う。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ついた・・・・・・」

『ここですか』

駅を降りて、山の前まで来て、道なき道を進み、やっと辿り着いた。

「ゆりかごの・・・・元入口」

『生体反応等はありません』

「・・・・・・どうするかな」

『トラップらしきものも特には』

「そう・・・・・・・・さてと。行きますか」

僕は入口に足を踏み入れた。

「・・・・・・・暗い・・・・・・」

『仕方ないかと』

入ったはいいけど、明かりも特に無く石がそこらに散乱していて、

さっきそれを踏んでコケた。

「長い道・・・・嫌がらせ？」

『まさか。主の被害妄想ですよ――――――っとそろそろ広い場所に着きます』

「うん。見えてるけど」

そして光の差し込む出口を潜る。

「おおぉ・・・・・中々いい眺め」

『そうですね』

広い場所は天井にぽっかり穴が開き、そこから見える空がなんともキレイ。

「さて。こんな悠長な事はしてられないな」

『私の索敵では爆発物らしきものは特に』

「一応自分の目で確かめてみるよ」

そしてそこらへんの、ガレキやら何やらを退かして爆弾を探す。

「地味な作業だ・・・・・・」

『主にはお似合いです』

「うるさい。僕は地味じゃない！」

『さあ？どうでしょう』

「クソッ！――――――――――って何だこれ」

ガレキを退かしていくと、宝箱があった。

何か、大してドラゴンが重要じゃないクエストで出てきそうな宝箱が。

「あ、あざとい・・・・・」

『明らかに罠ですね』

「狙うにしても限度があるだろうに」

『これ、どうします？』

「ルクス。爆発物じゃないんでしょ？」

『はい。見たところ普通の箱です』

「じゃあオープンしよ」

『どうなってもしりませんよ』

「はいはい・・・。オープン・ザ・ボックス！！」

勢いよく開けてみると中には、よく分からない変な形状の水晶と書

置き。

とりあえず朗読。

「なになに・・・・『背景、勘違い野郎様。
おそらくバカな貴方なら、ここに来ると思うのでこれを置きました。
ここことは全く違う場所なので、もう一度バカな脳みそを限界まで回転させて自爆してください。
何も入ってない脳みそでは、限界もすぐ来てしまうでしょうが、がんばってください。
あ、あと一緒に入ってるの水晶は、不正解者へのペナルティですので。
それでは、失礼させて貰います。バカバカ複写眼。ＧＯ　ＴＯ　ＨＥＬＬ』・・・・・・・・」

『ププッ・・・・・・』

「ルクス。なぜ笑ってるんだ？」

『いえ・・・・別に・・・・・・ククッ』

そして書置きをビリビリ破る。

「犯人め！アンタを！地獄に！落として！やる！」

と『！』一回につきビリビリ破く。

「そういえばペナルティって何だろ」

『十中八九、その水晶でしょうけど』

「触らない方がいいよね？」

『ですね。ここじゃないならいる意味も無いですし、次の場所に行きましょう』

ルクスの言う通り、僕は出口に戻ろうとする。

「次どこかな？」

『過去の亡霊・・・ですよね』

「どういう意味か分かればな～～」

『そうで――――――――！！転移魔法反応！』

「ええっ！？」

僕が後ろを振り向くと、さっきの水晶が浮かんでそれが光り、次の瞬間一人の人物が出てきた。

「・・・・・・成功」

「誰？」

「・・・・・・・・・」

無言でこちらを向く女性。

そいつは黒装束に身を包んでいて、背中に超目立つ黒い鎌を持って

いる。

長い黒髪でクールっぽい女性。歳は僕と同じくらい・・・・・・かな？

フェイトさんとクロノを足して二で割ればいいと思う。

「・・・・・・複写眼所持者・・・・・・殺す」

「！？」

いきなり鎌で切りかかってきた！！

僕は前方に飛んでかわす。

ズバアァァァン！

鎌が空を切り、その斬撃が後ろの壁を引き裂く。

「・・・・・・殺す気？」

「・・・・・・・・・・・・」

僕の言葉に何の反応も示さない黒ずくめの女性。

（ペナルティか・・・・なんだか知らないけど、戦わなきゃヤバそうだ。とりあえず・・・・・・）

「未来より伝わりし星の陽よ。希望を見て絶望を知れ。
過去から続く人々の陰よ。悪を弾圧して正義を祭り上げろ。
幸せの許されない世界。その瞳に未来の光は見えず。
偽りしか信じれない心。されど道が折れはしない。
守ることの出来ない力。それがお前の進む道。
過去を忘れ、今を信じられず、未来の見えない牢獄。
汝は、何を見て、何を望み、何を信じる？『深淵の幻影世界（ダークネス・ファントムワールド）』起動」

とりあえず起動しておく。騒ぎになっても困るし。

「ルクス、ファグーン。セットアップ」

僕も戦闘体勢になり、殺気の込めた目で相手を見据える。

「・・・・・ヴォンゲイト。セットアップ」

相手の格好も変わる。

鎌が二つになって、黒装束に赤いラインが加わって行き、髪の毛を赤い紐で束ねる。

「さあ！派手なパーティにしましょうか！！」

「・・・・・・・・・・殲滅・・・・・」

お互いの武器を構える。

「豪魔光螺閃！」

「ヤミノジュウジ・・・・・・・」

黒と銀の斬撃がぶつかると共に、戦闘の幕がきって落とされた。

洒落になってない（後書き）

う～～ん・・・・違和感がありまくりだぁ～～・・・・・・すいません。

誤字脱字、感想があったら下さい。

これは呪われた眼・・・されど・・・・・

「ハッ！！」

「・・・・・・・・・・・・・」

僕はいきなり出てきた黒髪の美少女と、かれこれ二十分戦っている。

僕のＤＦＷ（ダークネス・ファントムワールド）の魔力交換は速攻でバレたため、今はただ互いに武器をぶつけ合っている。

「しつこい女性は嫌われるよ！！」

「殺す・・・・・」

お相手さんは、さっきから〝殺す〟とか〝抹殺する〟とか物騒なことばかりしか喋らない。

見た目いいのに・・・もったいない。

「ヤミノジュウジ・・・・・・」

「うおっ！」

アチラの斬撃をよけながら僕はこれからの事を考えていた。

（さてと・・・この空間内では外の時間は進まないが・・・いつまでも戦うのは疲れた）

スゴイ悩んだ末、あの力を使うことにした。

「仕方ない・・・・貴方は僕の力を知ってるらしいので、使わせてもらいますね」

そして僕は一度、眼を瞑る。

「複写眼（アルファ・スティグマ）・・・発動」

次に眼をあけた時、僕の両目の中には、朱の五芒星が現れていた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

一方そのころ、なのはとフェイトは・・・・・・。

「ん～～♪おいしい～～♪」

「な、なのはぁ～～・・・・・・」

スイーツ店でケーキやらパフェやらを食べまくっていた。

正確にはなのはが食べまくっていて、フェイトは涙目でそれを見つめていた。

「なのは、そろそろ・・・・・・」

「ん～～、もうちょっと♪」

「はぁ・・・・・・それ8回目・・・・・・」

フェイトの静止もなのはは上の空でパフェを食べる。

どうしてこうなったか・・・・・・。

なのは、フェイトはライナを追い、ミッドの駅を降りる↓なのはは新築のスイーツ店を発見↓なのはとフェイトが誘惑に負けて入る↓なのはが目的を忘れてパフェを食いまくる。

そして今に至る。

「なのは～～・・・ライナ見失っちゃったよ」

「じゃあ局で待てばいいよ。う～～ん、おいし♪」

「もう・・・私先に行ってるよ」

「わかった～～♪」

ニコニコ顔でパフェを食べてるなのはを、フェイトはほっといて一人ライナの捜索に向かう。

とはいえ・・・・・・・。

「どこにいるんだろう・・・・・・」

15分以上店にいたから、ライナの足取りなんて分かるはずもない。

「・・・・・・・どうしよ」

とりあえず、フェイトはテキトーに歩き始めた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「がはっ・・・・・・・・・・」

「この程度か」

場所は変わり、ライナの戦闘。

しかしすでに戦闘は、ライナの勝利で幕を閉じていた。

相手の女性は口から血を流して、地面に仰向けで倒れている。傍には粉々に砕けた二つの鎌。

ライナはその倒れている女性の腹を踏みつけて、大剣と周りに浮いてるファグーンを構えている。

「誰からの命令？言わなければ腕を一本ずつ切り落とす」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

女性は答えない。ただその無感情な両目で、ライナを見つめているだけ。

「・・・・・・・死を選択したいならそれでもいい」

そしてライナは、大剣を振りかぶる。

「・・・――――――・・・・・・」

しかしその瞬間、女性は何かを口走った。声は小さすぎてライナには聞こえていなかったが。

「何を言った？」

「・・・・・こ、殺さ、ないで・・・・・・・・」

その少女は、小さいながらもハッキリと言葉を紡いだ。

その両目は先ほどの無感情な瞳ではなく、死への恐れ・・・そしてライナへの恐怖で染まっていた。

「・・・・・殺す訳ないよ」

ライナは大剣を一度下ろす。そしてパチンッと指を鳴らす。

次の瞬間、バリィィィンとこの空間が砕けて、元のゆりかご跡地に戻った。

「・・・・・・え・・・・・・？」

そして女性は何時の間にか、ライナにお姫様抱っこされていた。

「お目覚めかな？」

「・・・・・・・・は、離して・・・・・・・・！」

そして女性は手でライナを押しのけると、その場に立ちそして固まった。

身体に違和感を――――――――――いや、違和感を感じないのが問題なのだ。

「・・・・・・え・・・・・・？」

女性は身体をさするっているが、間違いではない。

ライナとの戦闘の傷がなくなっている。

女性は驚いて、ライナのほうを振り向く。

ライナはニコニコ顔でガレキの上に座っている。

「何で傷がないか分からないって顔ですかね？」

「・・・・・何を・・・・」

「貴方は夢の中での出来事で、怪我をするんですか？」

「夢・・・・？」

「ええ夢です。正確には幻覚ですが」

つまりはと言うと、ライナに倒されたという幻覚を見せられただけ。

「現実では、僕の複写眼を見た瞬間、貴方は倒れました。で、どうせならと思い・・・・」

「・・・・・幻覚を見せた・・・」

「その通りです」

「・・・・私をどうするの」

「別に何もしませんよ。何処かへ行きたいなら行けばいいし、まだ戦い足りないなら相手にもなります。もしお腹がすいてるならご飯を奢りますし、殺して欲しいなら殺しますけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ただ何もしないっていうのは、選択肢にありません」

「・・・・・・・・・展開」

女性は転移魔法を発動した。ライナはそれを黙って見ている。

「・・・・・・・・・・二つ目のヒント」

「へ？」

「・・・・・失った罪」

「!?」

女性はその言葉を最後に、この場所から消えた。

「・・・・ルクス。ようやく場所が分かった」

『奇遇ですね。私もです』

「だが・・・よりにもよってあの場所か・・・・・・」

『よもや、また行く事になるとは思ってませんでした』

「僕もさ・・・・それにあそこのセキリュティは・・・・・・」

『侵入には骨が折れそうですね』

「・・・・・強行突破。あくまでバレないようにだけど」

『まあ、時間も無いですし仕方ありませんか』

「・・・・・しょうがない、帰りますかな。僕の第二の故郷――――――」

何時の間にか空には雲がかかり、太陽が隠れて辺りが暗くなる。

「管理局特務封鎖地域――――――――――通称ロストデリットへ」

これは呪われた眼・・・されど・・・・・・（後書き）

誤字脱字、感想があったらお願いします。

ロストデリット（前書き）

遅かった上に短いです。

ロストデリット

爆弾の起爆時間まであと5時間を切ったとき、ライナはある場所へ向うため山中を歩いていた。

「ロストデリット・・・・か・・・・・・」

管理局特務封鎖地域。

何らかの理由によって生物が住めなくなってしまっている所、もしくは色々と危険なのだが処理できない所、最先端技術を研究するために一般人には見せられない所などを、管理局が管理及び封鎖している地域を指す。

ミッドチルダにある特務封鎖地域は、首都を囲むような形で存在している。ギリギリだがミッドチルダの一地域。

そして、ここに入る事は余程の事がない限り無理で、一般人どころか管理局員も近づくことはない。

大多数の人々はこう認識している。しかし実際は・・・・・・。

「・・・・・・行きたくないんだけどな」

『ロストデリットは、1から23までエリアがありますが』

「一つずつ探すしかないでしょ」

『ですね。一つ一つが物凄く広いので、すべては探せませんが』

「だよね・・・・」

そしてライナは、周りを金網で閉じられている建物の前に着いた。

その周りには誰もおらず、明かりもついていない。

「見た目は楽に突破できそうだけど・・・・実際は？」

『ＡＭＦ発生装置と、それを囲うように物理障壁が張られていますね』

「つまり力ずくは無理と」

『ええ。ですから――――――――』

『「ハッキング」』

ライナは金網に触れないようにしながら、金網を見つめる。

「あるかな～～・・・・っと。発見」

ライナが見つけたのは、超小型の端末。

「これが物理障壁の制御システムなんだよね？」

『ええ、おそらく』

「じゃ、ちゃちゃっと終わらせますか」

ライナは端末にデバイスをくっ付けて、モニターを出した。

「ふっふっふ～～。この僕にかかれば、7億5千万のプロテクトなど和紙のような物よ」

『すごい恐ろしい事言ってますね』

「まあねっと、物理障壁解除完了」

『同時に、ここの官制プログラムの乗っ取りも完了しました』

「これでＡＭＦも関係ない」

そしてライナは普通に、金網を蹴り破って中に入る。

「おじゃましま～～す」

そして建物の扉の前に差し掛かる。

「オープン・ザ・ドア！」

『ロックを解除します』

バシュって音が出て、扉が左右にスライドする。

「さてと。ここ何処のエリアかな？」

ライナは辺りを見渡す。

『扉に１３と書いてあります』

「おっ、本当だ。ついでにロストデリット内の地図も」

ライナは、扉の裏側についてる地図をジロジロと見る。

「う～ん・・・・・・僕が目的としてるのは、４デリットなんだけど・・・」

『故郷・・・ですか？』

「僕に喧嘩を売る時点で、僕の過去と力を知っているはず。だからここで唯一、僕と関係のあるエリアが怪しいって事」

『それはそうですが・・・・』

「地図で言うと・・・結構近いな。一つのエリアを跨いでるだけだ」

『それではもうここに用はないですね』

「それもそうだ」

そんなわけで僕達はこの建物を出た。

すると・・・・・・。

ピカッ!!

「そこまでだ!!ライナ・リュート二等空尉」

たくさんのライトで照らされた。

「眩しいなぁ・・・・」

『本当ですね』

「こらっ!!話を聞け!!」

すると、ライトをバックに僕に怒鳴ってくるシスコン。よく見ると他にもいるな。

「何か?」

「〝何か?〟だと!?」

「ライナ君。何でこんなところにいるのかな?」

「場合によっては、いくら貴様でもただでは済まんぞ」

なのはさんとシグナムさんとシスコンがいた~~。

「ハハハ、ばれちゃったか」

「ああ。民間から通報があった。特務封鎖地域に入っていく人を見たとな」

多分それ、俺に喧嘩撃ったやつらじゃないかな?と思ったが、言うのはやめとこ。

「特務封鎖地域は管理局員でも、侵入は少将以上の方から許可を得なければならない」

「違反したものは、何人たりとも厳しい処罰を受ける」

「じゃあ、あなた方も処分受けるんですか?」

僕がそういうと、クロノが懐から何かを出した。

「すでに、許可は頂いている」

「じゃあ特務封鎖地域内の戦闘の許可は?」

「それも頂いている」

チッと思わず舌打ちしてしまった。

(戦闘許可をもらってなければ、まだ手はあったんだけど・・・・さすがはクロノと言ったところかな)

僕は両手を上げて、ヒラヒラと動かす。

「まいったまいった。これは勝敗は決したよ」

「バカを言うな。お前がそんな反応するときは、大体何か手を残している」

「さすがはクロノ。そこまで読んでいるとは」

「何を取って付けた様な」

「ライナ君。何でこんな場所に来たの？」

クロノとの会話に入るように、僕に話すなのはさん。

どうやらクロノ達もそれが一番の疑問らしい。

「・・・・・あるアニメであったんですけどね」

「？」

「正義で倒せない悪がいたとき、貴方ならどうする？」

「・・・・・・・・・」

「自らの正義を貫き悪に滅ぼされる？それとも己が悪となって正義を成す？」

「・・・・・・・・・」

皆黙る。答えは出ないようだ・・・・・それならそれでもいい。

「どちらにしても・・・・悪は残る」

「くだらん。言葉遊びか」

シグナムさんがズバッと切り捨てる。

「そう思うのならそれでもいい。だが、僕がここにいる理由はそれが全てです」

「つまりお前は・・・・悪を倒すため、自分が悪になるんだな?」

「クロノから見た僕がそうなら、そうなってるんじゃない?」

「・・・・・何が言いたい」

「君が見ている僕と、僕が信じてる僕は違うってことさ」

「どういう意味だっ!!」

「自分で考えればいいんじゃない?何でもかんでも甘えちゃいけないよ」

そして僕は周りを見渡す。

「ふ~~ん・・・・中々大人数できてるね」

「・・・・・チッ」

舌打ちするクロノ。他の二人は驚いている。

「僕に察知されたく無ければ、もう少し魔力を抑えることをオススメしますよ」

「・・・・・・どうしても投降はしないな？」

「クロノ。それは最後通告かい？」

「ああ」

「そうか。じゃあＮＯと返しておこうかな」

「そうか・・・・・・それなら、遠慮は要らないな！！」

次の瞬間、クロノは魔力弾を飛ばす。

「フッ」

僕は片手で指を鳴らすと、その魔力弾が消える。

「なにっ！！」

「まさか僕がこんな時を想定してなかったとでも？」

「・・・・・・ＡＭＦか・・・・！」

「その通り。僕はここの防衛プログラムの主導権を握っているから、ＡＭＦ発生なんて余裕さ」

「・・・・・・だが、お前のリミッターは」

「バカじゃないのか？お前」

そういいながら、僕は手首にあったリミッターを引きちぎる。

「こんなのただの飾りだろ？」

「・・・・・・・・・さすがと言うしかないな」

「今度は僕が最後通告だ。死にたくなければ、邪魔をしないでそこをどけ」

「ＮＯと返しておこう」

「他の二人もですか？」

クロノが拒否したので、一応二人にも聞いてみる。

「ああ」

「ライナ君。私は信じてるから」

この人達は・・・・・・なんて甘ったれた人達なんだろうか。

しかしだからこそ・・・・・羨ましいのかもしれない。

「・・・・・そうですか。では互いの意見が違うときに、互いの言うことを聞かせる方法はただ一つ」

「「「力でねじ伏せる」」」

見事にハモってしまった。

「ＡＭＦを解除してあげましょう」

「？　どういうつもりだ」

「いえ、あなた方がどんな道を選んだか、それを分からせるのにＡＭＦが邪魔なだけです」

「それはこちらの台詞だ」

「そうでしょうか。なぁクロノ」

「二人とも。気を抜くな」

僕の言葉を無視して、言葉を飛ばすクロノ・・・・・話す必要はないってことか・・・・。

「おもしろい。僕を止めたければ殺す気でかかって来い」

そして僕は一度、目を手で覆い隠す。

「！！マズイっ！！」

クロノが気付くが遅い。

「殲滅の複写眼（イーノ・アルファ・スティグマ）発動」

再び僕の目があらわになると、その目には、二重に重なった赤い五

亡星が映っていた。

ロストデリット（後書き）

誤字脱字、感想あったらお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2417n/

魔法少女リリカルなのは～～お昼寝大好きな天才～～

2011年2月13日15時41分発行